

透明人間

ハーバート・ジョージ・ウェルズ

海野十三訳

青空文庫

黒馬旅館くろうまりよかんの客きやく

影かげのような男

怪物かいぶつ！

そうだ、怪物にちがいない。

怪物かいぶつでなくて、なんだろう？

科学かがくが発達はったつした、いまの世

の中に、東洋とうようの忍術にんじゆつ使つかいじやあるまいし、姿すがたがみえない人

間かんがげんいるなんて、これは、たしかに変へんだ。奇怪きかいだ！

しかし、それは、ほんとうの話だつた。怪物かいぶつははじめに、も

のさびしい田舎いなかにあらわれた。それからまもなく、あちこちの町にも出しゅつぽつ没するようになったのである。たいへんな騒さわぎになつたことは、いうまでもない。

その怪物かいぶつの姿は、まるつきり見みえないのである。すきとおつていて、ガラス、いや空気くうきのように透明とうめいなのだ。諸君しよくんは、そ

んなことがあるもんか——と、いうだろう。だが、待ちたまえ！

怪物かいぶつが、はじめて田舎いなかのその村にやってきたのは、たしか二月もおわりに近い、ある寒さむい朝のことだった。身みをきるような風かぜがふいて、朝から粉雪こなゆきがちらちら舞まっていた。こんな寒い日は、土地のものだつて外を出あるいたりはしない。

その男は、丘おかをこえて、ブランブルハースト駅えきから歩あるいてきた

とみえ、あつい手袋てぶくろをはめた手に、黒いちいさな皮かわかばんをさ
げていた。からだじゆうを、オーバーとえりまきでしつかり包つつん
で、ぼうしのつばをぐつとまぶかにおろし、空気くうきにふれていると
ころといったら、寒ささむで赤くなっている鼻はなさきだけであつた。な
んともいいようのない、ぞつとするようなふんいきを、あたりに
ただよわせながら、黒馬旅館くろうまりよかんのドアを押しひらいてはいつて
きたのである。

「こう寒さむくちやあやりきれない。火だ！ さつそくへやに、火を
おこしてもらいたいな」

酒場さかばへ、ずかずかとはいってくるなり、ぶるると、からだを
ゆさぶつて雪ゆきをはらいおとし、黒馬旅館の女あるじに向かつて、

そう言った。

いまどき、めずらしい客きやくである。こんな冬の季節きせつに、しかもこんなへんぴな土地に、旅たびの商しょう人にんだつてめつたにきたことはないのだ。おかみさんは、びつくりもし、なげだされた二枚の金貨きんかをみると、すっかりよろこんでしまった。

「とうぶん、とめてもらうから」

客きやくをへやに案内あんないすると、暖炉だんろに火をもやしてたきぎをくべ、
台所だいどころでお手伝てづかんいにてつだわせて、おかみさんはせつせと食しょく
事のしたくをした。

スーきいろプ皿、コップなどを客室きやくしつにはこんで、食卓しょくたくのよう
いをととのえた。暖炉だんろの火はさかんにもえて、ぱちぱちと音をた

てている。

ところが、火にあたっている客は^{きやく}こちらに背^せをむけたまま、ぼ
うしもオーバーもぬごうとはしないで、つつ立っている。中^{なかにわ}庭
にふりつもる雪をみつめながら、なにか考えているようだった。
オーバーの雪がとけて、しずくが床^{ゆか}のじゅうたんの上にしたり
落ちていた。

「もし、あのう、おぼうしとオーバーを、おぬぎになりましたら
？ 台^{だいどころ}所でかわかしてまいりますわ」

と、おかみさんが声をかけた。

「いいんだ」

ふりむきもしないで、客が、ぶつきらぼうに言った。おかみさ

んはあわてて、残りの皿をとり、台所へもどった。

料理りようりをはこんで、もういちど客室きやくしつにきてみると、客はま

だ、さつきとおなじ姿勢しせいで窓まどのほうをむいていた。

「お食事しよくじのよういできました」

「ありがとう」

へんじはしたが、うごこうともしなかった。おかみさんがでていくと、男は、さつと食卓しよくたくに近づいた。そして、スープをせっかちにすすり、パンやベーコンをがつがつと食べはじめた。

つぎに、おかみさんがハム・エッグを皿さらにのせて、軽くドアを

たたいて客室きやくしつにはいつていくと、とたんに、男はナプキンを食卓しよくたくの下になげ、それをひろうようなかつこうをして、身を

かがめて口におしあてた。

（おやつ？）

と、おかみさんは思った。

ぼうしとオーバーはやつとぬいで、暖炉だんろのまえのいすにおいてある。長ぐつは、炉ろのかこの金具かなぐのうえにおいてあった。

「これはあたしが、かわかしてまいりましょう」

金具がさびちやあこまる、とおもつて、長ぐつを取りあげながら、おかみさんが言った。

「ぼうしは、いじらんでおいてくれ」

陰いんにこもったふくみ声で、客きやくはぴしりと言った。おかみさんはおどろいて、客のほうを見た。客はかの女をにらんでいる。

おかみさんは、ぎくつとして、その場にたちすくんでしまった。なんとという顔をしているのか……。男の口から下はナプキンにかくれて見えないが、青いめがねをかけたその顔は、頭から顔じゅうをほうたいでぐるぐる巻^まき、ほうたいの白^{はな}い中から鼻だけが赤くのぞいていて、そのぶきみさは、全^{ぜん}身^{しん}の毛がそうけ立つほどだった。

「あつ」

と、あやうく声をたてるところだった。男は茶色のびろうどの服のえりを立てて、顔をうずめている。

「いいかい、そのぼうしにはさわらんでくれ！」

もういちど、男が、こんどははつきりと言った。

「もうしわけありません」

おかみさんはぼうしだけ残して、オーバーなどをかかえこむと、にげるように客室きやくしつをとびだして台所だいどころにもどった。

ひとりきりになると、男は窓ぎわまどにいつて、まだ昼間ひるまだというのに、カーテンをひいた。へやのなかで、きゆうに、うす暗くなつた。

なに者ものだろう？

男は、じつによく食べた。

カーテンをひいて、へやがうす暗くなると、それで安心あんしんした

のか、食卓しょくたくにつくと、まるで三日も四日もたべずにいたかの

ように、皿さらのなかの物をかたつぱしからたいらげていった。

黒馬旅館くろうまりよかんのおかみさんは、

なんとも気もちのわるい客きやくをと

めたもんだと、考えこんでいたが、この男がまさか怪物かいぶつである

うとは気がつかない。ぶつきらぼうで、ぶあいそうな客だとはお

もうが、なにしろ先さき払いで宿料やどりように二枚の金貨きんかをわたしてい

る。わるい気もちはしなかった。

（あの人はかわいそうな人なんだよ、きつと！ ひどいけをし

てるらしいよ。どこで、どんなけをしたか知らないが、かわい

そうに……。だけど、ほうたいだらけのまつ白しろなあの顔かおには、ぞ

っとするわ。まるで化けばけものみたいだもの）

おかみさんは台^{だいどころ}所の暖炉^{だんろ}の火で、客^{きやく}のオーバーや長ぐつをか
わかしながら、そんなことを考えていた。

（ナプキンで口をかくしているところを見ると、口のまわりに、
大けがをしたんだよ。ぞっとしたりしては、気のどくだわ）

しばらくして、おかみさんが食^{しょくじ}事のあと片づけに客^{きやく}室^{しつ}に

はいっていくと、客はパイプでたばこをくゆらしていた。顔^しの下^{した}
半^{たはんぶん}分^{ぶん}にはマフラーをまきつけて、パイプを口にさしこむのに、

マフラーをゆるめようとはしないで、口もとをかくすようにして
パイプを吸^すっていた。

暖炉^{だんろ}の火が青めがねにうつって、赤^{あかあか}々とゆらいでいるが、ど

んな目をしてこちらを見ているか、とおもうと、やはり、ぶきみ

さが先に感じられてくるのだった。

めずらしく、客のほうからしゃべった。

「ブランブルハースト駅えきに、荷物にもつをおいてきたんだが、どうやったら取りよせられるね？」

「おや、それはおこまりでしょう。さあ、この雪ゆきでは……それに、こんな田舎いなかですからね。たのむといって、すぐに、人手がいいあんばいにございませんわね」

男はほうたいだらけの頭で、うなずいていたが、

「こまるなあ。どうしても、きょうじゃあだめかね？」

と言った。

「きょうじゅうには、むりでございますよ」

「あすになるか？　なんとか早く、とどけさせる方法はないものかな？　馬車ばしゃならいつてこられそうなものだが……」

がっかりしたようすで、なおもつづけた。

おかみさんは、この雪ではとてもだめだろうと、客のようすをさぐ探るようにながめながら、説明せつめいした。

「それがむりなんですよ。このうら山には、とてもけわしい場所がありますんでね、馬車ばしゃなんか通れやしませんよ。去年きょねんでしたか、馬車ばしゃがひつくりかえりましてね、お客さんと馬車屋ばしゃやが死しにました。とんだ災難さいなんで、まあ、こんな日には、おやめになったほうがようござんすね」

「なるほど、災難さいなんって、そういったもんかね」

男はそれいじよう、たつてたのもうとは言わなかった。

「マツチをとつてくれんか」

パイプをマフラーのあいだから口にさしこんで、おかみさんからマツチをうけ取った。そしておかみさんに背^せをむけると、窓^{まど}ぎわにいつて、カーテンのすきまから中^{なかに}庭^わの雪^{ゆき}をながめたまま、ひとことも口をきこうとはしない。おかみさんは、はつとして、へやをでていった。

ふしぎな男は、夕がたまで、へやにとじこもっていた。

怪^{かい}物^{ぶつ}の顔^{かお}

ふるびた時計とけいが四時をうった。あたりはいつのまにか、うす暗ぐらくなっていた。

宿やどのおかみさんは、さつきから、もうなん度も時計とけいをながめてはためらっていた。

（四時だわ、どうしてもあのお客さまきやくのところについて、お茶のご用をきいてこなくては………だけど、どうしたのかしら、わたしはどうもあのお客さまきやくの前にゆくのが、気がすすまないんだけど……）

おかみさんは、また一、二分考えていたが、きゆうに勇氣ゆうきをふるい起こして、さつと立ちあがった。そのとき、いきおいよく戸をあけて、

「おお！ おかみさん、えらく降りだしたじゃねえか。いやになるねえ、いつまでも寒くて、この大雪^{おおゆき}じゃ、わしのぼろ靴^{ぐつ}で歩くのはこたえまさあね」

と、大声でいいながら、戸口^{とぐち}でぶるぶるつと雪をはらつて、時計^{とけ}屋^いのテツデイ・ヘンフリーが寒^{さむ}そうにはいつてきた。

外では、まだ雪^{ゆき}がやすみなく降り^{ふり}つづいている。

「ああ、テツデイさん！ まったく、こう寒^{さむ}くてはやりきれないわね」

おかみさんは、こう言いながら、時計^{とけい}屋^やが片手^{かたて}にぶらぶらとぶらさげている修理^{しゅうり}道具^{どうぐ}のはいったふくろを見た^み、とたん、いいことを思^{おも}いついた。それは、

(テツデイといっしよにあの客きやくのところへゆく)

ということだった。そこで、

「テツデイさん、いいところへきてくださったわ、ちょうど、お客きやく部屋べやの時計とけいを見てもらいたいと思っていたのよ。あのへやの時計とけいときたら、動くのは、ちゃんとまちがいなく動くし、時間じかんだつて、元気げんきよく打つんだけど、針はりだけがいつも六時を指したきりなのよ。どうしたのかしら？」

「へんだねえ、ちよつくら、見てみましょう」

テツデイは首くびをかしげながら言った。おかみさんは、かれをつれて、れのふしぎな客きやくの部屋へやのドアをかるくたたいた。

へんじはなかった。が、おかみさんはさっさとドアをひらいて、

部屋へはいりこんだ。

「眠ねむつておいでらしいわ」

おかみさんは、ひとり言のようにひくくつぶやいた。

男は、暖炉だんろの前のひじかけいすに、ふかぶかと体からだをうずめて、

ほうたいだらけの頭をかしげ、うとうとと、いねむりをしている
らしかった。

灯ひのついていない部屋へやは暗くらかった。ただ赤々あかあかときかんに燃もえ
ている暖炉だんろの火が、あたりをぼんやりと照らしだしていた。

男は、うつぶせになったまま、身動みうごきもしない。

「まあ、なんて暗くらいんだろう。灯ひをつけないから、なんにも見え
やしない」

いままで、明るい台だいどころ所にいたおかみさんには、なにもかもが、ぼんやりと見えた。

「もし、だんなさま」

声をかけて、ひと足、男のほうに近づいた。と、つぎの瞬しゅんか間、

「あつ！」

おかみさんは、ぶつ倒たおれるかと思うほどおどろいてしまった。ひよいと見た男の顔が、なんと怪物かいぶつそのままの不気味ぶきみな顔をしているではないか！

暖炉だんろの火をうつして、赤く光る色眼鏡いろめがね、顔いちめんぐるぐるまきにしたほうたい、そしてなによりおそろしく思えたのは、

ぽつかりと深いあなのように開いている大きな口だった。まるで顔の下半分が、すっかり口にかわったのではないかと思うほどだった。

「う、うーん」

おかみさんのびつくりした声に目をさましたのか、男は、ゆらりと体からだを動かし、眠ねむそうにいすから立ちあがった。

「あつ」

男は、目の前にたまげた顔で立ちすくんでいるおかみさんを見ると、あわてて、襟えりまき巻のはしで口のあたりをかくそうとあせつた。

その間に、おかみさんは、やっとの思いで、気をとりなおし、

「だんなさま、時計屋とけいやが時計をなおしにまいりましたので、ちょっと……」

「時計をなおすのかい？ いいだろう——」

男は、とりつくろったようすで、重々おもおもしくこたえた。

「では、テツデイさん、ちよつと、待っててください。すぐランプをとつてきますからね」

おかみさんは、逃げるようにへやからでてきた。時計屋も、怪あやしげな客きやくの姿すがたを見て、どぎもをぬかれ、部屋へやにはいらずに、おかみさんが引つかえしてくるのをじつと待まっていた。

「お待ちどおさま！」

と言って、おかみさんは、ランプを片手かたてにもち、時計屋とけいやをうなが

すような目をして、もういちど部屋にはいつていった。時計屋があとにつづいた。

男は、部屋のまん中につつ立っていた。時計屋は、おずおずと、
「おじやまではございませんか？ お客さまきやく」

と言うと、男はちらりと色眼鏡いろめがねをきらめかして、

「いや、かまわんとも」

と、ごうまんな態度たいどでこたえた。時計屋とけいやは、なにやら、ぞつと背せすじが冷つめたくなるような、いやな感じをうけた。できることなら、時計の修理しゅうりなどはほうりだして、この部屋へやからでていきたくなつた。

と、男は、こんどはおかみさんにむかい、

「おかみさん！　ぼくのほかにはだれも、この部屋へやにはいらせない約束やくそくだったね」

と、つめたい声で不満ふまんそうに言った。おかみさんは、たじたと後ろうしろにさがり、

「ですけど、時計とけいだけは――」

なおしておかなくて、あなたがおこまりになるでしょうと、言うつもりだったが、おそろしさのために、そのあとの声がつづかなかった。

「むろん、時計とけいは正確せいかくでなくてはいけないよ。だが、ぼくは、この部屋へやにいつでもひとりで静しずかにいたいのだ。だれもはいつてこないように気をつけてもらいたいね」

ぶきみな男にどなりつけられると、時計屋は逃げだしたくなつた。もしもじ、手足を動かした。それをみると、男は、すぐに、「だけど、時計をなおしてくれるのに文句をいうつもりはないよ。けっこうだよ。なおしてもらおう。きみ、さつそく、やってくれたまえ」

時計屋とけいやのヘンフリーは、すぐわれたように大いそぎで時計にとびつき、修理しゅうりにかかった。

男は暖炉だんろをうしろにして、両手を背中せなかでくみあわせ、また、おかみさんにむかつて、

「おかみさん、時計がなおってからでいいから、お茶をいれてくれたまえ」

おかみさんは、

「ただいま、すぐ持つてまいりますわ」

と、いうより早く、出ていこうとした。男は、

「おっと、待つてくれたまえ、ブランドルハースト駅えきにある、ぼくの荷物にもつをとりよせるようにたのんでくれたかね」

「配達屋はいたつやにたのんでおきましたから、あすの朝早くとどきます」

「あすの朝……こん夜のうちに、とつてくるわけにはゆかないかね」

「ええ、だめでございますよ」

おかみさんは、むかつ腹はらをたてていた。と、みると男は、にわかにもものやわらかいようすになり、

「じつはね、おかみさん。ぼくは科学者なんだよ。いままではこのひどい寒さがこたえて、気分がすぐれなかったうえに、疲れきっていたので、なにをやる元気もでなかったが、ここで休んでいるうちにやつと元気がでたんだよ。となると、もうじつとしていられないんだ。すぐにも実験にとりかかりたくてね……これがぼくの性分なんでね」

人のいいおかみさんは、これを聞くと、たちまち、この男を怪しんだり、いやがったりしたことを後悔して、

「さようでございましたも、で、駅にございますお荷物の中に、実験道具をおいれになっていらつしやるのでございますか？」

「そうなんだ。全部ぜんぶはいつているんだ」

男は、おかみさんがじぶんを信用しんようしはじめたと見て、また話
しつづけた。

「ぼくがこの片田舎かたいなかのアイピング村へやってきたのは、だれに
もじやまされなくて、思うように研究けんきゆうをやりたいからなんだ
よ。実験じっけんをやってる最中さいちゆうにさまたげられると、たまらない
からね。それに、ぼくは、ちよつとけがをしてね」

（やつぱりそうだったんだわ。この方は怪しい人じゃなかったの
よ。お気のどくに……ずいぶんひどいけがをなさったらしいわ）

おかみさんは、心のなかでそう思った。男は、よわよわしい調子ちうし
で、

「そのうえ、けがのために視力^{しりよく}がすっかりよわってしまつてね。ときどき痛み^{いた}だと、何時間^{くら}も暗がりの中で、じつとしていなければならぬんだ。痛み^{いた}の起こつたときのつらさときたら、まつたくたえられないほどなんだよ。そんなときに、だれかに部屋^{へや}にはいつてこられると、とてもいやなんでね。だから、きみもよく心えていてもらつて、ぼくの部屋へ他人^{たにん}をいれなくてくれたまえ。しずかに休んでいたいんだからね」

「わかりました。よく氣をつけますわ。そんなひどいおけがを、どうしてなさいましたの？」

おかみさんは同^{どう}情^{じょう}のこもつた声で、やさしくたずねた。すると男は、

「話はそれだけだ」

うってかわった冷たさで言い、おかみさんが二度と口をひらかないように横をむいた。

おかみさんがでてゆくと、男はヘンフリーが時計の修理をやっているのを、じっと見つめはじめた。

ヘンフリーは、さつきからだまりこんで、せつせと手を動かし
ている。

針をぬき、文字盤をはずし、なかの機械をひっぱりだした。

かれはねんいりに機械をしらべた。男がじつとながめているの
で、かれはなんとなく気味がわるくて、仕事をしている手が思う
ように動かなかった。

十五分ほどたつと、時計^{とけい}はすっかりなおつたが、ヘンフリーは、いつまでもぐずぐずと機械^{きかい}をいじっている。時^{とき}がたつにつれて恐ろしさがうすらいでくると、かれは、

（この奇妙^{きみょう}な男の正^{しょう}体^{たい}を見きわめてやれ！）

と、いう氣になつていた。どうにかして、男と話すおりをつかみたいと思つたが、だめだつた。

男は、口をきかないばかりか、身動^{みうご}きひとつしないで、じつとつつ立つていた。

眼鏡^{めがね}のレンズが、青白く光つてヘンフリーを見つめている。

ヘンフリーは、たまらなくいらいらしてきた。

（ちえつ、なんていやなやつだろう。ぞつとするよ。まるで化^{ばけ}も

物のとむきあつてゐるような気もちだよ。人間なら人間らしく、

きようはひどく寒いねぐらいのことは、言つたらよさそうなものだよ。ぶあいそうなやろうだ。が、こういつまでもだまつても、らちがあかねえや。ひとつこちらから先に、声をかけてやろう。かれは決心けっしんして、男の顔を見あげ、

「この天気は——」

とたんに、するどい声がとんできた。

「さつさと仕事しごとを片づけて、でていったらどうだ？」

男は、どなりたいのをやつとがまんしているらしく、ふるえる声で言つた。ヘンフリーはまつさおになった。男は、かさねて、

「短針たんしんをじくにはめれば、すむんじゃないか。さつきから見

いると、やらないでもいいことばかりやつてるみたいだぞ」

ヘンフリーは、ぎよつとした。男はなにもかも見すかしているのだ。

恐ろしきで体^{からだ}が、がたがたふるえてきた。大あわてで仕事をす

ませ、道具^{どうぐ}を片づけると、あたふたと部屋^{へや}をでていった。

台^{だいどころ}所^{どころ}にくると、ヘンフリーは、いそがしそうに働^{はたら}いている

おかみさんに、

「さようなら」

と、ふきげんなみじかいあいさつを残^{のこ}して、さつさと、雪^{ゆき}がふる外へとびだした。

道にはすっかり雪がつもっていた。

「ちくしようめつ！　なにが科学者だい。学者つてものは、もうすこし上品じょうひんなもんだよ。大きなつらをしやがって……あいつは悪魔あくまかもしれねえぞ」

時計屋とけいやは、道々みちみち、思いつくかぎりの男のわる口をつぶやいた。それでも、やはりむしゃくしゃしていた。

気をつけたがいいぜ！

時計屋とけいやがどんどん歩いて、グリーンソン屋敷やしきのかどまできたとき、のんきな顔で馬車ばしゃを走らせてくるホールにぱったりと出あった。

「よう！　どうしたい、ヘンフリー！　浮かねえ顔で、やけにい

そいでるじゃねえか」

ホールがくつたくのない声をはりあげた。

ホールは、怪しい男が泊まった黒馬旅館のあるじなのだ。

かれはみるからに人の好いのんき者で、ホール夫人に氣にいるように、てきぱき働くことなど、ぜったいにできない男だった。

ホールの仕事といえ、ときどき、シツダーブリッジ駅まで馬車を走らせ、荷物をはこんでくるのが、せいぜいだった。

いまでも、駅からのかえり道で、いつもとおなじようにホールは途中で、さんざん世間話に油を売ってきたところである。

ヘンフリーは、ホールに声をかけられると、いんきな声で、

「ホール、おめえのそこには、へんな客がとまっているな」

「なんだって？」

お人よしのホールは、すぐに馬車ばしやをとめて、時計屋とけいやのほうへのりだしてきた。

「おめえ、知らねえのかい？ あのみようちきりんな顔きやくの客きやくのこ
とを……」

ホールは首くびをふった。ヘンフリーは、
「おれもおどろいたぜ。おかみさんが客間きやくまの時計とけいをなおしてく
れっていうんで、いっしよに客間きやくまにはいったらさ、顔じゅうほう
たいだらけの、色眼鏡いろめがねをかけて、おつそろしく口の大きな、へ
んな顔の客がいるじゃねえか。おどろいたの、なんのつて……お
つたまげたよ」

ホールはおどろいて、口をぽかんとあけてきいていた。それを見ると、ヘンフリーはますます熱心ねっしんに、客のようすをしゃべりたてた。

「あれはおめえ、よくねえやつかもしれねえぞ。じぶんでは科かがく学者しやだなんて言ってるが……どうだか、わかったものじゃねえ。あいつは、変装へんそうしてるのかもしれないぜ。どこかで悪事あくじを働はたらいて、それをかくすために、ああいうかつこうをして、なるべく人を近よせないでおくつもりかもしれないね」

「うちのやつは知ってるのかね？」

ホールが、心ぼそそうな声をだした。

「もちろんだよ。おかみさんもおかみさんだよ。なんだって、あ

んな男をとめる気になつたんだろう？ おれが宿屋やどやのあるじなら、

相手の顔をよくよくながめ、名まえをたしかめてから、泊とめるか、

泊とめないか決めるね。女つてものは、よそものつていうと、とか

く信用しんようしがちなものさね。まして科学者かがくしゃなんていうと、なお

さら信用しんようするがね。部屋へやをかりて、名まえを言わねえような男

は、ろくな人間にんげんじゃねえやね」

人がいいばかりで、頭の働はたらきのにぶいホールは、ぼんやりと、

「そう言うもんかね」

「あたりまえだよ。しかし、おかみさんは、一週しゅうかん間のけい約やく

をむすんでしまったんだ。いまさら、あいつがどんな悪者わるものだつ

たとしても、一週間のあいだは追いだすことはできないんだ。あ

すになると、あいつのいう実験道具とやらが、どっさりはこびこまれるらしいぜ。なんの実験じっけんをするつもりだかわからないがね」

「ふうん」

ホールは、心配しんぱいそうに考えこんでしまった。ヘンフリーは、

なおもくどくどと、

「用心ようじんしたほうがいいぜ。おれのおばさんもね、ヘイスティン

グズでやはり宿屋やどやをやっているがね。見なれぬ客がえらく大きな

りっぱなかばんをさげてきたのをみて、すっかり信用してしまっ

たのさ。ところがそのかばんは中がからっぽで、それに気づいた

ときは、たくさんの宿料やどりようをふみたおされて、逃げにられたあと

だつたんだ。おめえたちも、怪しい客には、よくよく気をつけた
ほうがいいぜ」

「ありがとう、ヘンフリー。こいつはどうも、うちのやつにちよ
つくら、言つてきかせなくてはなるまい。これから大いそぎで帰
ろう」

すっかり不安になつた黒馬旅館くろうまりよかんの主人しゅじんホールは、馬にひ
とむちあてると、いちもくさんに家へむかつて走つた。

いきおいこんだホールが家にとびこむと、

「おまえさん！　いつまで外をうろうろしてたんだい？　また油あぶら
を売つてたね。そうでなくて、こんなになかく時間がかかるはず
がないじゃないの！」

ホール夫人ふじんのがみがみとどなりつける声がとんできた。

「なに……それが、あの……その」

と、いままでの元気はどこへやら、ホールは叱しかられた猫ねこのようにいくじなくちぢまって、しばらくたってから、やっとこさで、

「おまえ、新しいお客きやくがあつたつてね。いったいどんな方かただい？」と、おずおずしながら聞いた。

「だれに聞いたの？ ヘンフリーがおしやべりしたのね。どんな方かたつて……りっぱな方かたよ。あなたになんか、あの方かたのことを話はなしたつてわかりやしないわ。科学者かがくしやなんですつて」

それからあとは、いくらホールが聞いても、気のないへんじをしてごまかしてしまった。

（ちえつ、あいつ、おれにかくしだてをする気だな。いいよ。おれはじぶんの目で、そのへんな客きやくつてやつを見てやるから——）

ホールは、おかみさんにいくら聞いても、それいじようは話さないとわかると、だまって決心けっしんをした。

九時半になった。怪あやしい客きやくも眠りこんだらしく、黒馬くろうまり旅館よかんは物音ものおとひとつしなくなつた。

「やつも眠ねむつたらしいね。どれ、ひとつ、どんなやつだかしらべてこよう」

ホールは立ちあがり、足音あしおとをしのばせると、むこう見ずにも、客間きやくまにそろそろとしのびこんでいった。思ったとおり、客きやくは、ふかぶかとベッドにもぐりこんで眠ねむつていた。

ホールは、きよろきよろとあたりを見まわし、机つくえのうえいつぱいに、むずかしそうなこまかい数字すうじをかきこんだ紙かみが散ちらばつているのをみると、ばかにしたようすで、

「ふふうん！」

と、鼻はなのさきでせせら笑つて、ひきあげた。

お人よしのホールは数字すうじをかきこんだ紙を見ただけで、このへんな客きやくが、おかみさんの言うとおり、学がくしや者なのだと思いこみ、すつかり安心してしまったのである。

一方、おかみさんは、主人しゅじんにむかつては、きつぱりと強がりと言つたものの、内ないしん心はやはり、客きやくのことが気になつてしかたがなかつた。

ベッドにはいつてからも、夜つびて大きなかぶらのようにまっ白な、ぶきみな顔に追いかけられる夢^{ゆめ}をみて、うなされつづけた。

ちよつとした事件^{じけん}

「おはようございます。荷物^{にもつ}を持ってあがりました」

馬車屋^{ばしや}のフィアレンサイドが、つぎの朝はやく元気のいい声をひびかせて、馬車^{ばしや}をひき、黒馬^{くろうまり}旅館^{よかん}にやってきた。

寝^ねぶそくらしく、はれぼったい目をしたおかみさんが、主人^{しゅじん}のホールといっしょにでてきた。

「ごくろうさま」

「きようは、きのうの雪ゆきのために、道がひどいぬかるみになっていて、えらい難儀なんぎでしたよ」

フィアレンサイドが、二人の顔をみるなりこぼした。が、二人は、かれの言葉ことばなどまるで耳にはいらぬようすで、馬車ばしやにつまれている、ふうがわりな荷物にもつに見とれていた。

ふつうの人間にんげんの持物もちものらしいのは、トランクだけだった。ト

ランクは二個あった。そのほかの荷物にもつときたら、何なんともいえずふ

うがわりなのだ。なにをつめてあるのか、中の物がこわれぬよう

に麦むぎわらをぎゅうぎゅう間あいだにつめこんだ籠かごが十二、三個こ。それに

ぶあつな本をおしこんだ箱はこが数えきれないほど、そのほかにもえたいのしれぬ荷物にもつが山とつまれている。

ホールは馬車ばしゃに近より、籠かごの中に手をつっこみ、詰物つめものの麦わむぎらをかきわけてさぐった。

中は、ガラスびんらしい。おかみさんは、客をよびにいった。
「荷物にもつがきたんだって？」

男はうれしそうに、声をあげてとんできた。みるとおどろいたことに、男は、へや着ぎのうえから、オーバーを着、帽子ぼうしをかぶり、手ぶくろをはめ、ごていねいにえりまきまでしつかりと身につけていた。

フィアレンサイドもホールも、男の身じたくが、あんまりものものしいのに、あつけにとられて、ぼんやりとかれの顔を見ていた。男は、せきこんで、

「ずいぶん待たされたよ。さつそく運びこんでくれたまえ」

言いながら、待ちきれないように、荷馬車にばしゃのうしろにまわり、籠かごのひとつに手をかけようとした。

そのとき、フィアレンサイドがつれてきていた犬いぬが、とつぜん、かれの姿すがたをみて、毛をさかだて、ものすごいなり声をあげた。

男は、気にもせず、

「いいかい、どれもだいじなものだから、気をつけて運んでくれたまえよ」

と、いいつけ、玄関げんかんの石段いしだんをあがりかけた。とたんに、犬いぬはひとときわ高くうなり声をあげ、ぱつと男の手にかみついた。

「うわっ！」

男は、大声をあげた。びつくりしたホールとファイアレンサイドは、

「こらっ、こいつめ！ なにをするのだっ」
と、あわててどなりつけ、ファイアレンサイドは犬いぬをぶちのめそうと、むちをふりまわした。

そのとき、男は、目にもとまらぬ早さで、ぱつと力まかせに犬いぬをけとばした。

ふいをくらった犬いぬは、よろよろとよろめいたが、こんどは、猛も然うぜんとうなり声こえをあげ、もう一度男におそいかかったとみるや、その足に、がぶりつとかみついた。

びりびりと、ズボンがさける音がした。

「ひやあつ！」

とびあがつたファイアレンサイドが、

「こんちくしょうめ、こんちくしょうめ」

と、さけびながら、こんどこそ、したたか犬をたたきのめした。
きやんきやんと犬は悲鳴をあげ、車の輪のあいだに逃げこみ、
小さくなった。

すべてが、あつという間のできごとだった。

気まずい空気がみんなのあいだに流れた。男は、かみさかれた
手袋とズボンのすそを、しゃがみこんでしらべていたが、その
ままくりとむきをかえ、いちもくさんに旅館のなかかけこみ、
足音もあらく、じぶんの部屋にはいつてしまった。

ファイアレンサイドは、やっと我にかえった顔つきで、

「でてこい！ わるいやつだ。とんだいたずらをしくさつて。お客さまのズボンをかみやぶったではねえか……」

そして車の輪のあいだから、おく病そうにこちらをうかがっている犬に、むちをふりまわしてみせた。

ホールは、まだ、ぼんやりとつつ立っていた。ファイアレンサイドが浮かぬ顔で、

「ホール、あのお客さまにけがはなかっただろうかね？」

「ひどくかみつかれなさったようだったけど、おれ、ちよつと、部屋へいって、ようすをうかがつてこよう」

ホールは、あたふたとかけだした。廊下までくると、これも浮

かない顔で歩いてくるおかみさんにぼったりとあつた。

「フィアレnciaの犬いぬが、お客さまの手と足にかみついたんだ」

ホールはせきこんで、眉まゆをしかめながら言つた。が、おかみさ

んは、ちよつと、うなずいたきり、足もとめないですれちがつてしまつた。

客の部屋きやくへやのドアは、ひらいたままだつた。

「お客さま、おけがはありませんでしたか？」

ホールは、声をかけ、なにげなく部屋へやにはいろいろとした。

窓のカーテンはすっかりおろされ、部屋の中はうす暗ぐらかつた。

その中に手首てくびからさきのない腕うでが、にゆつとかれのほうにつきだされ、のつぺらぼうのまっ白な大きな顔が、うす青い三つの深ふかい

穴^{あな}をあけて、空^{くうちゅう}中に浮^ういていた。

あつと思うひまもなく、ホールは、なにものともしれぬ強^{つよ}い力に、どんと胸^{むね}をつかれ、ひとおしに廊下^{ろうか}につきだされてしまった。「うわあつ！」

よろめきながら、ホールがさけぶと、その目のまえに、ドアがばたんと音をたててしまった。

ホールは、しばらく、ドアを見つめて、ぼんやり考えこんでいた。

「これは、いったい、どうしたってことなんだ。どこのどいつがおれの胸^{むね}について、廊下^{ろうか}にほうりだしやがったというのだ……」

さっぱりわけがわからない。

いっぽう、宿屋やどやのまえは、ものめずらしげにあつまってきた村の人びとで、黒山くろやまの人ばかりになっている。

フィアレンサイドは、その人たちを相手あいてに、さっきのできごとを、くりかえしくりかえし話していた。

「おれがとめるひまもないほどのすばやさで、こいつは、がぶりとお客きやくさまの足にかみついたんだ。へいぜいおとなしいやつだのに、どうしてあんならなぼうなことをやったのか、さっぱりわからねえ」

フィアレンサイドは頭をふりふり、いく度たびも言った。

「だけどさ、ふしぎじゃないかねえ。ただ立っているだけの人に、なんだってかみついたのかしら？」

話をきいていたおかみさんのひとりが、口をはさんだ。雑貨屋ざっかやのハクスターがもつともらしいようすで、

「そうだよ、われわれがここに立っていても、こいつはかみつかないのにさ」

「だけど、もとはつて言えば、ファイアレンサイドがこんなろくでなしの犬いぬをかつているのが、大さわぎをおこすもとなんだよ」

また、ほかのひとりがいった。

ひとりがだまれば、ひとりがしやべり、旅館りょかんのまえはたいへんなさわぎだった。

このさわぎの中に、ホールは魂たましいをなくした人間にんげんのように、ぼうつとしていた。

目ざとく見つけたおかみさんは、

「おまえさん、どうしたの？ なにかあったのかい？」

「いいや、なんでもねえ」

ホールはうつろな目で、集^{あつ}まってきた人たちを見ていた。

その荷物^{にもつ}は？

おしやべりに夢^{むちゆう}中^{ちゆう}になっていた村人たちは、その男がいつのまにか、その部屋^{へや}から玄関^{げんかん}にでてきていたのに、いっこうに気づかなかった。

「う、うう、わんわん！」

車のかげに小さくなっていたファイアレンサイドの犬が、きゆうにはげしくほえたてた。

「あつ！」

思わずふりかえった人びとは、玄関げんかんに不気味ぶきみな人かげをみて、ぎよつと顔色かおいろをかえた。

そのとたん、

「馬車屋ばしやや、なにをぐずぐずしているんだ！ はやく荷物にもつをはこべ！」

すご味みのあるどなり声が、あたりをふるわせてひびいた。ファイアレンサイドが、びくつと飛びあがり、ホール夫人ふじんは棒立ぼうだちになった。

村人は、くものこをちらすように、後もみずがちつていった。

馬車屋は、しばらくためらっていたが、勇氣をふるって男に近

より、

「だんなさま。あいすみませんことで……おけがはありませんで
すか？ なんと、はや、申しわけありません」

ぺこぺことわびた。男は、じろりと馬車屋をにらみ、

「けがなんかせんよ。かすり傷ひとつしてないんだ。それより早
く荷物をはこべ」

と、おうへいな態度で言った。

馬車屋とホールの手で、荷物は男の部屋にはこびこまれた。

男はすぐさま荷物をほどきにかかった。じれったそうに、間に

つめた麦むぎわらをほうりだし、中のガラスびんをひとつずつ、だいじそうにとりだした。どのびんにも液体えきたいや粉末ふんまつがつまってい
る。

男は、おびただしい数かずのガラスびんをとりだすと、こんどは試し験けん管かんをとりだした。

つぎに、はかり、そのつぎは、えたいのしれぬ機械きかいだつた。

「やれやれ、これですつかりとりだしたぞ。ぶじに荷物にもつがとどいてなによりだ。うすのろの馬車屋ばしやめ、おれのだいじな荷物にもつをだいなしにしないかと、はらはらしたよ」

男は、ほつとしたようにつぶやき、麦むぎわらや空籠あきかご、空箱あきばこで、すつかり部屋へやが汚よごれてしまったのも、気かつかぬようだった。

「さあ、さつそく、とりかかろう」

男は、息をつくひまもなく、窓のちかくに機械をならべ、実に
駭にとりかかった。

いつのまにやら、暖炉の火はきえ、底びえのする寒さがしんと
せまっていた。

しかし、男は暖炉の火が消えたことなど、これっぽちも気に
していなかった。

試験管をならべ、毒薬とかかれた茶色のびんをとりあげ
ると、試験管の中に、たらたらと、三、四滴の液をたらしこんだ。
こんどは、それを火にかけ、また、ほかの薬品のふたをとつ
た。

男は、ながい間、こうしてなにもかもわすれ、ただ実験^{じっけん}にね
つちゆうしていた。

時はすぎ、いつのまにか、昼^{ひる}がきていた。ドアをたたく、かる
い音がひびいた。

男はすこしも気づかない。おかみさんが、昼の食事^{しょくじ}をはこん
できたのだった。

ドアをたたく音は、しばらくつづいていた。男は、むちゆうで
試験管^{しけんかん}をふっていた。

たまりかねたおかみさんは、とうとう、だまってはいつてきた。
「まあ！　これは……」

ひと足ふみこんだおかみさんは、たちまちしかめっ面^{つら}になって、

ふきげんな声をはりあげた。

部屋^{へや}がだいなしになっている。わらくずがちらかり、古^{ふる}トランクがなげだされ、空^{あき}籠^{かご}がほうりだされてある。

おかみさんはいきなり、腹^{はら}だちまぎれに、テーブルの上の麦わらを手荒くほうりだした。

がしやんと、食事^{しょくじ}の皿^{そら}をその上に、音をたててなげだした。

男は、はじめて、「おやつ？」と、いうように顔をあげた。

「お食事^{しょくじ}をもつてまいりましたわ」

おかみさんは男をにらんで、つつけんどんに言った。

男はへんじもせず、うつむいたままで、テーブルの上においてある眼鏡^{めがね}を大いそぎでとりあげてかけると、やっと、ゆつくりと

おかみさんのほうにむきなおった。

男の動作はすばやか^{どうさ}った。しかしおかみさんは、その間に目玉^{めだま}がぬけ落ちて、ぽかりと二つの深い穴^{ふか}があいているような男の顔に気づいていた。が、なにくわぬ顔でつつ立っていた。男はいたけだかに、

「この部屋^{へや}に用があつたら、ノックをしてからはいってもらいたいね」

「ノックはいたしましたわ。なんともなんとも。でも、だんなさまが、お気づきにならなかつたんですよ」

「それはしたかもしれんさ。しかしだね。この実験^{じっけん}は一分^{ぶん}もはやく完^{かん}成^{せい}させなくてはならんだ。じゃまがはいるとひどくめ

いわくするんだ。ドアがあく音がするだけでも気がちつてこまる。いちど言ったことは、かならず守^{まも}つてもらいたいね」

おかみさんはぶんぶんして、

「わかりました。それでしたら、お部屋^{へや}に鍵^{かぎ}をおかけになったらいかがですか？」

「なるほど、そうだったな。では、これから鍵をかけることにしよう」

男は、落ちつきはらってこたえた。おかみさんはなおさらいま
いましそうに、

「よろしかったら、この麦^{むぎ}わらを片づけましょうか？ ひどくよ
ごれて……」

男はぎろりとおかみさんをにらみ、きつぱりと、

「ふれんでもらいたいね。この麦わらであなたにひどくめいわくがかかるといふのなら、その分だけ金かねをとってくれたまえ。えんりよなしに勘定書かんじょうがきにつけておいてくれればいいよ」

これを聞きくと、いままでぷりぷり腹をたてていたおかみさんが、
急にねこなで声で、
きゆう

「それはおそれいます。どのくらいお掃除代そうじだいをいただけましょうか？」

「一シリングでいいだろう？」

「けっこうですわ」

「では一シリングとつけておきなさい。」

勘定かんじょうをするときにい

つしよに払^{はら}うから」

「ありがとうございます。ではどうぞ、お食^{しょくじ}事をなさつてくだ
さいませ」

おかみさんは礼^{れい}をいい、テーブルかけをひろげて、食^{しょくじ}事のし
たくをととのえ、逃^にげるように部^へ屋^やをでていった。台^{だい}所^{どころ}へも
どりながら、

「なんておかしな人だろう。でも、掃^{そう}除^じ代^{だい}が一^{いっ}シ^しリ^りン^んグならわ
るくないわ」
と、つぶやいた。

うわさ話^{ばなし}

黒馬くろうまりよかん旅館りやかんに平和へいわはなくなつてしまつた。このいなかの旅館りやかんは、いつもひっそりと静しずかで、一番客いちばんきやくのたてこむ夏の間にさえ、たいして變かわつたことがあるわけでなく、おだやかな毎日がくりかえされていた。

ところが、奇妙きみような男がやつてきてからというものは、おかみさんも主しゅじん人のホールもすっかり落おちつきをなくしてしまい、ともすれば暗くらい氣もちにおそわれるのだった。

男の部屋へやからひきとつてきたおかみさんは、くるくると忙いそしげに働はたらきつづけていたが、心の中では、ずっと男のことを考えつづけていた。

客の部屋は、一日中ひっそりと静かだった。

夕方、とつぜん、れいの客の部屋から、ものすごい音がひびいてきた。

がちやーん、がちやがちやがちや！

ガラスびんや試験管がぶつかりあつたらしい、はげしい音だった。

「たいへんだ！」

おかみさんはひと声さけぶと、手にしていた鍋をほうりだし、
台所からよこつとびにとびだしていった。

どん、どんどん……。

はげしく客の部屋の戸をノックした。なんのこたえもない。

どーんと体からだごとぶつかってみた。しかし、ドアは内うちがわから、しつかりと錠じょうがかかっている。

こんどは、ドアにぴたりとくつつくと、じつときき耳みみをたてた。

部屋へやの中からは、男のわめく声が聞こえてきた。

「だめだ、また失しっばい敗だ。どうもうまくいかんぞ。三十万かな、いや、四十万かな、なにしろたいした数かずだ。おれはだまされたのかな？　こんなことをやっていたら、一生かかってもできあがらないぞ、こまったなあ」

怒いかりと悲かなしみにしずんだ声だった。

それつきり、しばらく声はとぎれていたが、また、氣をとりな

おしたのか、

「やつぱりがまんしてつづけよう。ここで投げだしては、いままでの苦心くしんも水の泡あわだ。それにしても、こんど、あいつに会ったら、ただではすまさんぞ」

おかみさんには、なんのことかわからなかったが、いかにも意味いありげな言葉ことばだった。

おかみさんは、全身ぜんしんを耳みみにして、男の声を聞いていた。
そのとき、

「こんにちは、おかみさん。いっぱいのませておくんなせえ」
おおごえ 大声おおこえをあげて、入口いりぐちの酒場さかばに客きやくがはいつてきた。

「ああ、もうすこし聞いていれば、なんのことだかわかるかし

れないのに……」

おかみさんは舌うちをしながら、酒場^{さかば}にでていった。

部屋^{へや}のさわぎはおさまったらしく、それつきり二度とさわぎはおこらなかった。ときどき、いすがきしむかすかな音と、びんがふれあうひびきが、かすかにきこえるだけだった。

いつぼう、馬車屋^{ばしや}のフィアレンサイドは、黒馬旅館^{くろうまりよかん}にきみような客^{きやく}の荷物^{にもつ}を運んだ日の夜おそく、アイピング村のはずれのちいさなビヤホールで、一杯^{ぱい}かたむけながら、いつまでもいきおいこんでしゃべりつづけていた。

あいては、時計屋のテツデイ・ヘンフリイともうひとりの村の男だった。

「おれはこの年になるまで、あんな変なやろうは見たことがねえよ。おれの犬が、あいつの足をがぶりとやったとき、おれはたしかに見たんだよ。あの男の足はまつ黒なんだ」

「ほんとうかい？ 人間の足がまつ黒だなんてことがあるものかなあ」

「おれの言うことをうたぐるのかい？ おれはちゃんと見たんだぜ。ズボンのさけ目と手袋のやぶれたところから、はつきり黒ん坊のようにまつ黒な肌がみえたんだ。おめえなんか、どう思っていたかしらねえがね」

フィアレンサイドは、酔いのまわつてきたビールのいきおいもあつて、テーブルをたたきながら、がんとして言いはった。ヘン

フリーはまだ半信半疑で、

「だとすると、おかしいじゃないか？ あいつの鼻はちゃん和白いんだぞ」

「そうだよ。おめえの言うとおり、やつの鼻は白いんだ。だからさ、おれが考えるのに、たぶんあいつの体はあちこち色がちがうんだろう。白いところと黒いところがあつてさ。まだらになつてるだろうよ。だもんで、やつは恥はずかしがつて、あんなにえり巻まきやオーバーをしつかり身につけて、かくしてるんだよ」

「まるでシマ馬うまみたいじゃないか。白と黒のまだらだなんて、はっはっは」

「はっはっはっはっは」

三人は声をあわせて笑^{わら}いころげた。いつまでたっても、かれらの話^{はなし}はつきそうもなかった。

夕^{ゆう}ぐれになると

馬車^{ばしゃや}屋のフィアレンサイドと時計^{とけい}屋のヘンフリイの口から、黒^くろ^ろう^うまり^まり^りよ^よか^かん^ん馬^ば旅^{りょ}館にとまったきみ^きような客^{きやく}のことは、たちまちのうちにアイピング村にひろまっていた。

うわさはうわさを生^なんで、村人たちはよるとさわると男の話でもちきりだった。

しかし、村人たちはかれの姿^{すがた}を見かけることは、ほとんどなか

った。男はたいてい部屋へやにこもりきりで、いつしんに実験じっけんをつづけていたからだ。日曜日にちようびに、村の人たちがみんなそろってでかける教きようかい会へもこないし、日曜だからといって、ゆつくりやすむということもなかった。

ふるくからの習しゅうかん慣をまもって、平和に暮くらしている村の私たちは、この男のやることが気まぐれで、ひどく変わっているように思えた。

「黒馬くろうまりよかん旅館では、よくあんな変かわった客きやくをとまらせておくねえ。どんな考えでいるんだろう」

村人は、ホールやおかみさんのホール夫人に聞こえぬところで、よくこんなことをささやきあつた。ホールは、こんなかげ口

を耳にはさむと、

「おい、どうかして、あの客をことわるわけにはゆかないのかい？」

と、いやな顔をしながらホール夫人に言った。かれはその客がきらいだった。廊下でばったり顔をあわせるようなことがあつても、わざとよこをむいて、虫が好かないことをあからさまにしめしたりした。

おかみさんは、主人が客のことを言いだすと、できるだけひやかかな態度をとり、いかにもりこうぶつた口ぶりで、

「ただ虫がすかないからつて、あんなに金ばなれのいいお客さんをことわる人があるものですか。夏になつて絵かきさんたちが避

暑しよにくるまでは、氣むずかしくても、きちんきちんとお勘かんじよう定じようを払はらつてくれるお客を、だいじにしなくてはね」

こういわれると、ホールはだまりこんでしまった。

ところが、金かねばなれのいいはずの男も、四月にはいると、そろふところがさびしくなってきたようすだった。それまでは、たびたびおかみさんの顔をしかめさすようなことをしでかしても、そのたびに、さっさとよぶんのお金をはらって、ホール夫人に叱こ言ごとをいわせるようなことはなかったが、四月になつてからは、目にみえて金ばらいがわるくなつてきた。

こうなると、さすがのおかみさんも、ときにはいやな顔を見せるようになってきた。

その日も、ホールとホール夫人^{ふじん}がおそい昼^{ちゆう}食^{しよく}をとっている
と、その部屋^{へや}からいらいと歩きまわる客^{きやく}の足音^{あしおと}がひびき、そ
のうちにはげしい怒^{いか}り声^{こえ}とともに、壁^{かべ}になにかをぶつけるけたた
ましい音がきこえてきた。

「おい、またはじまったじゃないか。いまにあの部屋^{へや}はめちやめ
ちやになつて使いものにならなくなるぞ。おれがいったように、
あんなえたいのしれないやつは、早く追いだしてしまったほうが
よかったんだ」

ホールがおかみさんにむかつて言った。

「うるさいねえ。なにかつて言えば、つべこべとうるさいことば
かり」

おかみさんは高びしやに言った。しかし、ホールも負けてはいなかった。

「なんだい、あんなへんな客きやくを泊とめるくらいなら、いつそ化物ばけものでもとめたほうが気がきいてるよ。まだ夜もあけないうちから起きだして、いそがしそうに動きまわるかと思うと、昼ひるすぎてやつとベッドをはなれて、ゆつくりたばこをすいながら、なん時間ものこのこと部屋を歩きまわっている。ときによると一日いちじゅう中ちゆうなんにもしないで、暖炉だんろのまえでいねむりばかりしているときもあるじゃないか。ことに、このごろのいらいらしてるようすときたら、ただじゃないよ。とんでもないことをしでかさないうちに、でていってもらったほうがいいぜ」

二人のあらそいはいつまでたってもおわりそうもなかった。ことに客の金きやくかねばらいがわるくなつてからは、よけいにホールが、おかみさんにしつこくいや味みをいいはじめた。

さわぎは黒馬くろうまりよかん旅館の中だけではなかった。このごろアイピング村では、日が暮れるがはやいか人びとは、しつかりと戸口とぐちの錠じようをかけ、いつまでも寝ねないでいる子どもにむかつて、

「いつまでも寝ないでいると、黒馬くろうまりよかん旅館のこわい男がやつてくるぞ」

というのだった。村人むらびとたちは夕ぐれ時、頭から手の先まですっかりつつみこんだかつこうで、人ひと通りの少ないうら道とか、木のしげりあつた暗いくらじめじめした場所を散歩さんぽしているれの男に

でくわすと、子どもだけでなく大人おとなでさえ、ひやつと背せすじにつめたい水を浴あびせかけられたような気分きぶんになった。

怪あやしい客きやくの正しょう体たい

牧師ぼくしの家の怪盗かいとう

四月になった、とある日、とうとうたいへんな事件じけんが持ちあがってしまった。

事件じけんというのは、牧師館ぼくしかんに気味きみのわるいどろぼうがはいったことなのだ。

夜あけもまちかな、人の寝しずまったしずかな時間だった。

「おやつ？」

牧師の夫人は、そつとベッドに起きあがり、耳をすませた。じぶんのねむっている部屋へやのドアが一度あいて、またしまる音を聞いたような気がしたのである。

しかし部屋へやには、なんのかわりもない。気のまよいかたと、夫人がよこになりかけると、となりの部屋へやから、ぱたぱたと、はだしで歩く足音あしおとがはつきりときこえた。

「あなた」

夫人は、ふるえながら牧師をゆり起こした。

「どろぼうよ。ほら足音あしおとが……ね、階段をおりていったでしょ

う

牧師は、夫人の言うとおりに、はつきり足音がしているのをきくと、きつとガウンをはおりスリッパをつっかけて部屋をでた。下のへやから、ごとごとと机のひきだしをあける音がする。

「ほら」

つづいてでてきた夫人が、そつとひじをつついた。

「よし」

牧師は、大またに寢室へひつかえすと、やにわに、すみっこにおいてあつた火かき棒をにぎりしめ、足音をしのばせて、音のするほうへとおりにいった。

階段の中ほどまでおりたとき、

「くっしやん！」

と、大きくくしやみの音が、あたりのしずけさをやぶってひびいた。びくつと、牧師^{ぼくし}はたちどまった。それつきり音はやんだ。牧師^{ぼくし}は、またそろそろとおりていった。

「書齋^{しよさい}だな」

牧師^{ぼくし}は、かたくくちびるをかみしめて、机^{つくえ}をかきまわすひくい音のきこえている書齋^{しよさい}へ、ひと足ずつ近づいていった。

書齋^{しよさい}のドアは、ほんのすこしひらいている。まっさおな顔でついてきた夫人^{ふじん}をうしろにかばいながら、牧師^{ぼくし}は、そつとのぞきこんだ。

「ちくしやうめ！　どこへしまつてやがるんだろう」

口ぎたなくののしる声といっしよに、ぼーつとマツチのもえる音がして、黄色きいろなろうそくの光がゆらいだ。

「おお、ここだ！　こんなところへかくしていたんだな」

どろぼうは喜びよろこの声をあげ、金貨きんかをちやらちやらとならした。

「うぬっ！」

牧師ぼくしは、火ひかき棒ぼうをにぎりしめた。

どろぼうのやつは、とうとう牧師ぼくしがだいじにためていた金貨きんかを見つけたらしい。

「あれを盗ぬすまれてはたまるものか。わしがながい間かかって、やつと二ポンド十シリングためたんだぞ」

もう、ためらうひまはない。牧師ぼくしは、

「このやろう！」

どなるといっしよに、ドアをけとばして、おどりこんだ。

「あっ！」

いると思つたどろぼうの姿は、どこにも見えない。どこへもぐつたというのだらう。ただ机の上にもまれたらうそくの灯が、ゆらゆらとゆれているばかりだつた。

二人は、ぽかんと顔を見あわせた。

「たしかにここにいましたよ」

夫人が言つた。牧師は机の下をのぞきこんだ。夫人はカーテンのかげをさがした。

そのとき、かすかに部屋へやの空気くうきがゆれて、だれかが部屋へやをでて

ゆくけはいがした。

が、やはりだれもないのだ。

「金貨きんかはなくなっていますよ」

夫人ふじんがさげんだ。

「うん、ろうそくだってともっている。だれかがこの部屋にいたことはたしかだよ」

「こんなおかしなことって、あるものでしょうか？」

夫人は齒はをがちがちいわせて、ふるえていた。

と、またもや、廊下ろうかで大きくしやみがきこえた。

「いるぞ」

牧師ぼくしは、はじかれたように廊下ろうかにとびだした。あらあらしい足あ

しおと 音は廊下ろうかをかけぬけ、台だい所どころのうら口のかんぬきを、らんぼうにひきあけているらしい。

牧師が台だい所どころにとびこんだしゆんかん、戸はあけられ、かすかな人のけはいが外へむかつてかけだしたようだった。しかし、牧師の目には、やはりなにも見えなかった。

牧師ぼくしと夫人ふじんは、まっさおな顔を見あわしたまま、いつまでもいつまでも、じつと立っていた。

姿すがたのないどろぼうが牧師館ぼくしかんにおしいったといううわさは、その日のうちに、アイピング村じゆうにひろまっていた。

家具かぐがおどる

ぼくしかん すがた 牧師館が姿のないどろぼうにひつかきまわされていたころ、
 くろうまりよかん 黒馬旅館の女あるじホール夫人は、

「おまえさん、起きてくださいよ。ぐずぐずしてはこまりますよ」

さかに亭主 ていしゅ のホールをたたき起こしていた。二人は、お手伝いのミリーよりも早く起きて、いつものように穴蔵 あなぐら にしこんだビールにサルサ根 こん からとった液 えき をまぜ、いちだんと味 あじ をよくしようというのだ。

おかみさんは、まだ寝ぼけまなこをこすっているホールをひつたてて、穴蔵 あなぐら においていったが、

「おや、サルサ根こん えきの液のはいったびんを持つてくるのをわすれたよ。ちよいとおまえさん、大いそぎでとつてきておくれよ」

「よしきた」

ホールは氣がるにひきうけ、じぶんの部屋へやからいつかつたびんをとりだし、穴藏あなぐらへゆく階段かいだんをかけおりようとした。

「おやつ！ 玄関げんかんのとびらのかんぬきがはずれているぞ」

ホールはびんを片手かたてに、ぽかんとドアの前につつたつて、ゆうべたしかに玄関げんかんのドアはしめたはずだ、と思った。

「そうだ。おれがろうそくをもつて、うちのやつが家じゅうの戸じまりをしてまわつたんだから、まちがいないな。それに、はて、あの客きやくの部屋へやの戸ともあいてたようだったぞ」

ホールはそのまま、おくへひつかえして、客部屋のドアをおし
てみた。案あんのとおり、ドアは苦くもなくひらいた。

客の姿はどこにもみえない。ベッドの中はもぬけのからで、ぬ
ぎちらした服ふくがあたりがちらばっている。ホールは、おかみさん
のところにかけておりていった。

「おいおい、ジャニイや、ヘンフリーが言つたとおり、あの客は
大悪党だいあくどうらしいぜ」

おかみさんは、それをきくとかんしやくをおこしてどなった。

「なにをねぼけたことを言つてゐるのさ。しつかりおしよ」

「ねぼけてなんかいねえよ。客きやくは部屋へやにいねえし、玄関げんかんのかん
ぬきははずれているんだ。が、やつふくの服は部屋へやにほうりだしてあ

るんだが。とすると、はだかででかけたのかな？」

「おまえさん、それはほんとの話かい？」

「ほんとうとも……信じないなら、おまえ、じぶんの目でみてみな」

おかみさんは顔いろをかえ、とつとつと階段かいだんをのぼっていった。ホールはあとにつづいた。

穴蔵あなぐらの階段かいだんをのぼって一階にでたときだった。大きなくしやみが、近くできこえた。

おかみさんはホールのくしやみだと思い、ホールはおかみさんのだと考えて、おたがいに気にとめなかった。

「あら、ほんとにいないわ。へんだねえ、どうしたってんだらう」

おかみさんは、さつさと部屋へやにはいりこんで、ベッドにさわりながらさげんだ。

そのとたん、すぐうしろで、くすんくすん鼻はなをすすする音がした。おかみさんはすこしも気づかなかった。

「おまえさん、ちよつときでござらんよ。まだ夜あけ前だつてのに、このベッドは起きてから一時間もたつてるように、すっかりつめたくなつてゐるんだよ」

「どれどれ」

ホールも、おくればせに近よつてきた。

このときだった。世にもふしぎな、だれに言つても信しんじてもらえそうもないことが、とつぜんに起こりはじめた。

まずさいしよは、ふとんがくるくるとまかれ、ぽつとベッドの外にとびだした。つきには柱^{はしら}にかかっていた帽子^{ぼうし}が、きりきりとちゆうに舞^まつて、二、三回^{かいてん}転したかと思うと、矢のようにおかみさんの顔めがけてぶつかつてきた。

「ああつ！」

おかみさんが帽子^{ぼうし}をさけようと、右にむいたとたん、こんどはせんめん^{せんめん}だい洗面台のスポンジがとんできた。つきはズボン、そのつきは服^{ふく}、きようふ^{きようふ}恐怖に顔をひきつらして、かの女が部屋^{へや}をうろうろと逃^にげまどうと、どこからともなく、からからとあざ笑^{わら}うつめたい声がきこえてきた。

さいごに、いすがすうつと宙^{ちゆう}にうかんだ。とみるまに、おかみ

さんめがけて、すごいいきおいで飛んできた。

「たすけてっ！」

おかみさんは悲鳴^{ひめい}をあげて、にげまどった。いすはおかみさん^{せなか}の背中にぴたつとくつついた。

「あれっ！ たすけて、だれかきて！」

なきさけぶおかみさんを、いすはぐいぐいとおし、部屋^{へや}の外につきだした。ホールは這^はうようにして、いっしょに外にころがりでた。

ばたんと、二人のうしろでドアがいきおいよくしまった。

二人が命^{いのち}からがら、台^{だい}所^{どころ}まで逃^にげのびると、お手伝いのミリーがかけつけてきた。

やっとこさでじぶんの部屋へやにおちついたとき、ホール夫人ふじんは、
うわ言のように、

「ゆうれいだわ、きつとそうだ。そうでなければ、いすやズボン
が、まるで生き物のようにとび歩くはずがないわ。ホール、すぐ
に玄関げんかんのかぎをかけてちょうだい。あの男が帰ってきてても中へ
入れないように、早く、早く」

「ジャニイ、気をしずめなさい。ほら、これをぐつとひと口のん
でごらん。ずっと気分きぶんがしずまるから」

ホールがうろうろしながら、気つけ薬ぐすりをおかみさんの口におし
あてた。

「へんだ、へんだと思っていたんだけど……やっぱりあの男はわ

るい魔法をつかうんだわ。おつかさんの代^{だい}からのだいじな家具^{かぐ}に、
 悪^{あく}霊^{りよう}をふきこんだんだわ。でなければ、いつもおつかさんが
 腰^{こし}かけていた、あのなつかしいすが、わたしに飛びかかつてく
 るはずがないわ」

「さあ、ジャニイ、もうひと口飲みなよ。おまえはえらくこうふ
 んしてるよ」

ホールが一^{しん}心になだめた。

やがて夜がすっかり明けはなれ、明るい太^{たい}陽^{よう}の光がまばゆく
 かがやきはじめると、黒^{くろ}馬^{うま}旅^り館^{かん}には、鍛^{かじ}冶^や屋^やのウオツジャー
 ズ、雑^ざ貨^{つか}屋^やのハクスターがよび集められた。

しかし、だれひとり、この奇^き怪^{かい}な話をきいて、これからどうす

ればいいか、はつきりと言える者はいなかった。

相談^{そうだん}はおなじところをめぐつて、いつまでたつてもらちがあかない。

ついに、ウオツジャーズがホールにむかつて、

「これはやはり、おまえが客^{きやくじん}人の部屋^{へや}にいつて、どういうわけでこんな奇怪^{きかい}なことが起こつたのか、よくよくわけをきかしてもらつてくるのが、いちばんいい方法^{ほうほう}じゃないかね」

と言いだした。これには、すぐにみんながさんせいして、お人よしのホールは、のこのこと客^{きやく}の部屋^{へや}にでかけていった。

「お客さま、ちよつとうかがわせておもらい申^{もう}してえだが——」
ホールがまのびした声をかけた、とたん、

「うるさい、でてゆけ！」

すさまじい声といっしよに、ホールは胸ぐら^{むね}をどーんとつかれて、ばったりたおれた。

魔術師^{まじゅつし}か？

り、りりりーん！ もうれつな勢^{いきお}いでベルがなった。

これで三度目^{どめ}だ。あの化けものの客部屋^{きやくべや}からである。

「なんどでもならずがいいわ。だれがいつてやるもんか。あんな男は悪魔^{あくま}に食われて死んでしまえばいいんだ」

おかみさんは、長いすによこになったきり、にくにくしそうに

言つて、起きあがろうともしない。

あれつきり客きやくの部屋へやにはよりつく人もない。おかみさんは朝ちよう食しょくをもつてゆかなかつた。きつと客は、腹はらをすかせて弱よわりきつてゐるのだろう。

昼ひるちかくになると、おかみさんはいいにおいをたてて、じゅうじゅうと肉にくをやきはじめた。

たまりかねた男は、台だいどころ所の戸口とぐちにたつて、

「おかみさんはいないかね？　すぐに、へやへきてくれ」
はや口に言つて、姿すがたをけした。

「ふん、お呼びかね」

おかみさんはうしろ姿すがたどくに毒づきながら、ちよつと考えて、勘かんじ

定書ようがきをひよいと盆ぼんの上にのせ、客きやくのへやにはいつていつた。

「お勘定かんじようでございますか？」

盆ぼんをつきつけながら、おかみさんはすまして言つた。

「なにを言つてゐるんだ。だれが勘定だといった。ぼくはまだ朝食もくつてないんだぜ。なぜ、ぼくの食事しよくじの支度したくをしてくれないんだ。ベルをならしても知らんぷりだ。ぼくは仙人せんじんじゃないぞ。飯めしもくわずに生きていられるか」

「おやおや、お食事しよくじのさいそくでございますか？　では、わたくしにもさいそくさせてくださいませ。お勘定かんじようをしていただきます」

「三日まえに言つただろう。まだ金かねを送つてこないんだよ」

「あたしは二日まえに、ちゃんと申もうしたはずですよ。これいじょうお金を送ってくるのなんか待まってられないんです。あなたさまは朝の食事がほんのすこしおくれたからって、がみがみとお叱しかりになりますよ、あたしもはもう、五日もお勘かんじよう定をまつておりますよ」

「な、なにを言うんだ。人をぺこぺこの空すきつ腹ばらにさせておいて……け、けしからん。じつにけしからん」

「けしからんのは、そちらですよ。食事のさいそくをなさるくらいなら、さつさとお勘かんじよう定をはらってからにしていたきたいですね。わたしのほうが、よっぽどさいそくしたいですよ」

この言葉は、ことばさすがに男の心にぐさりとつきささったらしい。

男はにわかにおとなしくなり、

「まあ、そう腹をたてないでくれたまえ。じつは、ないと思った金が、おもいがけなくポケットの中にすこしばかり残っていたんだ」

「ええっ！」

とたんにおかみさんの頭に、さつき村の人がかけこんで話したばかりの牧師館ぼくしかんのどろぼうのことが、さつと頭にひらめいた。なんとなく思いあたるものがあつた。

そこで、ずばりとたずねた。

「お金があつたんですって？　　いつたい、どこで手にお入れになったのかしら……」

みるみる男のようすがおちつきを失い、はげしい怒りにぶるふるえ、じだんだをふんでどなった。

「なにをぬかす。失礼なやつめ！」

おかみさんはすこしもひるまず、

「ちつとも失礼じやございませんわ。お勘定をいただくにしろ、朝の食事を用意しますにしろ、そのまえにぜひともはつきりうかがっておきたいことがございます。お客さまは、いつたいどうやって、いすに魔法をかけてあやつり、いつのまに部屋からぬけだし、また、いつお帰りになったのですか？ なんのことわりもなく、空気のように、かつて気ままに出入りなさってはめいわくでございますよ。それに——」

男は、

「うるさい、やめろ、やめろ！」

ものすごいけんまくでどなりちらし、足をふみならした。

「ようし、きさまたちがそんな料りようけんなら考えがあるぞ。おれがどんな人にんげん間か、おまえらにわかるはずはないんだ。が、知りたければ知らせてやろう。見ておくがいい！」

恐怖きようふの一瞬いつしゆん

怒いかりくるった男は、ついにじぶんから正しょうたい体をあらわしたのだった。

「見よ！」

男は手袋てぶくろをはめた手をふりまわし、

「おれがどんな人間にんげんか知りたければしらせてやろう。よく見て

おけ！」

そのすさまじさに、おかみさんはちぢみあがってしまった。

男は、ぱつと手をひろげると、つるりとひとなで顔かおをなでおろした。

すると、顔のまん中に、ぽかりと穴あながあいた。

「さあ」

男は手ににぎったものを、おかみさんの手のなかにおしつけた。みるまに変わってしまった男の顔に、どぎもをぬかれてしまっ

たおかみさんは、男のわたすものを、ひよいとうけとった。

が、ひと目みるなり、かなきり声をあげてほうりだしてしまつた。

鼻だ！^{はな} たったいままで男の顔にくつついていた鼻なのである。

ピンク色に光った鼻は、ごろごろと床を^{ゆか}ころがっていった。

「だれかきて！」

おかみさんの必死^{ひっし}のさけびに、ホールや酒場^{さかば}にいた男の連^{れんちゆ}中^{ちゆう}がどやどやとかけつけてきた。

男は、その連中のまゝで、ゆうゆうと眼鏡^{めがね}をはずし、帽子^{ぼうし}をとつた。

かけつけた連中は、立ちすくんで息を^{いき}のみ、男のやることをな

がめているばかりだった。

こんどは、ほうたいをぐるぐるほどきはじめた。

人びとは、ほうたいの下から、どんなおそろしい顔があらわれるのか、と考えただけでも、おそろしさにぞつとして、じつとしていられなくなった。うき足だったひとりが、

「こいつあたひへんだ！」

大声をあげると、わつとばかり、ひとりのこらず逃^にげだしてしまつた。

ホール夫人だけは、足がすくんで、その場にとりのこされていた。

男の顔から、ほうたいがつぎつぎととられてゆくにつれて、ど

うしたというのだろうか？――

そのあとには、なにもなくなってしまったのである。考えていたような恐ろしい顔も、みにくい顔もあらわれてはこずに、男の顔はかき消え、首なしの怪人かいじんがそこにつつ立っていた。

首なしの化けばものは、そのまま、玄関げんかんにかけだしていった。

入口の酒場さかばにより集まって、がやがやとさわいでいた村の連中に、ホール、それからお手伝いてつだのミリーがけたたましい悲鳴ひめいをあげて、玄関げんかんのとびらをおしあけて、こぼれ落ちるおようにわっと外へとびだした。

それからあとのさわぎは、お話するまでもなかった。

人びとは遠とおまきに黒馬旅館くろうまりよかんをとりかこんで、

「頭がねえそうだよ。ほんとにねえんだ。帽子ぼうしをとって、ほうた
いをはずしたら、その下にあるはずの頭がなかったってんだ」

「ばかを言え。そんなことがあるはずがねえよ」

「ほんとだつてば、おや、巡査じゆんさのジャツファーズがきたよ。化ば
けものをつかまえにきたんだ」

旅館りよかんをとりかこんでいた人びとは、わつと巡査をとりかこん
で、おもい思いにしゃべりたてた。巡査じゆんさは、いばつて、

「頭があらうがなからうが、わしはやつをつかまえなければなら
ん」

「そうです、そうです。お巡りさんまわ、さあ、つかめえてくだせえ」
ホールは、まっすぐに玄関げんかんにすすみ、入口のドアをいきおい

よくあけた。

ジャツファーズは、えらい元気でとびこんでいった。

旅館りよかんのうす暗いくら台所だいどころのすみに、首のない人間にんげんが、片手にかじりかけのパン、片手にチーズの大きな切れをもつてたっている。

「あれですっ！」

ホールがさけんだ。

「なんだ、きさまたち！ なにしにはいつてきやがった」
首くびなしの化物ばけものの、首くびのあたりと思われるあたりから、怒おこった
声がきこえてきた。

「ほほう、ずいぶん変わったやつだな。しかし首があるうがなか

ろうが、わしは逮捕^{たいほじょう}状をもつてきてるんだから、からだだけで

もつかまえていくぞ」

巡査^{じゆんさ}は、ぱつと男めがけてとびかかった。男はさつとうしろ

にとびさがり、パンとチーズを巡査^{じゆんさ}めがけてなげつけた。

「こんちくしょう！ てむかう気か……」

巡査^{じゆんさ}はまつかになつて怒^{おこ}った。ホールはせいっぱい気をき

かせて机^{つくえ}の上のナイフをとり、ちようど応援^{おうえん}にかけつけた鍛冶^{かじ}

屋^やのウオツジャーズにわたした。

男はさわぎが大きくなつたので、かんかんに腹^{はら}をたてたらしく、

いきなり巡査の顔をいやと言うほどなぐりつけた。

「あつ！」

ふいをうたれた巡査じゆんさは、一瞬いつしゆんたじろいだが、猛然もうぜんと男にくみついていった。

けとばす、つきとばす、すごい格闘かくとうがはじまった。

巡査じゆんさは、苦心くしんのすえに相手の首くびをしめあげた。もちろん、見えない首をしめあげるのだから、ずいぶんおかしなものだったが、巡査は一生けんめいだった。

男は苦しがつて、巡査のむこうずねをけとばした。

「足をつかまえてくれ！」

巡査じゆんさは、痛いたさをこらえてさげんだ。ホールが足をおさえにきだが、まごまごするうちに、あばら骨ほねのあたりを音がするくらいけとばされて、胸むねをおさえてしやがみこんでしまった。

男はふいに、

「うむ！」

ときけぶと、ばか力をだして巡査じゅんさをなげとばし、あべこべに巡査を下にくみしいてしまった。

「こいつはいけねえ」

巡査じゅんさのはた色が悪いとみたウオツジャーズは、おく病風びょうかぜにふかれて、戸口とぐちのほうへ逃げだした。そこへ、

「おーい、たすけにきたぞ！」

と、ハクスターと馬車屋ばしややがかけこんできた。

巡査じゅんさとウオツジャーズが、ほつとしたとたん、戸棚とだなから、がらがらとガラスびんが三つ四つころがりおち、鼻はなをつくいやなに

おいが部屋いっぱいにひろがった。

首くびのない男

「こうさんするよ」

なにを思ったのか、巡査じゅんさをおさえつけていた手をはなして、
首くびなし男は立ちあがった。

みれば、頭ばかりか、右手も左手もなくなっている。手袋てぶくろが
ぬげてしまったからだ。

巡査じゅんさは、すばやく起きなおり、威厳いげんをつくろいながら、男に
手錠てじょうをはめようとして、なさけない声を出した。

「こいつはいかん、どこへ手錠てじょうをはめればいいんだ、見当けんとうがつかんぞ」

みんなは、ぎくつとして顔を見あわせた。

「ああっ！ やつは靴くつをぬいだぞ、靴下くつしたもぬいだ。あれっ！ 足がない」

ホールが、とんきような声をあげた。

怪しい男は、うずくまって靴下くつしたをぬいだと思うと、こんどは上着うわぎをぬぎ、チョッキのボタンをはずしはじめた。

それは世よにもふしぎな光景こうけいだった。

服ふくだけが宙ちゆうに浮かび、そして、まるで生命せいめいのあるもののように動いて、一枚一枚ぬぎすてられていくのだ。

人びとはあつけにとられて手も足もでず、ぼんやりとながめるばかりだった。

男は、さっさとボタンをはずし、チョッキをぽいとぬぎすてた。シャツだけになった。

そのとき、じゅんさ 巡查があわてて大声でさげんだ。

「やめさせろ！ 服をみんなぬがさせると、たいへんなことになるぞ！ すっかり見えなくなつて、つかまえられなくなるんだ」
「そうだ、そうだ、いまのうちにつかまえてしまえ！」

しかし、すでに男は、手ばやくなにもかもぬぎすていたので、いまとなつては、あちこち動きまわっている白いシャツだけが、怪あやしい男のありかをしめしているだけになった。

シャツの袖が^{そで}ひるがえると、ホールの顔にもものすごいげんこつがとんできた。

巡査^{じゆんさ}がシャツめがけてとびついていく。ヘンフリーはうしろからせまっていったが、したたか耳たぶのあたりをなぐりつけられて、悲鳴^{ひめい}をあげた。

そのうち、シャツがくねくねと気味^{きみ}わるく動き、人間^{にんげん}がぬぎすてるようにまるまっと思ったと思うと、ぽんと窓^{まど}ぎわになげすてられて、怪^{あや}しい男は完全^{かんぜん}にその姿^{すがた}を消してしまった。

かれをつかまえる手がかりは、なんにもなくなったのである。

「気をつけろ、ドアをしめろ。外へださないようにして、なんでもいいから、手にさわったものはみんなつかまえて、なぐりつけ

ろ！」

「ほら、いた！」

「いや、こつちだ！」

だれもかれもむやみに空間くうかんをなぐりつけるばかりで、なんのたしにもならなかった。

「おい、おれをなぐるとはけしからんぞ！」

「おまえをなぐったんじゃないんだよ。あいつはふわふわ浮いてたんでなぐりつけたんだが、やつめ、うまくかわしやがったらしいな。そのはずみでおまえさんをかすったんだ」

人びとは、むやみにさわぎ、へとへとにつかれてきた。

そのとき、じゅんさ巡査はかれとハクスターの間に動く、いようなけ

はいを感じた。

「やつだ！」

かれは、見当をつけてとびついた。手ごたえがあり、男のがちりとした体をつかまえたとたんに、首をぐいとしめあげられた。

「つかまえたぞ！」

巡査は、首をしめられて紫色になりながら、一生けんめ

いにさけんだ。

男は、ひどい力で巡査をしめつけながら、しだいに玄関のほうにでてきた。それにつれて人びとも右に左によろめきながら外へおしだされていった。

男と巡査がもつれるように玄関のふみ段まできたとき、巡査

はもう息もたえだえになっていた。

「えーい！」

男は、かけ声といっしよに、じゆんさ 巡査をぶるんとふりまわして、地面になげとばした。巡査は、ひと声うめき声をあげると、その場にばったりと倒れたまま、動かなくなってしまった。

「わあつ、化けものがきたぞ！
じゆんさ 巡査がたおされた！ やられないうちに逃にげろ！」

村びとは後もみずに、つきあたったりつまずいたりしながら、右へ左へ、くもの子をちらすように逃にげていった。

人っこひとりいなくなつた道に、じゆんさ 巡査のジャツファーズだけが、気をうしなつてよこたわっていた。

逃走とうそう

アイピング村から二キロほどへだたったところにある丘おかの中ちゆう腹ふくに、ひとりのこじきがすわっていた。

名をトーマス・マールヴェルという男で、お人よしですこしばかり頭の働きはたらがにぶく、ぶくぶくふとったしまりのない顔をして、頭にはおそろしく時代がかったシルクハットをちよこんとのつけていた。

かれはさつきから目のまえの草のうえに、二足あしの長靴ながぐつをきちんとならべて、つくづくと見ていた。

片方^{かたほう}はいままでではいていた長靴^{ながぐつ}で、片方はさつきもらったばかりの長靴だ。

いままでの分は、足にぴったりとしてはき心地^{ごこち}はよかったが、ひどい古靴^{ふるぐつ}で、雨がふると、じくじくと水がしみこんできた。もらったばかりのほうは、古くてもなかなかりっぱな品^{しな}だったが、かれの足にはすこし大きすぎた。

「どっちをはいたらいいのかな？ 水のしみこむのはいやだし、だぶだぶのやつをはくのもいやだし」

トーマスは、さんさんとかがやく太陽^{たいよう}の下で、いつまでも、どちらをはくか迷^{まよ}いつづけて、ぼんやりと靴^{くつ}をみながらすわっていた。

「どちらも長靴^{ながぐつ}だが、古^{ふる}ぼけてるな」

トーマスのうしろでふいに人の声がした。トーマスは、ふりかえりもせずに、

「そうなんですよ。どっちもいただきものですがね。いままでのやつは水がはいるんです。あつしは、いつも靴はこのへんでいただいておるんですよ。このあたりの人たちは、おうようで情^{なさけ}ぶかいですよ」

「ばかを言え、このへんのやつらはみんないやなやつらばかりだ！」

「そうですかね。だが、わたしはそう思いませんね。この靴だつていただきましたしね」

トーマスは、こう言つてふりかへつた。

ところが、どうしたわけだろう。いまのいままでしやべつていた男が、どこにも見あたらないのだ。

「だんな、いったいどこにいらつしやるんで？」

かれは、きよろきよろと見まわした。

風で木の枝がゆれてえだいるばかりで、だれひとりいない。

「おやおや、おや？ おれはよつぱらつたのかな？ それとも：

…」

「こわがらなくてもいいよ。おれはちゃんといふんだから」

「ひやあ！ だんな、どこにいらつしやるんですか、こわがるなつて言われたつて、こわくなりますよ」

「こわがらなくてもいいと言ってるじゃないか、おちつけよ。おまえにおれの姿がみえなくても、いることは、ちゃんとここにいるんだから」

トーマスは、あわてて丘^{おか}の上をぐるぐる見まわした。どこを見ても人っこひとりいなかった。生きているものは、あたりのこずえを飛びまわっている小鳥^{ことり}だけだ。

「助けてくれ！ おれはどうかしてしまったよ。空から声がふってくるなんて、ただごとじゃねえや」

「おちつけ、おれは化^ばけものじゃないよ。それに、おまえが気がちがったんでもない。おれのいうことを信用^{しんよう}しろ。でないと、石をぶつけるぞ」

「だって、だんな、どこにおいでなんです？」

トーマスの声がおわるかおわらないかに、小石がひよいと地面から舞^まいあがったと思うと、びゅつと風をきつてかれの肩をめがけてとんできた。

「ひゃあ！」

トーマスがわめいて逃^にげだそうとしたとたん、目に見えないなにかに、どすんと力いっぱいおしとばされて、ひっくりかえってしまった。

「さあ、これでもおれのいうことを信^{しん}じないか？」

トーマスは、やっとこさで起きあがると、草の上にすわりこんで、ふてくされてこたえた。

「どうでもしろ、おれにはなんのことやら、さっぱりわからねえや。ひとりでにとんでくる石だの、空^{くうちゆう}中からふってくる声だの……^{きみ}気味のわるいことはやめにしてもらいたいね」

すると、空中の声はやさしくなり、トーマスをなだめるように、「おれの姿が^{すがた}おまえに見えないからって、おれは怪^{あや}しい人間^{にんげん}ではないんだ。ただわけがあつておれの姿は空^{くうき}気とおなじで、すきとおつていてだれにも見えないんだ」

「えっ、おれのことをからかわないでくださいえよ。いくらおれがこじきだからって、ばかにしてもらいますまい。すきとおつて姿のない人間なんて、いるわけがありませんよ」

「ところがいるんだよ。いま、おれの体^{からだ}にさわらせてやるからな」

あつけにとられているトーマスの手が、だれかの手につよくにぎられた。

トーマスは、おずおずしながら手さぐりであたりをなでまわすと、なるほど、たくましい男の体からだが、はつきりと手ざわりでさぐれた。

「こいつはおもしれえや、だんなはほんとにいたんですね。だが体からだがすきとおってしまったなんて、ずいぶんふしぎですねえ。だんなの腹の中には、なにもはいつてないんですか？ パンだのチーズだの食べれば、腹の中に見えるでしょう」

「それはそうだよ、消化しょうかしてしまうまでは見えてるよ」

「なるほど、しかし、どうしてそんなふしぎな体になりなされた

のですかね？」

「それにはながい話^{はなし}があるんだ。しかし、そんなことをおまえに話してきかせたって、わかりはしないよ。それよりおれがこうしておまえのあとをつけてきたのは、話したいことがあるからなんだよ」

「おれにたのみたいことですって……いったい、それはなんですね？」

トーマスは、目をくりくりさせてきいた。

「じつは、おれははだかなので、いろいろのことでこまりきっているんだ。大いそぎで着る物を手にいれてもらいたいんだよ。それから寝^ねる所^{ところ}とな——ほかにいろいろやつてもらいたいことは

あるが、とりあえずそれだけを、おまえの力でぜひなんとかしてくれ」

「着る物を手にいれろとおっしゃるんですか、なんだか、あつしは頭がぐらぐらしてきたようだ。すこし落ちついて、ゆっくりと考えさせてください。だれひとりいない丘おかからいきなり声がして、なんにも見えねえのに、さぐればたしかにだんながいらっしゃる。体がからだすきとおっているんだそうだが……そしてこんどは着物きものとねる所を手にいれろとおっしゃる。あつしは、すっかりめんくらつてしまいましたよ」

「いまさら、ぐずぐず言うな。透明人間とうめいにんげんのわしが、おまえをえらんだんだ。おれのために働はたらいてくれ。そうすればお礼れいはたつ

ぷりやるよ。わかったな」

そして透明人間とうめいにんげんは、大きくしやみをした。

「そのとおり、おまえがおれをうらぎってみろ、どんなことになるか、おもい知らせてやるからな」

男は、言いおわってぽんとトーマスの肩かたをたたいた。トーマスは、きやつと恐怖きようふのさけび声ごえをあげ、

「と、とんでもねえ。うらぎったりするものですか……心配しんぱいしねえでも大丈夫だいじょうぶですよ。あつしにできることなら、なんでもいたしますよ——なんなりと言いつけてくだせえ」

トーマスは、気のどくなほど、はげしくふるえながら言った。

怒る透明人間

酒場の中

その日は復活祭だった。

アイピング村では、朝はやくから村じゅうの年よりも若いものはれぎきも晴着を着かぎって、うきうきしていた。

黒馬旅館では、亭主のホールと雑貨屋のハクスターは、とりとめのないばかり話をだらだらとつづけていた。そこへ、あららしくドアをおして、ひとりの男がはいってきた。

古びたシルクハットを頭にのせた、ずんぐりとした小がらの男

で、ひどく、しんけんな顔つきで、わきめもふらず酒場さかばにはいつてくると、つかつかととおりぬけて、おくの客部屋きやくべやのほうへ歩いていった。浮浪者ふろうしやのトーマスだ。

そのすばやさときたら、はつと気づいたときには、もう男はおくの客部屋きやくべやのドアをあけていた。

「おっと、お客さんきやく、お客さん、そこはいまではお客さん用に使っていないんですよ。もどつてきてくだせえ」

ホールが、まのびのした調子ちようしでどなった。

男はへんじもしなかったが、まもなく、むつつりした顔でもどつてくると、酒場さかばにきて、ききとれないほどひくい声で、酒を注ちぐゆうもん文ぶんして飲みはじめた。

「おい、かわったやつじゃねえか。気をつけたほうがいいぜ」

ハクスターがホールにささやいた。

男は、ぐいぐいと流しこむようにたてつづけていく杯はいものみ、口のはたをてのひらでぬぐうと立ちあがって、中庭なかにわにぶらりとでていった。

たばこに火をつけ、ぶらぶらと庭にわを歩きまわっている。いかにも、ものうそうだった。

が、ハクスターは、男がときどき、ちらりと客部屋きやくべやの窓まどにするどい視線しせんを送っているのを見のがさなかった。

どさり！

重い物が窓まどからおちる音がした。男は身をかがめて、落ちてき

たテーブルクロスに包^{つつ}んだ大きな包みと、三冊^{さんさつ}のノート^{ノート}を、小わきにかかえこむとみると、うさぎのようなすばやさで木戸^{きど}から大^{おお}おどおど通りへ走り^{おどおど}でた。

「どろぼう！」

さつととびあがったハクスターは、いちもくさんにかれのあとを追った。

「どろぼうだつ！　つかまえてくれ！」

ホールも、ハクスターのあとを追ってかけだした。

外には、あかるい日の光がさんさんとふりこぼれ、着かぎった人びとがのどかにゆききしていた。

シルクハットをかぶり、大きな包^{つつ}みをかかえたおかしな人かげ

は、風のように街路がいろをかけぬけ、街かどをまがって丘おかへむかつて走っていった。

「どろぼうだ！　つかまえてくれ」

ホールとハクスターは声をかぎりになめいた。しかし、往來おうらいの人びとは、あつけにとられて、ただ見送っているばかりだった。とある街かどまちまできたとき、やっとこさで男に追いついた。

「こんちくしようめっ！　もう逃にがさんぞ、つかまえたぞ！」

おどりかかったと思ったそのとき、ハクスターは、目に見えないなにかに、むこうずねを力ちからいっばいけとばされた。

「わっ！」

ふいをうたれたハクスターはもんどりうって道にたおれ、それ

つきり氣を失つてしまった。

つづいて同じようにおどりかかつていったホールも、ものの見みごとごとな事に投げとばされ、腰こしの骨ほねをしたたかうつて起きあがれなくなつた。

シルクハットの男は、そのまま、すごいいきおいで丘おかのほうへ姿すがたを消していった。

正しょう体たいが知しれると

夕ぐれがせまつてきた。

シルクハットをかぶつたれいの男が、ぶなの並木なみきをぬうように

して、ブランブルハースト街道^{かいどう}をいそぎ足で歩いていた。

テーブルクロスの包^{つつ}みとノートは、やはりだいじそうに小わきにかかえている。

いつのまにか、トーマスの足どりがしだいにおそくなり、のろと悲しげな顔つきで考えこみながら歩いていると、空^{くうちゅう}中からせかせかした声がひびいてきた。

「おい、さつきと歩け。なにを考^{かん}えてるんだ。また、さつきのようにおれをまいて逃げ^にようというのかい？　こんど逃げ^にてみる、ただではおか^かないからな」

「逃^にげようなんて、そんなことは考^{かん}えてませんよ。あつ、そんなに肩^{かた}をつつつかねえでくだせえ。おいら、いまに傷^{きず}だらけになっ

てしまいますぜ」

トーマスは、しおしおとこたえた。空^{くうちゆう}中の声はなおも意^い地^じ

わるく、

「いいか、こんど逃^にげようとしたら、殺^{ころ}してやるからな」

「とんでもねえ。おいら、あんたをまいて逃^にげようなどとは、これっぽちだつて考えていませんよ。ただ、どこでまがつたらいかわからなくて、あのまがり角へはいりこんじまっただですよ。あつしはこのへんの道はちつとも知らねえんです。そんなおそろしいことを言わねえでくだせえ」

浮^{ふろうしや}浪^な者のトーマスは、いまにも泣^なきだしそうだった。目にみ

えて元^{うしな}氣を失い、あきらめきつたようすで、とぼとぼと歩きつづ

けた。

空^{くうちゅう}中^{ちゅう}

の声は、もちろん言わずとしれた透^{とうめい}明^{にんげん}人間である。

かれは黒馬^{くろうまり}旅^り館^{よかん}

でうばつてきた衣^い類^{るい}と、

研^{けん}究^{きゅう}

ノートの

包^{つつ}み

をトーマスにもたせ、どこへゆこうとしているのか、しきり

に先をいそいでいた。

「なあ、トーマス、アイピング村のばか者どもが、考えなしの大

さわぎをおっぱじめやがったおかげで、おれの姿^{すがた}が透^{とうめい}明^{めい}

で着^{きもの}物

を身につけさえしなければ、だれにも姿をみられなくなるってこ

とを、みんなに知られてしまったんだ。いまましいじゃないか。

そこで問^{もんだい}題^{だい}

はこれから先どうするかってことだ。どうせ、やつ

らはおれを追いまわすにきまつてるだろうし……なにかいい考え

はないか」

「だんな、あつしにいい考えなんてあるはずがないですよ」

しばらく二人は、だまつて道をいそいだ。しだいに夕やみがあたりをつつんで、遠くの家ひの灯がちらほらと見えてきた。

トーマスは疲つかれきつていた。小わきにかかえた包つつみが、しだいに下にずり落ちていった。

「おい、ぼやぼやするな。しっかりと荷物にもつをかかえて歩あるけ。そのノートはだいじなんだ。なくすんじゃないぞ、しっかりと持つてろ！」

いきなりするどい声かたがして、トーマスの肩かたをぐいと透とうめい明にんげ人間んがついた。トーマスはあわてて、ずるずると包つつみをひきあげ、

しつかりとかかえなおしてから、泣き声をあげ、

「だんな、だんなはあつしをなんに使おうとおつしやるんで……はじめは旅館りよかんからだんなの荷物にもつをもちだす手伝いをしてくれとおつしやつた。それがすむと、あつしの役目やくめはおわったはずなのに、やはりあつしをはなしてはくださらねえで、こうして荷物をかかえてだんなのいくほうへつれてゆきなさる。いったい、どういうお気もちなんでござえますか？」

「つべこべいうな、おまえみたいなやつでもおれにはいり用なんだ。それに、いまにわしが仕事しごとをやりはじめれば、どうしてもおまえの手伝いがいるようになるのだ」

「なにをおやりなさるのかしらねえが、あつしはとても、だんな

の役には立ちましねえ。だいいち、じまんではねえが、力はないし、そのうえ、心臓しんぞうもよわいんです。せいぜい、さつきぐらいのことしかやれねえですよ。度胸どきょうはねえし、びくびくしながら手伝ったところで、あんまり役にもたたねえでしょう」

「力がないのはこまるな、見かけだおしなのか……まあいいさ、それに、なにもびくびくすることはないんだ。おれはだいそれたことをたくらんでいるわけじゃないし、おれがいつもくつついてやるから、おれのいうとおりによればいいんだ」

トーマスは首くびをすくめ、ちよつと考えていたが、思いきつて、「だんながいくらこわがらなくてもいいとおっしゃっても、あつしはうす気味きみわるくて死にてえくらいでさあ。いってえ、どんな

ことをあつしにしろとおつしやるんで……あつしだって、いやな
らいやとおことわりできる権利けんりがあるんですがね」

「だまれ！　だまれ、だまれ。だまっておれのいいつけどおりに
していればいいんだ。おまえは利口りこうな人間にんげんじゃないし、あまり
役に立ちそうもないが、おれのいいつけどおりにやりさえすれば、
おれはいつもおまえをまもっていてやろう」

透明人間とうめいにんげんは、強い力でぐっとトーマスの手首をつかんで、
しかりとばした。

「わかってますよ。どうせ、あなたがあつしをはなしてくれない
ぐらいのことは、知ってまさあね」

トーマスは、シルクハットをかぶった頭をたれ、しずみきつて

歩いていった。

村をすぎていったじぶんには、あたりはとつぷりと日がくれ、美しい星がきらきらと空にかがやきはじめていた。

ポート・ストウ村で

よく朝の十時ごろ、トーマスはポート・ストウ村にたどりついた。

旅のほこりをあび、つかれた顔をして村はずれの宿屋のまえのベンチにすわりこんでいた。

ベンチの上にはれいのノートが三冊、革ひもでしばっておいて

ある。テーブルクロスの包みのほうは、とちゅうで透明人間の気がかわり、ブランブルハーストをでたところの松林ですててしまったのである。

トーマスのようすはひどくへんだった。せかせかとあたりを見まわし、なんども、なんどもポケットに手をつつこんでは、しきりになにかをさがしているようすだった。

一時間あまりもトーマスはベンチにすわって、こんな奇妙なことをくりかえしてやっていた。

「やあ、いいお天気じゃありませんか」

ほがらかな声がひびいて、船員ふうの気さくそうな男が、新しき聞えを片手にトーマスに近づき、ベンチに腰かけた。

「そうですね」

トーマスはぎくつとしてふりかえり、気ののらないようすでこたえた。しかし、男はトーマスのようすに気をわるくするでもなく、ひどくあいそうよく、

「暑くもなし寒くもなし、^{あつ}^{さむ}じつに気もちのいい朝だ。あなたは、どちらからおいでなさったね」

「遠くからですよ」

「ははあ、おやつ、そこにおいていなさるのは本ですかい？」

本と聞かれてトーマスは、はつとして大あわてにノートをひざの上にのせた。そのひょうしにかれのポケットで、ちららちららと金貨^{きんか}の音がした。

男は、目をまるくして、しげしげとトーマスを見つめた。ほこ^{よこ}りで汚れきったトーマスの服装^{ふくそう}に、金貨の音はどう考えても似^につかわしくなかったからだ。しかし、その船員^{せんいん}は、すぐに前とおなじあけっぴろげな態度^{たいど}になつて、

「おれは、本なんてものはなん年間^{ねんかん}も読んだことがねえが、ずいぶんめずらしいことを書いたのがあるそうだね。その本にもかわったことが書いてあるかね」

「そりやあそうでさ」

トーマスは、気がかりらしく、ちらつと相手^{あいて}の顔を見て、つづいてあたりを見まわした。

「しかし、けさの新聞^{しんぶん}には、本にまけないほどめずらしいこと

がのつてゐるぜ」

「そうですかね」

「なんだ、おめえ、まだ新聞を読んでいないのかい？ 姿すがたの見え

ねえ人間つてのが、あらわれたそうで、でかでか書きまくつてあるよ」

とたんにトーマスは、おちつかなくなつてしまった。口をもぐもぐと動かし、むやみにほつぺたをひつかいてから、きこえないほどのほそい声で、

「透明人間とうめいにんげんですつて、いったいどこにそいつがあらわれたんですね。オーストラリアか、アメリカですかい？」

「ばかを言いたまえ、そんな遠くの話ではないんだ。この土地に

あらわれたんだ」

「えっ！」

トーマスは、ぐるぐるっと心配しんぱいそうにあたりを見まわした。

「はっはっは、この辺へんといつてもこのベンチのまわりじゃねえよ。
この近くの村にだよ」

「ああ、そうですか、で、その透とう明めい人にん間げんはなにをしようって
んですかね？」

「あばれたいだけあばれたってことだ。なにしろ体からだが見えねえんだから、どんなことだってやれるさ。だれもつかまえることも、
とめることもできないからね。昔むかし、おとぎ話にあつたのが、ほん
とのことになったんだね」

「そうですか、あつしはこの四日間、新聞ってやつを見たことがねえんでしてね」

「透明人間とうめいにんげんがはじめて暴れあばだしたのは、アイピング村がはじまりだそうだ」

「それで……」

「その人間はどういう男なのか、アイピング村にくるまではどこに住すんでいたのか、どんなことをしていたのか、さっぱりわかっていないそうだ。ほら、この新聞をみてみたまえ、アイピング村の怪事件かいじけんって書いてあるだろう」

「なるほど、それではやはり、ほんとうの話なんですネ。信じられねえようだが……」

「そいつは、はじめ黒馬旅館にとまっていたんだそうだ。頭にほうたいをまいて服をきこんでいたから、だれひとり透明人間だなんて気づかなかったそうだ」

トーマスは、そつとあたりを見まわしてからうなずいた。

「だが、ついに化けの皮のはがれるときがきたんだ。アイピング村の連中は、そいつが透明人間とわかつたので、大格闘をやってつかまえようとしたが、なにしろ相手の姿はみえな
いんだ。いたずらにさわぎまわるばかりで、とうとう逃げられた
ということだ。」

「へえ、ふしぎな話ですな。で、アイピング村であばれてから、透明人間はどこへいったのでしょうかね」

「さあ、たしかなことではないらしいが、ポート・ストウ方面^{ほうめん}へむかったようすだつて書いてあるぜ。おれたちのいるこの村へ、透明人間^{とうめいにんげん}なんていうおかしなやつにやつてこられるのは、ありかたくないね」

「まったくですよ。なにしろ姿^{すがた}がみえないんですからね」

トーマスは船員^{せんいん}の話をききながらも、まわりの物音^{ものおと}に気をくばっていた。かすかな風の動きでも、ききのがさないようにしていた。

じつは、その……

そして、あたりにかれの主人しゅじんの透明人間とうめいにんげんの姿がなさそうだと見きわめをつけると、

「あつしはぐうぜんなことから、あなたのいまおつしやった透とうめ明人間いにんげんを知っているんですよ」

「えっ？ おまえが知ってるというのかい？」

「へえ、そうなんですよ。わしがやつと知りあつたときのことを聞いてくだせえ。が、びつくりしねえでくだせえよ。たいへんかわつたことなんだから」

「そりやあそうだろうよ。いいよ、びつくりしねえから話してきかせなよ」

「あつしは、透明人間のようにおそろしいやつに、いままで会あつ

た……」

言いかけてトーマスはふいに、

「いててて、おおいてえ！」

苦しそうにさけび、片手で耳をおさえ、片手で本をつかんで、
体からだをまげておかしな腰こしつきでベンチから立ちあがった。

透明人間とうめいにんげんは、いつのまにか、トーマスのところに帰ってき
ていたのだ。

トーマスが、見しらぬ船員にかれのことをしやべりそうになる
と、ぐいぐいとトーマスの耳をつまみあげた。

トーマスは、透明人間かえが帰ってきていたと知ると、おそろしさ
でふるえあがってしまった。

もう、かれのことを船員せんいんにしやべるところではない。透明人間に耳をひつぱられ、ずるずるとくつついていくだけだった。

しかし、そんなこととは夢ゆめにも知らない船員せんいんは、びっくりしてトーマスをのぞきこみ、

「おいおい、どうかしたのかい？　どこが痛いいたのだ？」

と心配しんぱいそうにたずねた。トーマスはじりじりとベンチから遠とおざかつてゆきながら、

「歯はが痛いいたんだよ。急にいたみだしたんで、おおいてえ、いてえ」

しかし、トーマスのようすはどこか変へんだった。歯はが痛いと言いいながら、片手かたてで耳をおさえて、片手かたてでノートをしつかりとつかんでいる。船員は、うさんくさそうにトーマスをじろじろと見て、

「おい、どうしたんだい？ 透明人間とうめいにんげんのことを話すと言った

じゃないか？」

「うそでさ。いっぱいかついただけですよ」

トーマスくるが苦しそうにこたえると、船員せんいんはむかつ腹ばらをたてたらしく、

「新聞にだつてのつているんだ。透明人間はたしかにいるんだ。

なんだ、透明人間を知ってるなんて言つて、人をおかつぐ気だったのか？ しかし、きさまがやつのことをしらなくても、透明人間はいるんだぞ」

「新聞しんぶんだつて、でたらめを書くこともありますよ。あつしは、このうそをつきはじめてやつを知ってるんですよ。やつの口から

透とうめい明にんげん人間なんていうでたらめが話されて、ほうぼうへひろま

つていったんですよ」

船員は、半信はんしん半疑はんぎでトーマスの顔をじつと見つめた。

「だが、新聞にのっているし……りっぱな人たちが証しょうにん人にな
つてるしな」

「うそですよ。うそですよ。だれがなんと言ったつてうそにきま
ってますよ。ばかばかしい、透とうめい明にんげん人間なんてものが、いまの
世の中にいるはずがないじゃありませんか」

トーマスは必死ひっしになつて、がんこに言いはつた。船員はおもし
ろくない顔をして、

「それほどはつきりうそとわかっているなら、なんだつてはじめ

にうそだと言わねえんだ」

「なにっ！」

二人は、ぐつとにらみあつた。いまにもどちらからか、げんこのつぶてが飛んできそうなあんばいだった。

「トーマス、ぐずぐずするな、おれといっしょにくるんだ」

とつぜん、くうちゅう空 中 から声がした。

トーマスは、はつとしたようで、そのまま、おかしな腰こしつきでひよこひよこ歩きだした。

「逃にげるのか」

船員がうしろからどなった。

「逃げるもんか」

トーマスはくるりとむきなおろうとしたが、あべこべにつきとばされるように、前へとんとんとつんのめった。

そして、それつきり後あともみずに船員せんいんから遠ざかっていった。だれかと言ひあらそいでもしているようなつぶやきが、いつまでも聞こえていた。

船員は、大またをひろげ腰こしに両手をあてがって、遠ざかっていく相手をにらみつけ、

「あいつは新聞しんぶんが読めねえんだよ。なにがうそだい。目を大きくあけて新聞をみる、ちゃんとくわしく書いてあるから、まぬけめ！」

声のつづくかぎり、どなりまくっていた。

空^{くうちゆう}中^{ちゆう}を飛^とぶ金貨^{きんか}

このことがあつて二日ほどたつたとき、またまた船員^{せんいん}は、世にもふしぎなできごとにあつた。

船員は、じぶんの部屋^{じぶん}でゆつくりとコーヒーをすすつていた。たつぷり砂糖^{さとう}をほうりこんだ、濃い^こコーヒーをうまそうに飲みながら、かたわらの新聞をながめていると、

「おおい、あにき、あにきいるかい」

と、われるように戸をたたく者がいる。

「だれだい？ しずかにしろ、戸がこわれるじゃないか。戸をた

たくのをやめて入ってこい」

ころがりこんできたのは、かれのなかまのわかい船ふなのりだった。
「なんだい、ひどくあわてて……どんな大事件だいじけんが起こったって
いうのかい？ えっ、おまえ、透明人間とうめいにんげんにでもぶつかつたとい
うのかね？」

船員はなかまの顔を、にやにや笑って見ながら声をかけた。

「いいや、透明人間じゃない。だが、おなじようにへんなふしぎ
なことなんだ」

「ふしぎなこと？ まあいいから落ちつきなよ。コーヒーをぐち
そうするから、ゆっくり話したらどうだい」

やがて、熱あついコーヒーがはこぼれ、わかい船ふなのりはひと息いきつく

と、まだこうふんのさめないようすで話しだした。

「おどろいたの、なんのつて、きょうのようにおどろいたことは、いままで一度だつてありはしねえよ、あにきだつてその場にいあわせたら、きつと目の玉がひっくりかえるほどおどろくにちがいないよ」

「おれがおどろくか、おどろかないか、そんなことはいいいけど、その話というのはどんなことなんだい？ おまえはかんじんのことはちつとも話してねえぜ」

「うん、それだよ。おれが朝はやくセント・マイクル小路こうじを歩いていたんだ。まだ時間が早かったので、街はまちしいんとしていて、通っている人は、おれのずっと先を歩いている年よりきりで、ほ

かに人かげは前にも後にも見えなかつた。おれはこんど乗つていく船や、ゆく先の港の^{みなと}ことを考^{かん}えて歩いていた。その時、どういうきつかけだつたかわからないが、ひよいとよこの壁^{かべ}に目をやつた」

「うん、それで……」

「そのとたんに、おどろいたねえ。ひとにぎりの金貨^{きんか}が、壁^{かべ}にそつて空^{くうちゅう}中をふわふわととんでいるんだ。それを見たときのびっくりしたこと……おれは思わすなんども目をこすつたよ。が、なん度見なおしても、ほんものの金貨だ。かなりの早さで飛^とんでいくんだ。じつと見つめているうちに、すこしおどろきがおさまると、欲^{よく}がむらむらつと起こつたんだ」

「その金貨きんかを、じぶんのものにしようとしたのかい？」

船ふなのりはいつのまにか、わかいなかまのふしぎな話にひきずり

こまれて、熱心ねっしんにきいていた。

「おはずかしいが、そうなんだ。あたりに人はいない、金貨きんかは持も

ちぬし

主しゅがいるようではなし、ちようど手のとどくところをとんでい
るんだ。おれは、一枚や二枚ちようだいしたって、たいして悪く
はあるまいと考えたので、ひよいと手をのばして、その金貨きんかをつ
かもうとした」

「うまくつかめたのか？」

「いいや、手をのばしたとたん、いきなり強い力でなぐり倒たおされ
て、その場にばったりとたおれてしまった。ひどく腰こしをうつての

びてしまったが、かろうじて痛みをこらえて立ちあがったときには、金貨きんかはちようちようが舞まうように、ふわふわとマイクル小路こうじのかどを消えていったんだ」

「おまえ、夢ゆめでも見ていたのじゃないか？ ゆうべ、ぐっすり眠ねむったのかい？」

船ふなのりが疑うたぐりぶかい調子ちようしでいうと、わかいなかまは、不平ふへいそうにほおをふくらし、

「いやになるなあ、あにきまでがそんなことを言うのですかい？ おれの腰こしは、その時すごい力でなぐり倒たおされて、いやつというほど地面にうちつけたので、いまでもずきんずきん痛いたんでますよ。おれだってさつきまで、金貨きんかが空くうちゆう中をふわふわ飛とぶなんてこ

とがあるとは思ってませんでしたよ。だけど、はつきりじぶんの目でみたんです。これよりたしかなことはありませんよ。おれは金貨きんかがマイクル小路こうじのかどに消きえてゆくまで、じつと見ていて、その足であにきのところへかけつけてきたんだよ」

「そうか、では、まんざらうそでもなさそうだし、おまえが寝ねぼけていたわけでもないんだね。とすると、ずいぶんふしぎな気味きみのわるい話じゃないか」

「そうなんだよ。おれも金貨きんかが見えてる間は無我むがむちゆうだった
が、金貨が消えてしまったとたん、ぞつとしたね。がたがたとふるえてきて、どうしてもとまらねえんだ。このごろは変へんなことばかり続つづくじゃないか。透明人間とうめい にんげんだなんて恐おそろしいやつのこと

を、新聞がでかでか書きたてたと思うと、金貨が空くうちゅう中をとびまわる。おれはなんとなくおそろしくてしかたがないよ」

船ふなのりは、その時、なぜともなく宿屋やどやの前で会ったシルクハットをかぶったみような男のことと、そのとき空くうちゅう中からきこえた声のことをふつと思いだした。

（おれも頭がどうかしているのかな。あるときふいに空くうちゅう中から声がきこえてきたような気がしたが……そら耳だと思っていたが、もしかすると、ほんとに空中からきこえたのかもしれないぞ。金貨が空中を飛とぶなら、空中から声がきこえてもふしぎではないかもしれん）

ひとりで考えこんでしまった。わかいなかまもだまりこんで、

やけにたばこばかりすっていた。

金貨きんかが空くうちゅう中とを飛ぶということは、事実じじつだったらしい。

その証拠しょうこにポート・ストウ村では、一日じゅう、ほうぼうの物かげやへいのそばを、金貨きんかがふわふわと飛んでいた。

そのようなすを見たという人はいく人もあった。

「ええ、そうですよ。人もいなければ動物もいません。ただ金貨きんかだけがふわふわとかなりの速さはやで飛とんでるんですよ。わたしが近づいたとたんに、どこへともなく消えてしまったんです」

かれらは口をそろえて言った。

「そしておどろくじやありませんか。その金貨きんかは、どうも、ほうぼうの金庫やぜに箱ばこからとびだしてきたものらしいんですよ。村

の銀行の金庫ぎんこう きんこからも、ちやうど片手かたてでつかめるほどの金貨きんかと、紙しできちんと巻まいた貨幣かへいとが、ふいに空くうちゆう中に舞まいあがり、おどろく行員こういんをしり目めに、ふわふわと飛とんで銀行ぎんこうをでてゆき、おもてどお表おもてどお通とおりにとびだすと、そのまま見えなくなつてしまつたそう
だ」

ふしぎなことのあつたのは、銀行ぎんこうだけではなかつた。

食料品しよくりようひんをうっているこじんまりした店では、客きやくにつり銭せん

をわたすために主人しゅじんが銭箱ぜにばこのふたをあけた。そのとたん、主人しゅじんはすぐ身近みぢかに人のけはいがせまるような感じをうけた。

「おやつ？」

主人しゅじんは、あたりを見まわしたが、もちろん、店さきでまだ卵たまご

を熱心ねっしんに見くらべている客よりほかに、だれもいなかった。

主人しゅじんが銭箱ぜにばこからつり銭せんをつまみだそうとすると、さつと銭

箱の中のひとつかみの金貨が空中へ舞まいあがった。

「きやつ！」

主人しゅじんは悲鳴ひめいをあげて、舞まいあがった金貨のゆくえを見まもる

ばかりだった。主人の悲鳴におどろいた客も、空くうちゅう中をとびな

がら店をでて大通りへ金貨が逃げていくのを見ると、すっかりた
まげて、つり銭もうけとらず、いちもくさんにわが家へ逃げてい
った。

ポート・ストウ村は、ひっくりかえるようなさわぎになつてし
まった。

ほうぼうの店や宿屋やどやから、手につかめるほどずつの金貨きんかが空くうち中ゆうをとんで消きえていった。

あちらの通りや、こちらの街まちかどで、人びとは金貨きんかの飛とんでいるのを見かけたが、人が近づくとふしぎなことに、金貨はさっと身をひるがえすようにかき消えてしまった。

こうして、ほうぼうの金庫きんこや銭箱ぜひばこから舞まいあがってきた金貨のゆくえを知ったら、村の人たちは、いまよりもっとおどろいたにちがいない。

金貨きんかは人目をさけて、街まちの通りを飛びつづけて村はずれまでやってくる、その小さな宿屋やどやのまえで、おどおどとあたりを見まわして心配しんぱいそうに立っている、古びたシルクハットをかぶつ

た男のポケットに、吸いこまれるようにはいつていった。

たすけてくれ！

バードック町は、うしろになだらかな丘がある。丘のふもとのバスの停留所（ていりゅうじょ）のすぐ前の酒場（さかば）『銀ねこ』（ぎん）では、さつきからまるまるとふとったおやじが、むちゆうになつて、ひとりの客（きやく）をあいてに、さかんに、競馬（けいば）の話をまくしたてていた。

あいての男は、おやじとはまるつきりはんたいの、やせてひよろひよろした顔いろのわるい男で、商売（しょうばい）は馬車屋（ばしやや）だ。

おやじの言葉（ことば）に、ときどきあいづちをうちながら、ビスケット

にチーズで、ちびちびと酒を飲^{さけ}んでいた。

「なんだい？ 表^{おもて}のほうがいぶさわがしいようじやないか」

とめどのないおやじの話をうちきるように馬車屋が言つて、立ちあがると、うす汚^{きた}ないカーテンのすきまから、丘^{おか}のほうをのぞいてみた。

「おい、なんだか、おおぜいの人^かが駈^かけていくぜ」

「どれどれ、ほんとうだ。火事かもしれねえな」

酒場^{さかば}のおやじが氣のない調子^{ちようし}で言つたとたん、ばたばたと足

音が近づき、ドアをさつとひらいて、あの浮浪者^{ふろうしや}のトーマスがとびこんできた。

髪^{かみ}をふりみだし、息^{いき}をはずませて、上着^{うわぎ}のえりもはだけてしま

っている。れいのおびたシルクハットは、とつくにどこかへすつとんだらしく、頭へのつかっていなかった。

飛びこんでくるなり、トーマスは恐怖におののきながら、大声でさけんだ。

「やつが追ってくるんだ。あつしのあとを追って……助けてくたせえ。透明人間に追われているんです」

「透明人間がくるって……そいつはたいへんだ。おいっ！ ドアを閉めろ、ドアを閉めろ！」

酒場じゅうの者が色を失ってさわぎたてた。ちようどきあわせていた警官は、さすがにほかの者たちよりは落ちついており、すぐに表のドアをしつかりと締めてやった。

おやじも台所のほうへすつ飛んでいくと、うら口のドアを力い
つぱい、ひっぱってしめた。

「さあ、もう大丈夫だよ」

警官けいかんが言ったが、トーマスは泣きださんばかりの声をふりし
ぼって、

「あつしをかくしてください。どこかおくのほうの鍵かぎのかかる部
屋やにかくしてもらいてえんです。やつがあつしを追っかけてくる
んです。あいつはどんなところへでもはいってきますよ。あつし
のことを殺ころそうと思っっているんです」

「どんなやつかしらないが、ここまでくれば大丈夫だよ。ドア
はしめたし、そちらに警官けいかんもいらっしやるんだ」

すみっこで、ひとりで酒をのんでいた、黒いひげをはやしたアメリカなまりの男が言った。

と、そのとき、ドアがはげしくたたかれた。

「透明人間だ！とうめいにんげん はやくどこかへかくしてください。こんど

みつければ、きつと殺ころされてしまうんだ。おお、神さま！」

「この中へはいったらいいだろう」

おやじが、カウンターのはね板をあげた。トーマスはあわててとびこんだ。

その間じゅう、ドアをたたく音はひっきりなしにつづいた。

「だれだ？」

警官けいかんがどなりながらドアに近づいた。トーマスは、それを見

ると泣き声をふりしぼって、

「戸をあけねえでくだせえ。たのむからあけねえでくだせえ」

黒ひげの男が、

「外で戸をたたいているのが、とうめいにんげん透明人間だということのか。どん

なやつか、見たいものだな」

その言葉がことばおわるかおわらないうちに、すさまじい音をたてて、

表通りのほうの窓ガラスがわれた。

「きやつ！」

トーマスがふるえあがつて ぜつきよう絶叫した。

「さあ、こちらへ来い」

おやじは気をきかせてトーマスをおくまった部屋へやにかくし、鍵かぎ

をかけてやってから、もとのところへもどってきた。

外では、かけまわるたくさんの方の足音とさけび声がいりみだれて、たいへんなさわぎだった。

警官^{けいかん}はドアに近より鍵^{かぎ}穴^{あな}から外をのぞき見しながら、

「ほんとに透明人間^{とうめいにんげん}らしいな。警棒^{けいぼう}をもってくればよかった」

黒ひげの男も警官のあとにつづき、

「ねえ、かまわないから、かんぬきをぬいてドアをおあけなさい。やつがはいってきたら、ぼくがこいつに物を言わせましょう」

そして、手にしたピストルを警官^{けいかん}の目のまえに、にゅつとつきだしてみせた。

ピストルをみると警官^{けいかん}は、あわてて手をふり、

「とんでもない、そいつはこまるよ、きみ。そんなものをふりまわして、相手が運わるく死んでみたまえ、殺人罪^{さつじんざい}になつてしま
うよ」

「へっへっへ、そんなことは心えていますよ。やつを殺^{ころ}してしま
うようなへまはやりませんよ。足をねらいますよ。おれは足をね
らう名^{めいじん}人なんだよ。さあ、かんぬきをはずしなさい」

カーテンのすきまから外のようにすをうかがっていたおやじは、
あわててうしろをふりかえり、

「わたしをうたんでくださいよ」

と、どなった。

「さあ、こい！」

黒ひげの男は身がまえ、さつとピストルを背にかくした。

警官^{けいかん}は、ちよつと思案^{しあん}していたが、いきなりかんぬきを、さ

つとひきぬいた。

しかし、ドアはしまったままで、人がはいってくるけはいはさ
らにない。

二分たち、三分たった。やはり、なんのかわったこともなかつ
た。

三人が息^{いき}をころしてドアを見つめていると、奥^{おく}の部屋^{へや}から、ひ
よいとトーマスが頭^{いへ}をだし、

「家^{いえ}じゅうのドアは、みんなしめてありますかい？」

透明^{とうめい}人^{にんげ}

間のやつは、きつとぐるつとまわって、開いてるドアをさがしてみますぜ。悪魔あくまのように、ぬけめのねえやつですからね」

「そいつはたいへんだ。うち口のドアはあけたまんまだ。ちよつとわたしはいってくる。こちらはおまえさんたちにたのみますぜ」

ふとつたおやじは、ころがるようにかけだした。トーマスは顔をひっこめ、ばたんとドアをしめ、鍵かぎをしつかりとかけた。

やがて、かけもどつてきたおやじは、手に大きな肉切包丁をぶらさげ、心配しんぱいそうに、

「庭にわの木戸きども通用口つうようぐちのドアも、みんなしめるのをわすれていたんだ。そのうえ、庭の木戸はあけっぱなしになっていたんだが：

…」

「透明人間とうめいにんげんが、そこからはいりこんだんじやないか？」

気の早い馬車屋ばしやが、おやじが話しおわらないうちに、こわそう

にさげんだ。

「調理場ちようりばにお手伝いが二人いたが、だれもはいつてきたけはい

はなかったそうだ」

「しかし、ゆだんはならないぞ！」

警官けいかんはあたりを、ぐるぐると見まわしながらいった。黒ひげ

の男は、ぐっとピストルをにぎりなおして、調理場ちようりばのほうをに

らんだ。

そのとき、ぎ、ぎぎいつーと、おくの部屋へやのドアが、はげしく

きしむ音がしたと思うと、あっと思うまもなく、ぱっと大きくあ

けはなされた。

酒場さかばの事件じけん

トーマスのかなきり声がひびいた。それはちょうど蛇へびにみこまれた小鳥の、悲かなしいさけび声に似ていた。

「それっ！」

三人はカウンターをとびこえて、かけつけた。黒ひげの男のピストルがなった。

と、同時に、おくの部屋へやの鏡かがみが音をたててくだけ落ちた。

「助けてくれ！　だれかきてくれ！」

トーマスは、目に見えぬ人にひきずられながら、じたばたともがいている。

三人は顔を見あわせてためらった。敵の姿は、^{てきすがた}ぜんぜん見えな
いのだ。どうやってトーマスをかれの手からうばい返して助けて
やればいいのか、さっぱりわからなかった。

そのひまにトーマスは、ずるずるとひきずられて、おくの部屋^{へや}
から調理場^{ちようりば}へひきずりこまれていった。棚^{たな}からフライパンや鍋^{なべ}
が、けたたましい音をたててころがり落ちた。

「どけろ！ どけろ！」

警官^{けいかん}はおやじをおしのけ、トーマスの首^{くび}すじをおさえている
手があると思われるあたりに、ぎゅつとしがみついた。

「ええい！　じやまするな」

恐^{いか}りにもえた声がして、警^{けい}官^{かん}はもの^みの見^{ごと}事に、その場になぐりたおされた。

トーマスは必^{ひつ}死^しになつて、ドアのとつ手にしがみついたが、なんのかいもなく、みるまにひきずられていった。後^{あと}からとびこんできた馬^ば車^{しゃ}屋^やとおやじは、めちやくちやに手足をふりまわしているうちに、とうとう、透^{とう}明^{めい}人^{にん}間^{げん}の体^{からだ}のどこかをつかまえた。

「つかまえたぞ！　みんなこい！　ここにやつがいるぞ！」

「いたぞ！　透^{とう}明^{めい}人^{にん}間^{げん}がいたぞ」

二人は、つかまえたが最^{さい}後^ご、どんなことがあつてもはなすものかと、むしやぶりついてあばれまわっている。

さすがの透明人間とうめいになんげんも、トーマスをつかまえていて、二人を相手あいてでは、戦たたかえるわけがない。

「ちくしうめ！」

いまいましてに舌したうちして、トーマスをはなした。二人がむやみにあばれて、げんこつをぶんぶんふりまわすので、透明人間とうめいになんげんもいささかもてあましてきたらしい。

「うん、なんだって、じゃまをしやがるんだ。おまえらの知ったことじゃないんだ」

透明人間と二人は、はげしく取っ組みあつてあばれた。

そのうち、やっと起きあがつた警官けいがんも加勢かせいにかけつけ、両手りょうてで水を車みずぐるまのようにふりまわして、目に見えぬ敵てきにおどりかか

つていった。

トーマスは、あばれまわっている人たちの足もとを這^はいまわりながら、必死^{ひっし}で逃げだす道をさがしている。

^{ちようりば}調理場での大乱闘^{だいらんとう}が二十分もつづいたころ、

「おや、おかしいぞ。やつはどこへいつちまったんだ。外へ逃げたのか？」

黒ひげの男が、ふいに、きよろきよろとあたりを見まわしてさけんだ。

「中庭^{なかにわ}へ逃げたんだ。敵^{てき}は中庭だ」

警官^{けいかん}がまっさきにたつて、中庭にとびだそうとした一瞬^{しゆん}……。。

ぴゅうつ——と風をきつて屋根^{やね}がわらが、かれの頭をかすめて

飛んできた。

調理台の皿さらこぼち小鉢が音をたてて、みじんにくだけ散る。

「ようし、おれがひきうけた」

黒ひげの男は、ひと声たかくさけんで、警官の肩かたごしにピストルをつきだし、つづけざまに五発、透明人間のいるらしい方向ほうこうにむけてぶっぱなした。弾たまはうなりを生しょうじて飛とんでいった。ピストルの音がしずまると、庭にわはしいんとしずまりかえった。

かわったことは、なにも起こらなかった。

「五発うったぞ。こいつが一番ききめがあつたろう。もう、だいじょうぶだ。透明人間の死さががいを探そうじゃないか」

恐るべき発見

ケンプ博士の来客

その日の夕方、ケンプ博士は、こじんまりしたかれの書斎で、書きものをしていた。

博士の家は町をみおろす、丘のうえに建っている。そこからは、丘のふもとの『銀ねこ』酒場や、バスの停留所が、ひと目でみることができた。おだやかな静かな町で、これといって騒がない事件がおこらない平和な町であつた。

博士のへやの書だには、ぎっしりと本がつまっている。自然

科学、薬理学の本がおもで、窓ぎわの机には、けんび鏡、スライド、培養えき、くすりのびんなどが、いちめんにならべてあった。

とつぜん、ピストルの音がした。ピストルの音は一発だけではなかった。つづけざまに、五発の銃声が夕空にこだまして、街の静寂をやぶった。

博士は気がかりになってきた。

この平和な街にピストルの音がひびくのは、きつとなにか起こったにちがいない。

「なんだろう？」

博士は南がわの窓をおしひらいて街を見おろした。

いつもとかわらぬしずかな景色^{けしき}だったが、しばらく耳をすませていると、ちょうど、『銀^{ぎん}ねこ』酒場^{さかば}のあたりで、がやがやとさわぐただならない人声^{ひとごえ}が、風にのってきこえてきた。

「酒場^{さかば}のあたりだな」

はくし

博士はつぶやいて、なおもじつと、夕方^{まち}の街を見おろしていた。

ゆうぞら

夕空^{やみ}はしだいにくら闇^{やみ}のいろにつつまれ、ほそい新月^{しんげつ}が夢^{ゆめ}

すがた

のような姿^{すがた}をみせ、星^{ほし}もふたつみつっ数をましていった。

みなと

港^{みなと}にとまっている汽船^{きせん}に、あかりがつき、きらきらと宝^{ほう}石^{せき}の

ようにきらめいているのが、とりわけ美しく思われた。

はくし

博士は、いつかピストルの音のしたことなどわすれてしまつて

いた。

さわぐ声もきこえなくなっていた。

博士は窓を^{はくし}しめ、もう一度、机のまえにすわった。一時間ほど

たったとき、玄関のベルがはげしくなった。応対^{げんかん}にでていく

お手伝いの足音がした。

しかし、それっきり、なんの音さたもなかった。

「おかしいな？ だれか訪ねてきたのではなかったのかな？」

博士は、ふと気になった。大いそぎでお手伝いをよび、

「いまのベルは、郵便配達^{はくし}だったのかね？」

「いいえ、だんなさま。それがおかしいのでございますよ。ベルはたしかになりましたのに、玄関にはだれもいないのです。おかた、子どものいたずらでございましょう」

「子どものいたずらか」

お手伝いがひきとつていくと、博士はスタンドを手もとにひき

よせ、一生けんめいに書き物をはじめた。

部屋の中はしずかで、時をきざむ時計の音だけがきこえている。

夜の二時になった。

博士は書きかけの書類から頭をあげると、

「もう二時か、そろそろ眠くなってきたな、疲れもしたし、こん

夜はこれでおしまいにしよう」

大きくのびをして、灯をけすと、階下の寝室へおりていった。

博士はひどく疲れていた。頭がおもい。

こんな時、博士はいつも愛用のウィスキーを少し飲んで、ぐ

つすり眠るねむことにしていた。

「こん夜もすこし飲んで眠ろう」

博士はひとり言をいって、上着うわぎとチョッキをぬいだままの姿すがたで

だいどころ
台所だいどころにおりていった。

ウイスキーのびんをさげて、ひつかえしてきたとき、階段かいだんの下にしかれているマットに、ひと所、黒いしみができているのが目についた。

「だれだろう？　こんなところにしみをつけて……」

博士はぶつぶつ言いながら、ひよいと身をかがめて、そのしみをながめた。しみは、ちょうどかわきかけた血のように見えた。

「おかしいな、血かな？」

博士は指さきで、そつとさわった。思ったとおりだった。

「だれがこんなところに血をおとしたのかな？」

にわかに胸さわぎがして、暗い予感がしてきた。

博士は、考えながら寢室にやってきた。

と、そこでもまたかれは、おそろしいことに出会ってしまった。
なにげなく手をかけようとしたドアのハンドルが、血でまっかにそまっているのだ。

これはただごとではない。

博士の全身の血が、さつとひいていくようだった。かれの頭には、その時、夕方書斎で聞いたピストルの音が、ありありと浮かんでいた。

おそろしいことが起こりつつあるのではなからうか？

博士はきつとした表情になり、ゆだんなくあたりを見なが

ら、しずかに部屋にはいつていった。

しかし博士が考えたように、警官のピストルで傷ついたギャ

ングはいなかった。

ギャングはもちろん、ねこの子一匹すら部屋にはみえない。

ただ、ベッドの上のふとんが乱暴にめくられ、血でよごされ、

そのうえ、シーツがびりびりにひきさかれていた。

ギャングは、警官に追われて、この家に逃げこみ、ついさつ

きまでこの寝室にしのびこんでいたにちがいない。

「そうだ。きつとそうにちがいない。なによりの証拠に、ベッ

ドにいままで人が腰^{こし}かけていたらしくぼみができているじやないか」

博士^{はくし}は血^ちですつかりよごれたベッドのまわりを、念^{ねん}いりにしらべた。

「いつのまにしのびこんだのかな？」

博士^{はくし}がふしぎそうにつぶやいた、そのとき、

「やあ、しばらくだったじやないか、ケンプ！」

いかにもなつかしそうによびかける声が、耳のはたでひびいた。

「あつ！」

ふいをうたれてかれは、けげんそうに部屋^{へや}じゆうをぐるぐる見まわした。

どこにも声の主の姿はない。
ぬしすがた

「だれだね？」

博士はくしの声はうわずつていた。しかし、こんどは返事へんじがなかった。ただ部屋へやをよこぎって歩く足音がして、洗面所せんめんじょのカーテンが、生き物のように動き、するするとひらいたと思うと、すぐにもとのようにしまった。

博士はくしは声をのみ、ぶきみに動くカーテンをみつめて棒立ちぼうだちになつていた。

傷きずついた透明人間

それから五分もたったであろうか……。

博士^{はくし}には、ながい時間がたったようにも思われた。

もう一度カーテンがゆれ動き、なかから、ぼんやりと、血^ちのに
じんだほうたいでぐるぐる巻きにした頭^{あたま}があらわれてきた。

頭^{あたま}だけだ。空^{くう}中^{ちゆう}にぼんやり浮^うかびあがつたほうたいまきの

頭^{あたま}は、目もなければ鼻^{はな}もない。いや頭^{あたま}ぜんたいがないのだ。ほう
たいだけが、しっかりとまきつけられている。

もちろん手も足もありはしない。

たいていの者なら、ひと目みただけで気絶^{きぜつ}してしまうところだ。

が、気^き丈^{じよう}な博士^{はくし}はまっさおになりながら、じつとそのふしぎ

なものを見つめていた。

「ケンプ！」

ふしぎなものは博士をよんだ。

「え？」

「おどろいてるな。ぼくはグリッフィンなんだよ。ほら大学で
どうきゆう
同 級だったグリッフィンだよ。おぼえてるだろう」

「グリッフィンだって……なにをばかなことを……この化けもの
め！」

博士はいきなり、ほうたいのほうへ手をのばした。と、どうだ
ろう……。

人の体からだにふれたではないか！

ぎよつとして手をひっこめ、まじまじと空くうちゆう中にうかぶおか

しなものをみた。

「おちついてくれよ、ケンプ。おれはまちがいなくグリツフィンなんだ。ただおれはふとしたことで体からだがすきとおってしまい、人の目に見えなくなってしまうんだ。世間せけんのやつらが透明人とうめいにんげん間まだとさわいでいるだろう」

透明人とうめいにんげん人間は目に見えぬ手で、しっかりと博士はくしの手をにぎりしめて、いっしんに話した。

しかし、博士はくしは、その手をふりほどき、めちやめちやに手をふりまわして、透明人間にぶつかってきた。

「しずかにしろ！ ケンプ、話せばわかることなんだ、話をきいてくれ」

「なにを、このやろう、このばけものめ。話もなにもあるものか、ふんづかまえてやるぞ」

「だまれ、おれがおまえなんかにつかまるものか……」

透明人間は、むかつ腹ぼらをたてたらしく、とうとう、博士はくしの

足をえいっとすくい、ベッドの上にほうりだし、大声をあげて助けをよびそうにしている口の中へ、シーツのはしをぐつとねじこんだ。博士はくしは、こうなつては手足をばたばたさせて、もがくばかりだった。

「しずかにしてくれたまえよ、ケンプ。きみをおどしたり、きみに害がいをくわえるつもりできたんではないんだ。ぼくはいまこまっ
ているんだ。きみの助けがほしくてやってきたんだよ」

博士は、このうえ手むかってもむだだと考えたのか、おとなし

くなった。透明人間は、口におしこんだシーツをとりのぞき、

「ねえ、きみ、どうかぼくの言うことを信じてくれたまえ。ぼく

は大学にいたときと同じグリツフィンなんだ。ただ、あること

で姿が見えなくなったが、人さまの目に見えないだけで、ぼく自

身は、なんにも変わったことはないんだ。心も体も昔のままのグ

リツフィンなんだよ」

博士は物わかりのいい人だったし、頭の働きのするどい人だっ

たので、姿の見えないほうたいの化ものの言葉に真実のあるこ

とを見ぬき、

「ずいぶんきばつな話だが、話をきけばあるいはわかるかもしれ

ん。話してみたまえ。それにきみの言うように、わしの目には、きみの姿は見え^{すがた}ないが、たしかに体は^{からだ}あるらしいな。わしの手がたしかにさわったし、きみの腕が^{うで}わしをなげとばしたからな」

「そうなんだ、そうなんだ。たしかにぼくは頭もある手足もあるんだ……。おそろしい化^ばけものなんぞじゃないんだ。ただ研^{けんきゅ}

究^うの結果で^{けっか}こんなことになつてしまったんだ」

「研^{けんきゅ}究^うの結果だつて？ 研究の結果できみが透^{とうめい}明^{にんげん}人間になつたというのかい？」

「そうだよ」

「信^{しん}じられないね。だいいち、透^{とうめい}明^{にんげん}人間がグリツフィンだと言つたところで、たしかにかれたという証^{しょうこ}拠はないわけだ。顔

をみることもできんし……もつとも声はグリツフィンらしいが」
「きみ、まだそんなことを言うのかい……ぼくはまちがいなくグ
リツフィンだよ。ゆつくり話せば疑いははれるよ。信じてくれた
まえ、ケンプ！」

「では、話してみたまえ」

「話そう、が、そのまえにすまないがウイスキーと食事と着る
物の^{もの}がほしいんだよ。じつはけがをしているので、傷はいたむし疲
れきっているんだよ」

「食^たべ物^{もの}に着物^{きもの}だつて……すこし待^まちたまえ、なにかあるだろう。
が、家のものをさわがしたくないから、まにあわせだよ」

博士は、落^おちつきをとりもどしていた。科学^{かがくしや}者^{しや}らしく、ちみ

つに頭を働かし、このふしぎな透明人間の秘密をできるかぎり探りだしてやろうと考えていた。

「なんでもけっこうだよ。死ぬほどつかれているんだ。なにか食べতেゆつくりと眠りたいだけなんだ」

博士は衣裳戸棚から、古くなったガウンをとりだして、

「これでまにあうかね？」

「けっこうだよ。それにズボン下とくつした、そしてスリッパがあれば申し分ないが……」

空 中くうちゅうの声がへんじをするといっしよに、博士の手からガウ

ンがとりあげられ、空 中くうちゅうでばたばたとゆれていたが、そのう

ち、透明人間が着こんだらしく、しゃんと立ってボタンがひ

とつずつかけられていった。

「やれやれ、これで身じたくがととのつたよ。あとはウイスキーに食べ物があればいいんだ。^{はだかはら}裸で腹をすかせているのは、まったくつらいよ。まだ夜になると裸ではこおりつきそうに寒いし、腹^{はら}がすいてたおれそうになるし、まったくつらかったよ」

透明人間^{とうめいにんげん}は、服^{ふく}をきてしまうと、ゆつくりといすに腰^{こし}をおろした。

「ねえ、ケンプ。早くウイスキーを飲^のませてくれないか」

透明人間^{とうめいにんげん}は、せかせかとさいそくした。

「いま持^もつてくるよ。だが、こんなきちがいじみたことにであうのは、生まれてはじめてだよ。ぼくは催^{さい}眠^{みん}術^{じゆつ}にかかっている

のかな？」

「ばかなことを言いたまえ、ぼくは催眠術なんぞやらないよ」

博士は、足音をしのばせて台所におりてゆくと、冷^ひえたカツレツとパンを手にしてもどつてきた。

「ウイスキーはここにある。さあ食べたまえ」

博士はサイドテーブルにそれらをならべると、ほうたいとナイ

ト・ガウンの化^ばけものに声をかけた。ウイスキーをグラスについ

でやると、ナイト・ガウンの袖^{そで}が動いて、すつとグラスを持ちあ

げた。グラスを持ちあげたというより、グラスがひとりで空^{くうちゆ}

中^{うち}に浮かびあがつていったような感じだった。

口のあたりと思われるところでグラスがかたむくと、みるまに

ウイスキーは飲みほされた。

「ああ、うまい」

つぎに、カツレツが空くうちゅう中に舞まいあがった。つづいてパンも……。

「なるほど、見えないよ。で、傷きずをしているといったが、どこを傷つけられたんだね」

「傷きずはたいしたことはないんだ」

透とうめい明人間はがつがつと口いっぱいにほおばって、むさぼるように食べながら言った。

見るまにウイスキーも食べものも、へっていった。

「ああ、うまい、それにしてもぼくがほうたいをさがしてまい

こんだのが、きみの家だったとはふしぎだな。ぼくは運うんがよかったよ。こん夜は泊とめてもらいたいね。ひさしぶりにゆつくり眠ねむりたいんだ。ベッドを血ちでよごしてすまなかったね。体からだは透とうめい明めいになつていても、血だけはかたまると見えてくるんだよ……。そのためにさつきも、あやうくつかまるところを、きみの所こにげこんでたすかったんだ」

「また、どうしてピストルでうちあいなんかやったんだね」

「ばかなやつが、ぼくの金かねを盗ぬすもうとしたんだ。そいつはぼくがなかまにしようと思つてた男だのに……」

「そいつも透とうめい明めいなのかい？」

「いいや、かれはふつうの人にんげんだよ。あいつはぼくを恐おそれてび

くびくしていたくせに、ぼくをうらぎろうとしたんだ。あいつめ、
こんど会^あつたらぶち殺^{ころ}してやる。ちくしようめ！」

透明人間^{とうめいにんげん}は、はげしく体^{からだ}をふるわして怒^{おこ}りだした。ナイト

・ガウンがそれにつれてぶるぶるとふるえた。

博士^{はくし}は、グリツフィンが大学生のころから、ひどくおこりつぽ

い感情のはげしい男だったのを思いだして、一生けんめいになだ
めた。透明人間^{とうめいにんげん}は、ようやく怒^{いか}りをしずめ、

「ぼくは武器^{ぶき}をつかったりなんかしなかったんだ。それなのに、

やつらはおれにむかつて、つづけざまにピストルをうつんだ。た
いていのやつらはぼくをこわがって、ぼくを追^おっぱらおうとして
乱暴^{らんぼう}するんだよ」

「なるほど、が、きみがそんな体になつたいきさつを、話してきかせてほしいな」

「それはゆつくり話すよ。そのまえに、たばこがほしいんだが」
博士ははくしいわれるままに、たばこを透明人間とうめいにんげんにあたえた。ところが、見るからに奇怪きかいなことが起こつた。それは透明人間が、うまそうにたばこを吸すいはじめると、たばこの煙けむりが流れるにしたがつて、口くちからのど、そして鼻はなと、そのかたちがぼんやりとうきあがつてきたのだ。

「ありがたい。きみのおかげで、寒ささむから空くう腹ふくからものができることができたよ。そのうえ、おちついてたばこをすうことまでできたんだ。まったく感謝かんしゃするよ。しかし、ケンプ、きみは学が

生時代くせいじだいと、ちつとも変わっていいいな。きみのようにどんなときでも落ちつきはらって、てきぱきと物ごとをかたづけてゆける人間こそたよりになるんだ。これからどうか、ぼくをたすけてくれたまえ」

透明人間とうめいにんげんが言った。博士は、じぶんもちびちびとウイスキーをのみながら、

「いったいきみはぼくに、なにをやれというのだね。ぼくは人をたすけるどころか、ぼく自身どうしたらいいかと思いまよっているんだよ」

と、博士はくしはくらい表情ひょうじょうでこたえた。そのうち透明人間とうめいにんげんは、にわかにうめき声をあげ、体からだをえびのようにまげ、頭をかかえこ

んだ。

熱^{ねつ}がでてきて、傷^{きず}がいたみはじめたのだ。

「きみ、この部屋^{へや}で朝までゆつくり眠^{ねむ}りたまえ。そうすればきつと、あすの朝は気分^{きぶん}もさわやかになるだろうから……」

博士は親切^{しんせつ}にすすめた。ところが透^{とう}明^{めい}人間^{にんげん}は、苦^{くる}しそうにうなり声をたてながら、どうしても眠^{ねむ}ろうとしなかった。

「きみ、えんりよしないで眠^{ねむ}りたまえ。そうすれば気分もよくなるし……」

透明人間は、なにを思っただのか、しばらくだまって博士をじつと見つめていたが、

「ぼくは、心をゆるした人間につかまるのはいやだね」

と言った。博士はぎくりとした。

なにもかも見すかしたような透明人間のことは、博士の心をぐさりと突きさした。

とも
友をどうしよう

「ぼくがきみを警官の手にわたすなんて、そんなばかなことがあるものか……ぼくを信じてゆつくりとやすみたまえ」

しかし、透明人間はどこまでも用心ぶかった。部屋のなかをねんいりに見わたしてから、ふたつの窓をしまで、そしてドアの鍵をあため、警官がまんいちかれをおそうことがあつ

ても、逃げだす道があることをたしかめてから、やつと、よこになつた。

「おやすみ」

博士が透明人間とうめいにんげんに言つて、ドアをしめようとすると、急にきゆうナイト・ガウンがすーっと近づいてきて、

「だいじようぶだろうね、ケンプ。ぼくをゆつくりねむらしてくれるね。警官けいかんにわたしはしないだろうね」

はくし博士は顔いろをかえ、

「わすれたのかい。たつたいま、やくそくしたじゃないか。よけいな心配しんぱいをしないで、ぐつすりやすみたまえ」

ドアをしめると、すぐに中から鍵かぎをかける音がした。

博士は、

「やれやれ、とうとうじぶんの寢室しんしつから追いだされてしまった。まるつきり、夢ゆめをみているのか、気がちがつているのか……わけがわからない」

なんども頭をふりながら、廊下ろうかをゆつくりと歩いて書斎しよさいにはいった。

博士は、ぐったりといすに身をなげだして、もの思いにしずんでいたが、

「そうだ、新聞しんぶんを見れば、なにか手がかりがつかめるかもしれないぞ」

ぽつりとひとり言ことをもらし、いくとおりもの新聞しんぶんをかきあつ

め、机つくえの上にひろげて、むさぼるように読みはじめた。

どの新聞しんぶんも、アイピング村でのさわぎが、大げさに書きたてられてゐる。

「ふうん、村人をなぐりたおしてあばれまわったというのか……
なんて乱暴らんぼうなことをするのだ。えつ、なに、巡査じゆんさはなぐられて
気きぜつしたつていうのか。そして宿屋やどやの女主人おんなしゆじんはおそろし
さのために、寝こんでしまったのか。なんというおそろしいこと
をやる男だ」

博士はくしは、ぼんやりと前方ぜんぽうを見つめて、考えこんでいたが、ぽ
とりと新聞を手から落としてしまった。いくら考かんえても、この奇き
怪かいな事件じけんははつきりしない。

博士は、長いすによりかかつて眠ろうとしたが、目がさえて、寝つかれそうもなかった。

やがて、窓から、しらじらと朝のひかりが流れこんできたが、博士はまだふいに飛びこんできたやっかいな透明人間を、どうしようかと思いなやんでいた。

「やれやれ、これでやつが起きだしてくれば、また、服だけの化けものと、しかつめらしい顔をして話し、なんにもないところへ、たべものがつぎつぎと消えていくのを見ていなくてはならないのか。どうかして、この災難からのがれるすべはないかな」

へいぜいは頭のするどさをほこり、どんなことでもあざやかにかたづけてしまう博士も、思ってもみなかった透明人間には、す

っかり手をやいたらしかった。

夜がすっかりあけはなたれると、お手伝いが朝の新聞をかかえてやってきた。

博士は、お手伝いにむかい、

「いいか、朝ちようしよく食しょくを二人まえ用意よういして、ここまでもつてきなさい。

そしてわしが呼よぶまで、二階かいへかつてにくることはならんよ。わかったな」

「はい」

お手伝いは、博士が研究であたまをつかいすぎて、気が変になつたのではないかと、心配しはじめた。

博士はくしは、お手伝いがはこんできた熱あついコーヒーをすすると、い

くらか気分きぶんがはつきりした。

朝の新聞しんぶんをひろげ、透明人間とうめい にんげんのことが書かれているところを、ねんいりに読んだ。

「新聞には、透明人間は狂人きやうじんになつたにちがいないと書いて

あるぞ。じつさいやつは、氣がくるつてゐるにちがいない。なにをやりだすか、わかつたもんじやない。しかも空氣くうきのように自由じゆうな身だ。悪事あくじをやりだせば、こんなおそろしい敵てきはない。そいつがおれの家いえにまいこんできたんだ。それにやつは、昔むかしの友だちのグリツフィンだというのだから……」

博士は机つくえのまえに、どつかりと腰こしをおろすと、ながい間、頭をかかえて考えこんでいた。

「おお、どうしてそんなことができよう——友だちの信らいをうらぎるなんて……。だが……たとえば友だちであつても——」

博士は、思いまよつたすえ、ひきだしから便せんをとりだすと、ペンを走らせだした。

書いてはすて、書いてはすて、博士はなんども書きなおして、やつと一通の手紙をかきあげると、封をして、宛名をしたためた。それには肉太の博士のいつもの字で、

『ポート・バードツク署 アダイ警部どの』——と書かれてあつた。

ひかりいろ
光と色

透明人間とうめい にんげんは起きあがるやいなや、あばれはじめた。けさは

ひどく、きげんがわるいらしい。

いすをなげとばし、洗面所せんめんじょのコップをたたきわった。

もの音で博士はくしが、あわててかけつけてきた。

「どうしたのだ？ なにか気にいらないことでもあるのかい？」

「なに、頭の傷きずがすこしばかりいたみだしたので、気分きぶんがすぐれ

ないんだ。いやな気もちがするんだ」

博士はくしはだまって、ちらばっているガラスのかけらをひろいあつ

め、

「きみのことが、すっかり新聞にのっているよ。世間せけんは透明とうめい にん」

人間^{げん}のうわさでもちきりらしい。ただ、ぼくの家^{うち}にきみがしのびこんでいることは知らないがね」

「うるさいやつらだ！ なぜぼくを、しずかにしておいてはくれないんだろう」

「それはむりだよ。世の中は、物^{もの}わかりのいいやつばかりでできてやしないんだ。そいつらは、どこまでもきみをつかまえようとさわぐだろうね。そこで、これからどうするかね？ むろん、ぼくはできるかぎりの手^て伝^{つた}いはするよ。だが、きみはいつたい、どうしたいと思^{おも}ってるのかね」

透明人間^{とうめいにんげん}は考えこんでいるらしく、ベッドのはしにすわりこんだまま、だまつている。

ケンプ博士^{はくし}は、しばらくしてから、さりげなく、

「書齋^{しよさい}に朝食^{ちようしよく}のよういをさせてあるよ」

と、さそった。透明人間^{とうめいにんげん}はすなおに立ちあがり、博士^{はくし}のあとについて書齋^{しよさい}にはいつてきた。

ゆうべとおなじように、ナイト・ガウンだけが、すーっと食卓^{しよく}のまえにすわりこんで、手も口もなんにも見えないのに、ど
んどん食べはじめた。

はじめて見たときほどおどろかなかったが、やはりへんな光景^{こうけい}だった。

食事^{しよくじ}がおわりかけたころ、ケンプ博士^{はくし}は、

「これから先のこと^{さき}を相談^{そうだん}するまえに、なぜきみがそんな体^{からだ}に

なつたか、くわしく話してもらいたいね」

透明人間とうめいにんげんは、

ナプキンをとりあげ、ゆつくりと口のあたり

と思われるところをふき、

「かんたんなことなんだ。きみだつて説明せつめいをきけば、なーんだ、

と思うよ。奇跡きせきがおこつたのでも、なんでもないさ」

「きみには、かんたんかもしれないが、ほかの者にとっては、奇き跡せきとおなじくらいふしぎなことだよ」

「はっはっは」

透明人間とうめいにんげんは、

ケンプ博士はくしに会つてからはじめて、ゆかいそ

うに笑わらつた。

「さて、それではなにか話そうかな。ぼくが、はじめ医学いがくを勉べ

んきよう

強^う していたことは、きみも知っているとおりだ。その後、ふ

としたことから医学を研^{けんきゆう}究^くすることをよして、物理^{ぶつりがく}学^{がく}にう

つつたんだ。ことに光^{ひかり}の反^{はん}射^{しや}とか屈^{くつ}折^{せつ}とかが、ぼくの興^{きよう}味^み

をとらえてしまったんだ」

「昔^{むかし}からきみは、そういうことを研^{けんきゆう}究^くするのがすきだったじ

やないか」

「そうだよ。しかも、この研^{けんきゆう}究^くは人があまりやっていないの

で、いくらでも研究^{のこ}することが残^{のこ}されているのが、若い^若い^いぼくには、

たまらない魅^み力^{りよく}だったのだ。まだ二十二才^かのわかい科^か学^{がく}者^{しや}だ

った^しぼくには、これに一^し生^{しょう}をささげて、いつかは世^せ間^{けん}のやつども

を、あつといわせるような研^{けんきゆう}究^くをやりとげようと決^{けつ}心^{しん}した

んだ」

透明人間とうめいにんげんは、いつもの、いんきくさい世よをのろったような

声とはまるでちがう、わかい張はりのある声で話しつづけた。

「それから**のぼく**の頭には、研究けんきゅうのことよりほかは、なにも

なかったね。寝ねてもさめても考えるのは、研究けんきゅうのことばかり

——六カ月ほどたつたとき、はつと思いついたことがあつたのだ」

「どんなことだ」

「きみも知っているとおり、物が見えるということとは、光が物に

あたつたとき反はん射しやするか、そのまま吸きゅう収しゅうされてしまうか、

または光がおれまがる具ぐ合あいによつて、いろいろな色とか、形とか

が、それぞれの姿すがたをもつて目にみえるので——光のこの三つの働はたら

きがなかったら、われわれは物をみることができないわけだ」

「そうだ」

「たとえば、われわれが赤い布ぬのをみるとするね。赤くみえるのは、
太陽たいようの光線こうせんのなかで赤い色のところだけを布ぬのが反射はんしゃして、

あとの色はみんな吸すいこんでしまうからなんだ。また光をぜんぶ
反射はんしゃしてしまえば、白くきらきらかがやいてみえるだろう。

そしてふつうのうすいガラスが、光のすくないうす暗いところな
どでは見にくいわけは、光をほとんど吸きゆうしゆう収しゆうしないし、はねか
えすことも、おれまがる度合どあいもすくないからなんだ」

透明人間とうめいにんげんはむちゆうで、しゃべりまくっている。ケンブ博は
士くしはあきれ顔をして、じつと相手あいての声をきいていた。

「そのガラスをこなごなにして、水のなかに入れてみたまえ。たちまち見えなくなってしまうだろう。これは水とガラスは、光がおなじような具合ぐあいにおれまがるからなんだ。これから考えをすすめてゆけば、なにもガラスを水すいちゆう中に入れなくても、水の中に入れたとおなじように見えなくすることができはすだろう」

ガラスと人間にんげん

「そうだ。しかし、人間にんげんはガラスとちがうからな！」

「そんなことはない。人間はガラスとおなじように透明とうめいだよ」

「そんなむちやな話はないよ」

「むちやな話ではないんだ。りっぱにすじみちのとおっている話だよ。人間だつて血液けつえきの赤い色と毛髪もうはつの色などをとりのぞけば、体からだじゆうが無色むしよくで透明とうめいになつてしまふんだ。ガラスとたいてちがわなないよ」

ケン普博士はくしは透明人間とうめいにんげんのきばつな考えに、ただうなずくばかりだつた。透明人間のことはますます熱ねつをおびてきた。

「ぼくがこれを考えついたのは、ロンドンを去つてチェジルストウにいたときだ。今から六年ほど前のことになるがね。その時のぼくの先生せんせいのオリバー教授きょうじゆというのは、じつに根性こんじやうのまがつた男で、学者がくしやのくせに学問がくもんや実験じつけんに身を入れないで、世間せけんのひょうばんや名声めいせいばかりに氣をとられているのだ。だか

ら、ぼくはだれにも秘密で、研究をすすめていくことにしたのだ」

「だれの手もかりないで、きみひとりでかい？」

「そうだ。ぼくは研究が完成したそのとき、ぱつと世間に発表して、一夜で天下に名をとどろかせてやろうと考えたんだ。

研究はおもうとおりに進んだ。そのうち、思いもかけない大発見をしたのだ。これはぼくの手がらではないんだ。ぐうぜんなことで、おもいがけなかったものが、さずかったというわけだ」

「ずいぶん大げさなんだね。いったい、どんな大発見なんだい？」

「きみ、おどろいてはいけないよ。ぼくは血を無色にすることができるということを見つけたんだよ。血を無色にすることが

できれば、人間を透明とうめいにすることができるといふわけだ。人間の体からだの血液けつえきを透明とうめいにしてしまえば、体じゅうが透明になるわけだからな。そうなれば、ぼく自身じしん、透明になることはわけないというわけさ。もちろん、そのために体からだに害がいがあつてはなんにもならないが、その点てんは自信じしんがあつたのだ」

「な、なんだつて……なんということを考えだしたのだ。おそろしい人だね、きみは」

「おどろくのもむりはないよ。それを発見したぼく自身、しばらくの間は、ぼうぜんとしていたくらいだからね。ぼくはその夜のけんきゆうしつことを、いまでも、はつきりとおぼえているよ——。研究室

にいるのはぼくひとりで、ひっそりとしずまりかえっていた。ぼ

くはじぶんのこの発見にすっかり興奮こうふんしてしまい、じつとして
いられなくなつた。窓をおしひらいて、夜空よぞらにすかにまたたい
ている星をみあげ、いくどか、おれも透明とうめいになれるんだぞと、
くりかえしてつぶやいた。それでいくらか落ちつきをとりもどし
たんだよ」

「そうだろうね。その気もちは、ぼくにもわかるようだが……」
「ねえ、きみ、考えてみたまえ。すがたを消けして思いのままをや
るのは、人間の昔むかしからのあこがれだったじゃないか。おとぎ話の
なかの魔法使まほうつかいとおなじになれるんだ。こんなすてきなことが
あるだろうか。それをぼくがやりとげたんだ」

透明人間とうめいにんげんは、いきおいこんで話しつつけた。せきをきった

水のように、とまることをしらぬようにさえ思われた。ケンプ博士はしずんだようすで、かれの話に耳をかたむけていた。

「これで、ながい間、ばかな主任教授に見はられながら、苦心したかいがあつたと思つたね。田舎の大学で頭のさえない学生をあいてに心にそまない授業をして、毎日をはじめにすごしてきたほうが、これはどの成功をしようとは、だれも考えなかつたろう。しかし、この研究をかんぜんなものにするために、それからさらに三年の年月、むがむちゆうで研究をつづけたんだ。ところが三年たつてみると、この研究を完成させるには、どうしても金がたりないということに気づいたんだ」

「金……」

「そうだ」

透明人間とうめいにんげんは吐きはすてるように言つて、だまりこんでしまつた。

研究けんきゅうの鬼おに

ケンプ博士はくしもだまりこんで、じつとナイト・ガウンだけの人にんげ間んを見つめていた。

ながい間、なんの物音もしなかった。

ふと、透明人間とうめいにんげんが口をひらいた。

「金がなければ、ぼくの研究けんきゅうをつづけることはできない。や

むをえず、おやじの金かねぬすを盗んでしまったんだ……」

「おとうさんの金を盗んだって……きみが？」

「うん、ところがそのお金は、おやじのものではなかったんだ――。そして……おやじはそのためじさつに自殺をしてしまったんだ」

ケンプ博士は、くらい目つきで、透明人間とうめいにんげんをみつめた。

「ぼくのそのころ、チエジルストウの家をひきはらって、ロンドンのポートランド街がいにもどっていた。部屋へやをかりてすんでいたんだ。おやじの金をぬすんで、いろいろな実験じっけんにいるものを買いととのえたので、ぼくの研けん究きゅうは気もちがいいほど具合よくすすんでいったんだ」

ケンプ博士はうなずいた。そして心のなかで、

（なんというつめたい男だろう。やつは研究の鬼おにになってしまったんだ。やつちの心には、もうあたたかい人間の血が通っていないのかもしれない。おそろしいことだ）

と考えていた。が、透明人間は博士はくしの心のなかのことなどは氣にもかけず、

「おやじの葬式そうしきは風ふうのつめたい、さむい寒い日だったよ。ぼくはおやじがさびしい丘おかの中ちゆうふく腹はらにほうむられるのをみても、考えるのはただ研究けんきゆうのことばかりで、さびしいとも悲かなしいとも思わなかったんだ。葬式そうしきをすませてじぶんの部屋へやにかえってきたときには、はじめて生きているかがあると思つたよ。ぼくはむちゆうになつて研究けんきゆうにとりかかった」

透明人間とうめいにんげんは、ふと口をつむぐと、くらい顔ですわりこんでいる博士はくしに、

「きみ、つかれたのかい？ 顔いろがさえないようだ」

「いや、なんでもない。さあ、つづけたまえ。それからどうなったんだ」

「そのときすでに研究けんきゆうは、九分ぶどおりできあがっていたんだ。

その大体だいたいのことは、浮浪者ふろうしやがもち逃げにしたノートに、暗号あんごう

をつかって書いてある。あいつめ、おれのノートを取りやがって……どんなことをしてもとりかえしてやるぞ。うらぎったやつには、思いしらせてやる！」

透明人間とうめいにんげんはあの浮浪者ふろうしやのことを思いだし、研究の話をす

るのもわすれて、さんざんにののしりはじめた。すると、博士が、
「研究けんきゆうのほうのことをきかせてくれたまえ。そしてどうなつたんだい？」

「ついに待ちのぞんでいた日がきたんだ。その日の実験じっけんには白い羊毛ようもうを使ってみたんだ。実験じっけんはうまくいって、白い羊毛がじつと息いきをころしてみつめているぼくの目のまえで、けむりのように色がしだいになくなり、やがて、すーつと消きえていってしまつたんだ。その光景こうけいは、なんともいいようのないくらい、ぶきみなものだったよ」

「それで……」

「白い羊毛ようもうがすっかり消きえて、ぼくの目に見えなくなつたとき

には、まるで信じられない気がしたよ。ぼくはそつと、羊毛ようもうを
おいたあたりをさわってみた。すると、どうだ！ やはり羊毛ようもう
はまえとおなじ場所に、ちゃんとあるんだ。そのときのぼくの気
もちといったら、うれしいような、気味きみのわるいような、変へんな気
もちだったよ」

ケンはくし博士は口のなかで、そつとつぶやいた。

「信じられん話だが……うそではなさそうだ」

そして透明人間とうめいにんげんに、ひとやすみしないかと言いい、ポケット
からたばこをとり出した。

透明人間は一本ぬきとると、火をつけて口にくわえた。と言っ
ても、やはり空くうちゆう中にたばこがういているように見えるだけで

ある。

「つぎの研究には、ねこをつかつたんだ」

「生きてるねこをかい？」

「もちろんさ。そのねこは階下^{かいか}にすむ、ひとり者の老婆^{ろうば}のかわい

がつているねこなんだ。ぼくは血^ちのいろをうすめる薬^{くすり}やらそのほ

かの薬^{くすり}やらを、苦心^{くしん}してそのねこにのませたんだ。そして薬^{くすり}で、

ねこを眠^{ねむ}らせておいた。ねこがつぎに目をさましたときには、羊

毛とおなじように、けむりのようにきえていたんだ」

「ねこが透明^{とうめい}になつてしまつたつて……？」

「そうだ。もつともすこし失敗^{しっぱい}したところもあつて、うまく消^きえうせてはしまわなかったがね。うまくいかなかったところは、

ひとみと爪^{つめ}だ。ねこは薬^{くすり}をのませると同時^{どうじ}に、ひもでしばって逃げださぬようにしておいたんだ。そのうちに氣をとりもどして、起きあがったときには、からだはかんぜんに消^きえ、ふたつのほそい目と爪^{つめ}だけが、部屋のなかにゆうれいのように浮^ういていたんだ」

「ぶきみな話だ！ それに、ねこがかわいそうじゃないか」

ケン^{はくし}博士は、とがめるように言った。

「持^{もちぬし}主^{ろうば}の老婆が、ねこを探^{さが}しにきて、『わたしのねこが、こちらにきているでしょう。たしかになき声がしていましたよ』と、がなりたて、部屋^{へや}の中をじろじろとのぞきこんだが、ねこはクロロフォルムでねむらせてあつたので、見つかるはずはない。うさぐさそうになんどもながめまわしてから、やっとひきあげてい

ったよ。おかしかったねえ」

「透明^{とうめい}になつてしまつたねこは、その後^ご、どうしたんだね」

「さあ、どうしたかね。透明^{とうめい}になると、ひどくあつかいにくくてね。つかまえようとしてもつかまえることができない。そして、にやあにやあ、なきつづけているので、とうとう、うるさくなつて、窓^{まど}をあけてそとへ追^おいだしてやつたよ」

「すると透明^{とうめい}ねこは、いまでもどこかをさまよつているというわけだね」

「生^いきていればね。だが、おそらく死^しんでいるだろう。目に見えないねこに、えさをやる人もいないだろうからね」

「そうか、かわいそうに……」

博士は、なんにもないところに、ねこの丸いひとみがふたつ、みどり色にひかり、かなしそうに食べ物をもとめてなく声だけがきこえる光景を、ありありと思いうかべて身ぶるいした。

「ぶきみなことだ!」

グリツフィン透明になる

つぎに透明人間が話したのは、いよいよかれ自身の体
が、どのようにして透明にかわっていったか、ということだった。

「一月のことだったよ。雪のふる前の日で、おそろしくさむい日
だった。ながい研究のつかれがでたのか、気分はすぐれず、

いつものように実験をつづける元気もなかったんだ」

透明人間とうめいにんげんはつかれたようすもなく、また話しはじめた。

「四年の間、あけてもくれても、ただ研究けんきゆうを完成かんせいさせるこ

とだけを考えてくらししていたが、もともとわずかばかりしかかった金は、ほとんど使いはたしてしまい、体からだもくたくたにつかれ

きると、なにをするのもいやになってしまった。ぼんやりと丘おかに

のぼって子どもたちがあそんでいるのをながめていたが、そのう

ち、ぼくの体からだが透明とうめいになって人目につかなくなったら、こんな

みじめな境きようぐう遇からぬけだし、いろいろときばつな、ゆかいな

ことができるのではないかと、考えたんだ」

「それできみは、体からだを透明とうめいにするおそろしい仕事にとりかかっ

たのかね？」

「そうなんだ。ぼくは下宿げしゆくにかえると、さつそく薬くすりの調合ちようごうにかかったんだ。そこへ前からぼくのことをうさんくさい目でみていた下宿げしゆくのおやじが、文句もんくを言いにきたんだ。おやじは部屋じゆうをじろじろながめまわして、『あんたはいつたいこの部屋へやで、どんな仕事をしているんですかね、へんなにおいがしたり、夜つびてガス・エンジンがうなったり……おかげで下宿げしゆくじゆうの人間にんげんが、おちおち暮くらすこともできないではありませんか。人には言えねえ怪あやしげな研けん究きゆうでもやっているんじゃないやありませんか……とんだめいわくをかけられたら、たまったものじゃありませんからな』と、くどくどといつまでもいいつつけるので、ぼ

くはどうとうかんしやくを起こして、『うるさい！ でていけつ

！』と、どなつてやつたんだ」

「らんぼうだね！」

「しかたがないさ。おやじは、ぼくにどなられると、かんかんになつておこりだした。ぼくはついにがまんしきれなくなつて、おやじのえり首くびをつかむと、ドアのそとへ力ちからいっぱいなげだしてやったよ。これでぼくは、この下宿げしゆくからもでてゆかねばならないことになつてしまつたんだ」

透明人間とうめい にんげんの着きているナイト・ガウンが、はげしくぶるぶる

とふるえた。そのときのことを思いだして、もういちど腹はらをたてているらしかった。

「こんなわからずやのおやじがいては、とてもじぶんの研究^{けんきゅう}

をこのままぶじにつづけることはできない、とわかつたので、ぼ

くはすぐにつきの手段^{しゅだん}を考えだした。大いそぎで薬品^{やくひん}の調^{ちよう}

合^{ごう}にとりかかり、それができあがると、夕方^{ゆうがた}から夜にかけて、

ぼくは体^{からだ}を透明^{とうめい}にするその薬^{くすり}をのみつづけたんだ——」

ケンプ博士^{はくし}は、そのとき口をもぐもぐさせて、なにか言いかけ

たが、そのまま、透明^{とうめい}人間^{にんげん}の話^{はなし}をだまってきた。

「夜ふけになったとき、薬^{くすり}のために、ぼくはたまらないほど気も

ちがわるくなってしまった。いすにぼんやりと腰^{こし}かけていると、

だれかがドアを力^{ちから}いっぱいたたくんだ。ぼくは動く気がしないの

で、ながいあいだ放^{ほう}っておいたが、どうしてもノックをやめない

んだ。たまりかねてドアをあけると、下宿のおやじが立っていて、なまいきな態度たいどで一枚の紙きれをさししたが、ひよいとぼくの顔をみると、目玉めだまがとびでるほどおどろいて、紙きれかみをその場にほうりだして、ころがるように逃げていったよ」

「どうしたというのだい？ そのおやじは……」

「ぼくも鏡かがみをみるまでは、わけがわからなかったんだ。が、おやじが逃げだしてから、鏡をみて、やつと、やつのふるえあがったわけがわかったよ。ぼくの顔がまっ白にかわっていたんだ。すきとおるほど白くね」

「白く？……」

「そうだ。予期よきしたようにね。それから夜あけまでの苦しみくるは、

ぼくも予期しなかったことなんだ。皮膚ひふはもえるように熱あつくなり、
 体からだじゆうが、かつかつとほてつて、その苦しさときたら、いまに
 も気絶きぜつして、それつきり死んでしまうかと、たびたび思ったほど
 だった。歯はをくいしばつてがまんしたが、うめき声はひとりでに
 高くなり、ついにぼくは気絶きぜつしてしまったんだ」

ケンプ博士はくしは、おそろしさに身ぶるいしながら、心のなかで、
 （やつたましいの魂あくまは悪魔にみいられているにちがいない。でなければ、
 ふつうの人間にんげんに、そんなおそろしいことがたえきれるはずがな
 いんだ）

と、思っていた。透明人間とうめいにんげんは、じぶんの話にすっかりむちゅ
 うになって、博士はくしのことなどわすれてしまっているようだった。

「こんど気がついたときは夜あけだったよ。はげしい苦しみはやんでいたが、ひどい疲れでくたくたになっていた。明けがたの光が窓からさしこんだとき、ぼくはじぶんの手をみて、おどろきとよろこびといっしょになった、言いようのない声をあげたんだ。なぜって——両手がくもりガラスのような色になってたんだ。そして、じつと見つめているうちに、両手はどんどん透きとおって、夜がすっかり明けきったころには、まったく透明になってしまっただ」

「両手といっしょに、体じゅうも透明になったのかい？」

「もちろんだ。一番さいごまで色が残っていたのは爪だったね。じぶんで決心してやったことだが、こうして成功して全身

が透明とうめいになつてしまうと、さすがのぼくも、たいへんなことをやつたなど、心おだやかでなかった。もう一度ベッドにもぐりこんで、昼ひるちかくまでゆつくり眠ねむつて元氣げんきをとりもどすと、研けんきゅ究うに使きつた機き械かいや道どう具ぐを二度ともとにできないように、めちやめちやにしておき、ここからでていくじゆんびに取りかかった。」

「なぜ機き械かいをこわしたんだい？」

「ほかの者に、ぼくの研究をかぎつけられないためき。そこへまた夜のあけるのをまちかねた下宿げしゆくのおやじが、くつ強きやうな若者わかものを二人もつれて、『化ばけものやろうめ、きようこそは、なにがなんでも追いだしてやるからな。腕うでづくでも追つぱらう氣なんだ』といきまきながら、ドアをおしやぶつてはいつてきた。ぼくは、

入れちがいにそとへでていったよ。もちろん、やつらはすこしも気づかなかった。部屋へやのなかにぼくの姿すがたがみえないので大さわぎをしていたよ」

そこで透明人間とうめいにんげんはおかしそうに、くつくくつとふくみ笑わらいをして、また話はなしだした。

「やつらがぼくの部屋へやをひつかきまわしてさわいでる間に、ぼくは、おやじの部屋へやにもぐりこんでようすを見ていたんだ。さわぎはだんだん大きくなって、下宿げしゆくの人間にんげんはひとり残のこらず、そのうえ出入りでいの商しょう人にんたちまでがぼくの部屋へやにはいりこんで、実験じけんの機械きかいや薬品やくひんをいじりはじめたんだ」

「それで……」

「ぼくはそのようすを見ながら、ふと、『こいつらのように無学^{むがく}なやつどもがさわいでいる間はよいが、そのうちに学問^{がくもん}のあるやつがこれを見にきて、ぼくの研^{けん}究^{きゅう}をかぎつけるようなことになるかもしれない』と考えたんだ」

「だってきみは、機^き械^{かい}をこわしておいたんだろう？」

「そうだ。だが、それで安心はしていられないよ。そこで永^{えい}久^{きゅう}にぼくの研^{けん}究^{きゅう}を秘^ひ密^{みつ}にしておく方法を考えたんだ」

「どんな方法だい？ そんなことができるのかい……」

「完^{かん}全^{ぜん}な方^{ほう}法^{ほう}だよ。ぼくは、ぼくの部^へ屋^やでさわいでいた連^{れん}中^{ちゅう}がすっかりひきあげると、そつと、おやじの部^へ屋^やから、ぼくの部^へ屋^やにひきかえして、そのへんにある書^{しよ}類^{るい}や紙^かく^みずを山とつ

みあげ、マッチをすつて、火をつけてやった。燃えあがるのをみて、その上にふとんやいすをつみかさね、さいごにゴム管をひっぱって、ガスをふきださせたんだ。ガスはすぐに燃えあがり、たちまち、ふとんもいすもめらめらと火をふきだした。ぼくは、そこまで見とどけると、そつと玄関から、街へしのびでていったよ。いやな下宿におさらばしてね」

「それじゃあ、きみは、放火してきたというのかい？」

「そうさ。それよりほかに、ぼくの研究を永久に秘密にしておける方法があるかね？　ないだろう」

博士には、そのときの透明人間の声が、地獄のそこからきこえてくる悪魔の声のようにおもえた。

街^{まち}にでた透明^{とうめい}人間^{にんげん}

「街^{まち}へふみだしてみて、ぼくははじめで透明^{とうめい}になったことをゆかいに思ったよ。ぼくがうしろから、通行人^{つうこうにん}の帽子^{ぼうし}をはじきとばしたり、肩^{かた}をぽんとたたいたら、そいつはどんなにおどろいた顔をするだろうかと思うと、まったく考えただけで、ふきだすほどきうきしてきたんだ。ぼくは街^{まち}をあちこちと気ままに歩いていった。ところが、夕方^{ゆうがた}ちかくなると、ぼくはすっかり弱^{よわ}ってしまった。よくはれたあたたかい日だったが、一月になったばかりだもの、まっぴりかではたまったものではないよ。ぼくは歩き

ながら、がたがたふるえどおしだった」

「はっはっはっ、いくら透明人間になっても、人間はやはり人間だよ。ま冬にはだかでいられるものか」

ケン^{はくし}博士は、はじめて気味よさそうに笑い声をたてた。

「笑いごとじゃないよ。日がかたむきかけてくるにつれて、寒さ^{さむ}

はいっそうひどくなつた。ちょうどブルームズベリイ広場^{ひろば}をぬけ

ようとしていたときだ。ぼくは大きなくしやみをひとつした。ま

わりにいた人たちが、いっせいにふしぎそうにあたりを見まわし

た。とたんに、近よつてきた白い犬^{いぬ}が、ぼくをかぎつけたのか、

わんわんとほえたててとびかかってきたんだ」

「透明^{とうめい}になつていても、犬にはわかつたのだろうか？」

「犬にはわかるらしいね。かぎつけるんだ。いまいましい話だが、それからぼくはラッセル広場^{ひろば}まで犬に追われて、力のかぎり走りつづけたよ。ラッセル広場には、まだ人だかりがしていた。犬からのがれてほっとしたのもつかのま、また、つぎの災難^{さいなん}がふりかかってきたんだ」

「つぎの災難つていうのは、どんなことだったのだい？」

「こんどは子どもに見つけられたんだ。もちろんぼくの姿^{すがた}を見つけては^{やす}すはない。ぼくはつかれはてていたので、ひと休みしようと思って、博物館^{はくぶつかん}のまっ白な階段^{かいだん}をのぼっていったんだ。その近くで子どもたちが幾人^{いくにん}も遊んでいたよ。そのひとりがふいに大声でさけんだんだ。」

『あつ、みてごらん！ おばけの足あとだよ。ほらほら、はだしの足あとが階段かいだんにつきつぎとついてるよ。おかしいなあ——だあれも登のぼっていつてないのに、足あとだけがくつついてるよ』この声をきいた時には、ぼくはぎよつとして、どうしていいかわからなくなってしまったね。進めば足あとがつくし、立ちどまつていれば、だれかがつかまえにあげてくるだろう。このとき**のぼく**の気もちをさっしてくれたまえ」

「それで、どうした？」

「そのうち、子どもの声で、やじ馬うまがぞろぞろと集まってきだした。こうなつては逃げるよりほかはない。足あとがつこうが、そんなことにかまつていられなくなつて、ぼくは、すぐそばでまご

まごしている若い男をつきとばすと、いちもくさんにかけた。やじ馬たちはわけもわからず、ただ足あとをたよりにわいわいと追っかけてきたんだ」

「とんだ災難さいなんにあつたものだな」

「まったくだ。なんども街まちかどをまがって、めくらめっぽう逃にげていくうちに、足のうらのぬれていたのが乾かわいてきて、足あとがはつきりつかなくなってきた。しめたと思つて、物かげにかくれ、足のどろをすっかりはらい落として、ゆっくりと休み場所やすばしよをさがして歩きだしたんだ。追っかけてきたやつらは、うすくなつて、ついに消えてしまった足あとをさがして、その辺へんをうろうろしていたよ」

「やれやれ、透明とうめいになつても、いいことばかりじゃないね」

「それはそうだ。だが、もちろん、すてきなことだつてあるからね。かけまわっているうちに体はぽかぽかあたたまつてきたが、すっかり風邪かぜをひいたらしく、しきりにくしやみがでるのには閉へいこうしたよ。落ちついてみると、ぼくの下宿げしゆくのある街まちにきてたんだ」

透明人間とうめい にんげんは、ケンプ博士はくしになにもかも話してしまうつもり

らしく、いっしんに話しつづけている。博士は、なにか、落ちつかないようすが、それでも、じつとかれの話をきいていた。

「そのうち往来おうらいの人たちが、きゆうに、なにかさけびながら、いっさんにかけだしていった。人数にんずうはつぎつぎにふえてゆき、

やがて火事だとわかったときには、どうもぼくの下宿げしゆくのあたり
 と思われる方向ほうこうから、もくもくとまつ黒な煙けむりがすごいきおい
 で、電話線でんわせんとかさなりあつた家のむこうに見えてきたんだ。そ
 れをみて、ぼくは、ほっとしたね。これでぼくの秘密ひみつは安全あんぜんだ
 ——そう考えると同時に、なにか新しい勇氣ゆうきがわいてくるような
 気がしたんだ」

透明人間とうめいにんげんは、一気にここまでしゃべってきたが、なにを思

ったか、いすにふかぶかと身をしずめて、だまって考えこんだ。

ケン普博士はくしは、ちらりと窓まどのそとに、すばやい一べつをなげ、
 だまってすわっていた。

うらぎられた透明人間とうめいにんげん

透明人間とうめいにんげんの秘密ひみつ

「透明人間とうめいにんげんになるということは、はじめぼくが考えたほど、すばらしい、ゆかいなものではなかったんだ。寒いからといって服ふくをきれば、透明人間でいることができなくなる。透明人間でいようと思えば、寒くても服ふくをきることができなくなるばかりか、もつとこまることが起こってきたんだ」

しばらくだまっていた透明人間は、ゆつくりと話した。

「はだかであるより、もつとこまることという、どんなことだ

い？」

ケンブ博士は、つかれてしまっていたので、気のりのしない調ち子ようしでできた。

「おそらく、きみには想像そうぞうもつかないことだろう。透明とうめいでいるために服をきないでいると、食べ物えものを口に入れることができないんだ。なぜって、考えてみたまえ……ぼくがはだかのままでパンをたべるとするね。パンはぼくの口にはいったときから、のどをとおり、胃いにとどき消化しょうかしてしまうまで、人の目にさらされてしまうのだ。体からだの中にはいった食べ物えものがそのまま空くう中ちゆうに浮ういてみえるなんて、考えただけでもぞつとすることだろう。ぼくはそんなことになるのはいやだ。が、そうすれば、ぼくはいくら

腹はらがすいていても、パンひとかけ口にすることができなくなるんだ」

「なるほど、そこまではぼくも考えつかなかったよ。そうすると、透明とうめいになるのも考えものだね」

「もちろん、こまることもあればいいこともある。けれども新しい生活せいかつにふみだしたいじょうは、いやでもやりぬくほかはないんだ。いまとなつては身みをよせる家もなければ、たよりにする人もない。働はたらいて金かねをもうけ、その金で楽しくくらすなどということは、夢ゆめにも思えない身の上になつてしまったんだ」

透明人間とうめいにんげんの声は、しみじみとさびしそうだつた。

ケンブ博士はくしも、さすがにかれの変わった境遇きようぐうに同情どうじようし

て、

「それできみは、それからどうしたんだい？」

「どうするといつて、ぼくは道のまん中につつ立ったまま、どうしていいかわからなくなってしまうたんだよ。雪ははげしく降りだし、寒さと空腹はたまらなくぼくをせめたてるんだ。ぼくはただ雪の中からのがれて、屋根の下でゆつくりとやすんで、腹いっぱい食べたいと、そればかり考えていたよ」

「そうだろうね。で、それから……」

「そのうえ、これこそ思いもかけなかったことだが、雪の中にじつとしていると、体からだに雪がつもって、たちまち、ぼくの体のりんかくがぼーっと浮かびあがってくるんだ。これにはまったくへい

こうしたね。ぼくは身をきるような北風きたかぜが、雪といっしょに吹きつけてくる道を、あてどもなくさまよいつづけたんだ」

「なぜどこかの家の物おきへでも、もぐりこんで、雪の中を歩きまわることからだけでもまぬがれなかったんだ。食べ物にありつくことはできなくても、寒ささむだけはいくらかしのぎやすいのではないか？」

「ぼくだって、それは考えたんだ。ところがロンドンじゅうの家という家は一軒いっけんのこらずドアをしめ、鍵かぎをかけているので、いくらぼくが透明人間とうめいにんげんでも、もぐりこむすきさえなかったんだ。だがぼくはそのとき、ふいにすばらしいことを考えついたんだよ」

透明人間は、そのときのことを思いだしたのか、いきいきとし

た声になって、

「デパートのなかにもぐりこめば、ぼくのほしい物はなんでも手にはいる。それにデパートならはいるにもでるにも、なんの苦勞くろうもないし、どうして早くこのことに気がつかなかったかと思ったね。ぼくはすぐ、そろそろとひっきりなしに客きやくが出入りしているデパートにもぐりこみ、閉へいてん店するのをまっていたんだ。やがて店がしまつて店員てんいんたちがでていってしまった。店の品物しなものはすっかり片づけられ、灯ひはけされて、あれほどにぎわっていたデパートも、しーんとなつてしまった。ぼくはうす暗ぐらくなった店の中をわがもの顔がおで歩きまわつて、下着したぎやくつ下などの売場うりばから、ふかふかしてあたたかそうな下着やくつ下をとりだして身につけた」

「ほっとしたろう」

「きみの言うとおりでよ。服装ふくそうをすっかりととのえおわり、体からだがあたたまってくると、こんどは地下室ちかしつの食堂しよくどうにおりていつて、そこに残にっていた肉にくやパンやチーズを、いやというほどつめこんだんだ。おまけにおいしい果物くだものや菓子かしまで食べられるのだから、まるで天国てんごくのようだったよ。体からだもあたたまり、腹はらごしらえもできると、にわかに眠ねむくなつたんだ。さつそくふとんの売場うりばのふかふかした羽根はねぶとんの山の上によこになり、めずらしくのびのびとした気分きぶんでねむりに落ちていったのだ」

「まるでおとぎ話にでもでてきそうな話じゃないか……」

「ここまでではよかったんだ。だが、朝になるとおもしろくないこ

とがもちあがつたんだ。目がさめたときには、すっかり夜が明け、
 明るい太陽たいようがさしこんでいて、出勤しゅっきんしてきた店員てんいんの話し
 声や掃除そうじをする音がきこえていた。あわててしまったぼくは羽根はね
 ぶとんの山をすべりおりて、どこから逃げたらいいかと、あたり
 を見まわしたとたん、羽根ぶとんの山が音をたててくずれおちた
 んだ。あつと思つたぼくは、思わず横つとびにかけだすと、目ざ
 とい店員てんいんのひとりが、大声で、『あつ、首くびのない人間にんげんがいる
 ぞ！ あやしいやつだっ！』とさけんだんだ」

「そりやあ、きみ、店員だつて、さぞやびつくりしたろうさ」
 ケンプ博士はくしは、ものかげから走りだした首くびのない人間を見つ
 けた店員てんいんたちのようすを思いうかべて、デパートじゆうがひつく

りかえるさわぎになつたろうと考えていた。

「ここであつてはたいへんだと思つたので、死にものぐるいで逃げまわつたんだ。逃げるにつれて、きれいにかざられてあつた花びんがぶつかりあつてくずれ落ちる、電気スタンドがころがる、おもちゃの山がくずれる、さいごに食^{しよく}堂^{どう}をかけぬけて、ベッドの売場^{うりば}から洋服^{ようふく}ダンスのならんでいるところへ逃げこんで、そのかげで、着ているものをすつかりぬぎすてて、もとの透^とうめい^{すがた}な姿になつて、追手^{おつて}につかまるのをまぬがれたんだ」

「やれやれ、苦勞をするではないか……」

「こんなわけで、せつかく手にいれた服はすつかりぬぎすてしまつたので、ぼくはもとのほだかで、ふたたび雪のふる街^{まち}へさま

よいでなくてはならなくなってしまうた。ぼくはデパートをそつ
としのびでると、むやみに腹がたつてたまらなかつた。

しかし腹をたててみても、どうにもなるものではなし、ぼくは
まえと同じように寒ささむとうえになやまされだしたのだ」

「けつきよく、うえをしのいで、たつぷり眠れたねむというだけだつ
たのだね。それでもいいではないか……」

「ちつともよくないよ。ぼくが一番のぞんでいるのは、服を手
いれることなんだ。服を身につけ、帽子ぼうしをかぶり、マスクでもつ
ければ、どうやら人前ひとまえをごまかして、暮くらしていけるのではな
いかと思つたんだ。ぼくはついにロンドンのはずれのうすぎたな
い横よこちよう町にある古着屋ふるぎやにしのびこんで、ほしい物を手に入れ、

できればお金かねもついでに手にいれることにしたんだ」

「金も手に入れるというのか？」

「そうだ。この古着屋ふるぎやでも、いくども見つかりそうになって、ひやひやしたよ。おやじというのは、かわった男で、おそろしく耳がするどくて、ぼくのかすかな足音をききつけ、『どうもおかしい、だれかこの家にしのびこんでるにちがいない』と、ひとり言ごごをいうと、ピストルを片手かたてに家いえ中じゆうをぐるぐるまわりはじめたんだ。おかげでぼくは古着ふるぎの山を目のまえにみながら、どうすることもできなかつたのだ」

透明人間とうめいにんげんは、その男のことを思いだしたのか、急きゆうにいらいらした口ぶりになって、

「いやな男だったよ。うたがい深くふかておく病でびよう、しまいには家じゆうのドアにも窓まどにも、かぎをかけはじめたんだ。ぼくがどこから逃にげることができないようにしておいて、ピストルで射うちとろうとしたんだ。ぼくはそれを知ると、かつとなってしまった。こんなやつに射うたれてたまるものか、ぼくは階かい段だんをおりかけていたおやじのうしろにせまると、いきなり、古いすをふりあげて、やつの頭をちからまかせになぐりつけてやった」

「頭をなぐったって！　なんてらんぼうなことをするんだ。古着ふるぎや屋はきみになぐられるようなことをなにもしていないよ……考えてみたまえ」

「らんぼうする気はなかったんだ。ただ、ぼくはその古着屋ふるぎやで服

をきて、すがたをととのえなくては、こまるんだ。それだのお
やじは、ぼくを追おいまわして、ピストルで射うつつもりなんだから
……。ぼくは追いつめられて、心ならずも乱らんぼう暴をはたらいたと
いうわけなんだ。おやじは物もいわずに、その場にたおれたので、
手もとにあつた古着ふるぎでぐるぐるまきにしばりあげ、さるぐつわを
かませた。そして、ぼくは手ばやく服を身につけ、だいどころに
いつて、たらふくパンとチーズをたべ、コーヒーをのんでから、
帽ぼうし子をまぶかにかぶり、マスクをつけた。ちよつと見たぐらいで
は、透明人間だと気づかれないように身じたくをととのえて、ゆ
うゆうとその古着屋をでてきた」

「で、きみはおやじをそのまま、ほうりっぱなしにしてかい？」

博士は顔いろをかえてさげんだ。

透明人間はおちつきはら

つて、

「もちろんだよ。あとでやつは、さんざん苦心して自由の体にな
つただろう。そうとうきつくしばってやったからな」

博士はしばらく思いなやんでいるようすで、青ざめた顔をうつ
むけて考えこんでいたが、

「それできみは、やつと人なみの生活ができるようになったの
だね」

と、ほそい声でいった。

「いや、人目の多いロンドンでは、やはりうまくいかなかったよ。
食事をしようと思えば、どうしても透明なぼくの顔を給仕人

や、客きやくの目にさらさないかぎり、肉のひとときれも口にいれられないんだ。透明人間なんて、ほんとうに情なさけないものだよ。人目をおそれ、いつもびくびくしながら暮くらさなくてはならないんだからね」

「で、アイピング村へは、どうしていったのだい？」

「研けんきゆう究をつづけたくていったんだよ」

「研究をつづけるためにだつて？　だつてきみの研究は完かんせい成して、望のぞみどおり透とうめい明になったじゃないか……」

「しかし、きみ、考えてくれたまえ。体からだが透とうめい明になったおかげで、ぼくはほかの人にんげん間が持つことのできない力をもつことができるようになった。だが、そのかわり、ぼくは何うもかも失うしなつてし

まったんだ。科学者^{かがくしゃ}として名をあげてみても、ぼくの姿^{すがた}がみえ

ないので、どうにもしようがないだろう。あたたかい家庭^{かてい}をつ

くって楽しく暮らすことも、友だちとゆかいに話しあうことも、

えいきゆう

永久^{えいきゆう}にできなくなったのだ。ぼくはたったひとりぼっちで暮

らすほかはなくなつたのだ。ただ、たったひとつの望^{のぞ}みは、もと

からだ

の体にかえることができる薬^{くすり}を発見^{はっけん}したいということなんだ。

その研^{けん}究^{きゆう}のために、しずかなアイピング村へいったわけだよ」

「なるほど、そんなわけだったのか……」

博士^{はくし}は、ナイト・ガウンの化^ばけもののような透^{とう}明^{めい}人^{にん}間^{げん}をみ

つめた。そこに友人のグリツフィンがいる。かれはながい間、胸

にたまっていた思いをケン^{はくし}博士^{はくし}にうちあけて、ほっとしたのか、

ゆつたりといすに腰かけて、たばこに火をつけた。

悪魔あくまと天使てんし

「ところで、きみはこれから、どうするつもりだい？ なんのた
めに、このバードック町にやってきたんだ？」

はじめに下宿げしゆくで放火ほうか、つぎに、古着屋ふるぎやでおそろしい殺人さつじんを
やりかけている。よくもわずかの間に、とんでもないことを仕出しで
かしたものだ、むかしの友人のかわりはてた異様いようなすがたをな
がめながら、ケンプ博士はくしがたずねた。

「うん。ぼくがここにきたのは、国外こくがいにのがれたかったからさ。

はだかで暮らすのには、イギリスはまだ、寒^{さむ}すぎるよ。洋服^{ようふく}を
きればすぐ人にあやしまれて、追いまわされるし、ぼくは、もつ
と暖^{あた}かい地方へ行ってしまいたいと思つて、この港^{みなと}町^{まち}へきた
のだ」

「それで？」

「ここからは、フランス行きの便^{びん}船^{せん}がでる。フランスへわたり、
汽車^{きしゃ}でスペインへいつて、そこからアフリカのアルジェリアへい
くつもりだ。アルジェリアなら、姿^{すがた}をけしてはだかで暮らしても、
いっこう寒^{さむ}くはないだろうからね」

「アフリカにいくのか？」

「そうだ。ぼくの秘密^{ひみつ}がしれてしまったからには、もう、どうし

ようもない……。ところが、それには、ぼくひとりではやれないのだ。ぼくが荷物にもつをもつて歩くわけにはいかない。そうすると、このまえの金貨きんかが空くうちゆう中をとぶような騒さわぎになって、すぐ、大さわぎになってしまふんだ。そこで、あの浮浪者ふうろうしやをやとつたんだが、だいじな研けん究きゆうノートと金かねをもつて、にげてしまった」

「浮浪者は警察けいさつにいるよ」

「えっ、あいつが……」

透明人間とうめいにんげんが、すつくと立ちあがった。

そのとき、玄関げんかんのベルがなった。

ベルの音をききつけると、透明人間とうめいにんげんはケンプ博士はくしから二、三步とびさつて、

「あれは、なんだ？」

と、するどく言いはなつた。

「なにも聞こえないが……」

「いや、二階へあがってくる足音だ」

「気のせいだよ」

警官^{けいかん}がきたことを、あいてにさとられまいとして、ケンプ博^は

士^{くし}は、おだやかに言つた。

「ちよつと見てくる」

博士がとめようとしたが、透明人間^{とうめいにんげん}はドアに近づいていっ

た。

すると、博士がドアを背にして、その前に立ちふさがつた。

「なんだ、きみは！　じゃまをするのか」

入口に近づけまいとする博士から、ぱつと跳びのいて、透明人間は身がまえた。

「おれをだましたな！」

その声は、怒りにふるえていた。

「警官をよびやがって、よくも裏切ったな……裏切り者め！」

透明人間はガウンの前をひらくと、すばやく、下に着ているものを脱ぎはじめた。

この男を、この部屋から外に出してはならない。博士はドアを後ろ手に開いて廊下にとびだし、ボタンと閉めた。カギがない。透明人間が内側から開けようとして、博士がにぎる把手をひね

った。その力は、ものすごく強かった。博士はドアを開けさせま
いとして、奮闘ふんとうした。ドアのすき間まからガウンの腕うでがのびた。
博士はのどを絞しめつけられ、把手をはなした。博士はガウンの怪
物いぶつに突きとばされた。

博士はくしからの手紙で、いそいで駆けつけた、バードツクの警察けいさつ
署長しよちようアダイ警部けいぶは、玄関げんかんからホールを通って階段かいだんをのぼり
かけたところで、目に見えない怪物と戦っている博士を見て、立
ちすくんでしまった。

「なんだ？」

怪物かいぶつと戦う博士はくしは、倒されたり起きあがったりしながら、二
階の廊下ろうかから階段かいだんのおどり場へのがれてきた。怪物のガウンが

宙を飛んできて、博士におそいかかつて倒した。目の前のできごと
 くに、びつくりしている署長しよちようを、ガウンの化けばものがなぐり
 倒した。

起きあがろうとする署長しよちようを、怪物かいぶつは階段かいだんから下にけり
 落として、動けなくしてしまった。階下かいかには応援おうえんの警官けいがんが二
 人いた。二人はあわてて、宙ちゆうを飛ぶガウンを追いまわした。追
 まわすうち、ガウンは一階のホールの天井てんじようへパツと舞まいあが
 ったかと思うと、落ちてきて、そのまま、へなへなと動かなくな
 った。

玄関げんかんのドアが、人影ひとかげもないのに開いて、ボタンと閉しまった。
 署長しよちようは起きあがったが、顔をしかめて、また、へなへなと

すわった。そこへ、透明人間とうめい にんげんとの格闘かくとうで傷きずだからけの顔となつた博士はくしが、ふらふらになつて階段かいだんを降りてきて、くやしそうに言つた。

「しくじつた。にげてしまつた」

大捜査陣だいそうさじん

透明人間とうめい にんげんがあばれまわるのを見ただけでなく、したたかになぐられ、階段かいだんからけり落とされて動けなくなるほどの目にあいながら、アダイ署しよちよう長は、なおも信じられないという顔をしていた。

そんな顔の署長しやちやうに、血だらけの腫れあがった顔のケンブ博は士くしが、ぐずぐずしてはいられないと、せきこんで言った。

「あいつは気がくるっている。このまま逃がしておいたら、どんなひどいことをしでかすか、わかりませんよ。けさも、これまでにやってきたことを、得意とくいになつて話すんですからね。あきれたもんです。署長！あの男はもう、かなりたくさんの人を傷きずつけています。これからもつと暴れまわつて、町や村のひとたちを恐れさせてやるんだと話していました」

「かならず逮捕たいほしてみせます」

署長しやちやうがこたえた。

「大至急だいしきゆう、警官けいかんの非常召集ひじようしやうしゆうをおこなつて、この町から

透明人間とうめいにんげんがにげだせないようにすることです」

「こころえています。さつそく召集して、道という道に見はりを立てて、あの怪物かいぶつがにげられないようにしましょう」

「汽車きしやや船ふねに乗って、逃げられないように、駅えきや港みなとにも見はりを

つけてほしいですな。あの男は、かけがえのない物と考えている

ノートを取りもどすまでは、この町をはなれないと思います。その浮浪者ふろうしやのトーマスは、警察けいさつに保護ほごしてあるんでしょうな」

「ぬかりはありませんよ、博士はくし！ そのノートのことも」

「透明人間とうめいにんげんをつかまえるには、食物しょくもつをあたえないことで

す。ねむらせないことです。この二つのことを実行じっこうすることで

す」

「なるほど」

署長しよちようがうで組ぐみしてうなずいた。

「たべものは手のとどかないところにしまっておき、透明人間が家の中にはいれないように、町じゅうの家が、戸とや窓まどに力ギをかけておくことです」

「さつそく署しよへもどつて、作戦を立てるとしましょう」

署長は立ちあがつて、博士といつしよに歩きながら話をきいた。
「やつは食しよくもつ物をのみおろすと、消しょうか化するまでは体の中のものが見えるので、しばらくは、どこかに隠かくれてやすまねばならんです。ここが、こちらのねらいです。それと、犬をですな……犬を、できるだけたくさん、かり集めることです」

「ほほ才、透明人間とうめいにんげんは犬には見えますかな」

「見えないことは、われわれ人間とおなじですが、犬はにおいで嗅かぎつけるんです。これは透明人間が、犬にかみつかれて弱つたと、じぶんで話してたことですから、まちがいありません」

「名案めいあんですな。ハルステッド刑務所けいむしょの看守かんしゅたちが知ってる男に、警察犬けいさつけんを飼かつておる男がいるそうですから、さつそく手て配はいしましょう」

こうしている間に、博士はくしの屋敷やしきからにげだした透明人間が、なにをしでかすか知れないと思うと、ケンプ博士は気が気でなかつた。

「透明人間とうめいにんげんのもう一つの弱いところは、凶器きょうきを持つてある

けないことです。鉄棒^{てつぼう}とかナイフとか、太いステッキのような物は、手ごろの武器^{ぶき}……つまり凶器になります。あの男がこれらの物を手にして歩くと、鉄棒やナイフが宙^{ちゆう}を浮いてうごくことになるので、すぐ気づかれてしまいます。ですから、やつが凶器を持つてあるく心配^{しんぱい}はありませんが、凶器につかわれそうな物は、どの家でも、かくしておくように知らせてもらいたいのです」

「ごもつともな意見^{いけん}です。その方針^{ほうしん}で、かならず逮捕^{たいほ}してみせます」

アダイ署^{しよちよう} 長^{ちやう}はこたえた。

「もう一つ、だいじなことがあります」

「なんです？」

「ガラスの破片はへんを道路どうろにまきちらすのです。透明人間とうめい にんげんは、はだかで、はだしで歩いていますから、これは効きめきがありますよ。すこし残酷ざんこくなやりかたですが、そんなことは言っておられませ

んので」

「スポーツマンシップに欠けるようですが、お考えどおり、ガラスの破片はへんをよいさせましょう。目に見えない怪物かいぶつに、あばれられては大変たいへんですからな」

「あの男は、むかしのグリッフィンとは人が変わってしまった。

けだものになって、気がくるつているのです」

博士はくしはアダイ署しよちよう長ちやうがよんだ辻馬車つじばしやに乗って、署長といっ

しよにバードツクの警察署けいさつしよにいそいだ。

石切場の殺人いしきりば ざつじん

ケンプ博士はくしの家をとびだしてからの透明人間とうめいにんげんのゆくえは、どこに行ってしまったのか、さっぱりわからなかった。

みなとまち
港町

ポート・バードツクの人びとは、その日の朝のうちは透明人間の話もうわさにすぎなかったものが、午後になると、ほんものの怪物かいぶつが町にあらわれたと知って、大さわぎになった。

なにしろ人の目に、その姿かたちが見えないのである。道をあ
るいていて、いきなりなぐられても防ぎふせようがない、というのだ。
音もなく家に忍びこまれても、これまた、見えないのだから、ど

うしようもない。町の人は不安にかられていた。げんにその朝、道で遊んでいた子どもの一人が、いきなり何者ともしれないものに突きとばされて、ケガをしている。その場にいあわせた子どもたちは、友だちを突きとばしたものを、だれも見えていないのだ。

透明人間とうめいにんげんの危害きがいから町の人を守るには、怪物かいぶつを捕とらえることである。そのための警察けいさつの手配てはいは着々ちやくちやくとすすみ、おもつたよりはやく、町のこれぞと思うところに、警官が動員どういんされていた。

騎馬巡査きばじゆんさが町をねり歩いては、戸締りとじまをげんじゆうにするよう、家々家家によびかけた。小学校は午後三時には授業じゆぎようをうち切つて、児童じどうを帰宅きたくさせた。町の人は、三人四人と組んで自警団じけいだんをつく

り、鉄砲てつぽうやこん棒ぼうをもって警戒けいかいにあたつた。港みなとの船着場ふなつきば、
 汽車きしゃの停車場ていしやば、おもだつた道の出入り口。バードツクの町を中
 心にして三〇キロの半径はんけいの円にはいる地域ちいきの町や村が、透明人
 間の出沒しゅつぽつにそなえたのである。

透明人間とうめいにんげんにたいする注意書ちゅうきがきが、ケンプ博士はくしとアダイ署しよち
 長ようの名をそえて、町のいたるところに貼はりだされた。食物しょくもつ
 をとらせないこと、眠る場所をあたえないことなどが、書かれて
 あつた。警戒けいかいは万全ばんぜんであつた。

ところが、透明人間のゆくえは、どうなつたのか。その日の朝、
 遊んでいる子どもを突きとばして、ケガをさせたのは、たしかに
 透明人間のしわざにちがいないが、それから先、どこへ行つたの

か、音さたないのである。

ポート・バードツクの町のうしろは、高原こうげんになつてゐる。その遠くまでつづく高原には森もある。透明人間とうめいにんげんはおそらく、その森で、ひと休みしているのではないかと、ケンプ博士はくしも署長しやうちやうも、そのように考えていた。

ケンプ博士はくしは、透明人間とうめいにんげんはかならず町にもどつてくると思つていた。食物しよくもつをもとめてのためか。それだけではない。博士に裏切うらぎられたことへ、仕返ししかえをするために、夜になつたら、きつと、博士の家にあらわれるものと信じていた。

夕方になつた。透明人間のゆくえがわからないまま、遠くへにげられたのではないかと、みんないらしているところへ、町

から一六キロはなれたところで起こった、殺人のニュースがとどいた。むろん、その事件を調べたその土地の警察からである。奇妙な事件であつた。

そこはバードック卿の莊園のある高原の静かな土地で、莊園ではたらく執事が、じぶんの住居に昼の食事にかえるとちゆう、殺されたのである。

もうながいことバードック卿の莊園で執事をつとめるウィックステイード氏は、おだやかな人柄で、ひとにくまれたり、けんかをしたりするような人でなかった。昼になると、莊園の木戸から一五〇メートルほどはなれたところにある住居にもどつて、食事をするのが日課となつており、草原をとぼとぼ横切る執事

を、その日も近所の女の子が見ていた。

「おじさーん」

いつものように声をかけると、いつもならすぐ、にこにこした執事の笑顔と、おどけた返事がかえってくるのに、おじさんはステッキをふりまわして、女の子には見向きもしないで、通りすぎたというのだ。

「おじさん、なにしてるの？」

女の子は、太った執事のあとを追った。おじさんは、おかしいことをしていた。見ると、一本の鉄の棒が、執事があるく前に浮かんで、ふらふらとゆれているではないか。女の子は、びっくりした。世にもふしぎな宙に浮く鉄棒を追って、おじさんはステ

ツキでその鉄棒を、たたき落とそうとした。

すーつと、鉄棒がにげた。

「この化けものやろう！」

口にしたこともないきたないことばを、おとなしい執事しつじが、めずらしく吐はきすてた。つづいて、このやろう……このやろう、と夢むちゆう中で鉄棒てつぼうにステツキで、なぐりかかっていた。

宙ちゆうに浮いた鉄棒と執事しつじとのたたかいは、ブナ林をぬけて、なお

もつづいた。おじさんは汗あせをかいて、へとへとになり、それでも

あきらめずに、なんとかして鉄棒の化けものをたたき落として正し

体ようたいを見破みやぶろうと、追いつづけ、ついにその鉄棒を石切場いしきりばと

いらくさの茂しげみのあいだに追いつめたのである。

そこで執事しつじウィックスティード氏は、鉄棒の化けものの猛反もうはん撃げきをくった。ただ、残酷ざんこくとしか言いようのない、無残むざんな殺さころれようであつた。頭はたたき割わられ、腕うではへし折られて、これがあの温厚おんこうな人の姿であるか、と憤いきどおりを感じさせるほどに、ひどいものだった。

「あいつのやつたことです。透明人間とうめいにんげんのしわざです」

ケンプ博士はくしがニュースを聞いて、署長しやちやうにいった。

「かならず逮捕たいほしてみせます。この町にはいつてきたら、こんどこそ逃がしはしない」

アダイ署長しやちやうは博士はくしと、これからの打合わせをした。

「ぼくは家に帰って、透明人間とうめいにんげんがあらわれるのを待つことに

します」

博士が警察署けいさつしょをでると、外には夕闇ゆうやみがせまり、夜になろうとしていた。街角まちかどには警備けいびのひとが立ち、三人四人と隊を組んだ見張りの者が、町の通りをあるきまわっていた。

透明人間とうめいにんげんの最期さいご

きんちょうのうちの一晩があけたが、なにごともしなかつた。町とうめいにんげんに透明人間があらわれた話はなく、ケンプ博士はくしの屋敷やしきにも、透明人間は近づいてこなかつた。

その朝もぶじに過ぎて、おそい昼の食事を博士がしていたとき

である。一通の手紙が舞いこんできた。切手を貼らないので、郵便税二ペンスの不足となつてゐる。透明人間からのものだ。消印はヒントンデーン局。どこかで紙を盗んで書いて、ポストに投げこんだものとみえる。

——よくも裏切つて、おれを苦しめたな。こんどは、かならず、きさまを殺してやる！

差出人の名は書いてないが、透明人間、すなわちグリツフィンからの手紙にちがひなかつた。

消印のヒントンデーン局のある町からここまで、一時間あれば、やつてこられる道のりである。博士は食事をやめて、窓ぎわに寄つて外を見た。それから家政婦にいいつけて、家じゅうの窓

や戸のカギを調べさせた。どこにも手落ちはなく、透明人間が忍びこむすきは、どこにもない。そこへ警察署長が、しんぱいしてやってきた。玄関げんかんのドアを開くのも、人ひとりがやつと通れるくらいの細目ほそめにして、署長を入れる用心ぶかさで、博士は署長を中にいれると、透明人間とうめいにんげんからの手紙をわたして見せた。

「あなたをねらつて、ここへ……」

「かならずきますよ。もう、そのへんをうろついてるかも知れません」

博士がそう言ったとき、ガチャーンと、ガラスが砕ける音くたが、二階のどこかでした。

「二階の窓だ！」

ポケットにかくしておいた銀色の小型^{こがた}ピストルをにぎつて、博士は二階にかけあがった。署長がそのあとにつづいた。書齋^{しよさい}にかけこむと、庭に面^{めん}した三つの窓のうち二つが、めちやくちやにガラスをたたき割^わられていて、床^{ゆか}いちめんに、ガラスの破片^{はへん}がちらばっていた。

ケンプ博士^{はくし}は、まだ破^{やぶ}られていない三つ目の窓に目をはしらせると、ピストルをぶつ放^{はな}した。ガラスはたまに撃^うちぬかれてひび割れ、三角^{かくじよう}状の破片^{はへん}となって内側へ落ちた。

「やつがいましたか」

署^{しよ}長^{ちよう}が目を大きくしてきいた。

「いや、ここまででは登^{のぼ}つてこられませんよ。ねんのために、ぶつ

放ばなしたのです」

ドスン……と階下かいかで破目板はめいたをたたき破る音やぶがした。つづいて、窓ガラスがやぶられた。しかし、一階の窓には、のこらず鎧戸よろいどがつけてある。かんたんには侵入しんにゅうできないだろう。

「警察犬けいさつけんをつれてきましょう。用意してあるんです。十分とばかりません」

署長しよちやうはケンプ博士はくしからピストルを借りて、外にでた。ところが、アダイ署長が芝生しばふの上を門に近づいて、中ほどにきたときである。目に見えない怪物かいぶつが、署長を襲おそった。

はじめ、いきなりなぐり倒された。署長がピストルで応戦おうせんした。起きあがったが、けり倒されてピストルを奪うばわれ、手をあげ

て家のほうへ歩きだしたが、ピストルを取り返そうとして射ち倒されてしまった。ピストルは透明人間とうめい にんげんの手にわたったのである。二人の警官けい かんが、かけつけてきた。博士は用心ぶかく二人をなかにいれた。そのときはもう、裏にまわった透明人間が、物もの置きから探さがしだした手斧ておので、ガンガン、台所だいどころのドアを叩たたきこわしてるところだった。

「あれは？」

「透明人間とうめい にんげんだ。ピストルを持っている。残りのたまは二発：

：署長しよ ちょうは射うたれた」

おどろく警官けい かんに説明せつめいして、博士はくしは火かき棒ぼうを手にして、台所に向かった。それに二人の警官も火かき棒を持って、あとにつ

づいた。

ガンガン……バリバリツと、がんじょうなドアは叩きやぶられ、見えない手が突きだしたピストルが、博士めがけて、二度、火を噴いた。博士と警官二人は広いホールに逃げて、ホールに入ってくる透明人間を包囲するように身がまえ、火かき棒を前に突きだして敵を待った。

そこへ、手斧が頭上の高さに回転しながら、ホールに飛びこんできた。大乱闘となった。

「ケンブ！ きさまと勝負だ」

怒りにふるえる声がした。警官のひとりが、くるいまわる手斧を、火かき棒でたたき落とした。もう一人の警官は見えない足

で、け倒たおされた。そのあいだにケンはくし博士は、窓まどから庭へとび降り、町に向かつて走った。それに気がついた透とうめい明人間にんげんは、警け官いかんをなぐり倒すと、ちくしょう！ とさけんで、ケン博士のあとを追った。別べつ荘そうがつづく高たか台だいをかけ抜けると、町へ下るながい坂になっている。町へにげれば、追ってくる透明人間を、そこで捕とらえることができる。博士は考えていた。はだしの足音が、すぐうしろに追っている。

博士は走って走って、まっ青になって走った。砂利じやりや石ころが、ごろごろしている道をえらんで走った。透明人間との間が少しはなれた。やっと、町の入口に走りついた。

「透明人間がきたぞーっ」

さけびながら博士は、町の大通りを、鉄道馬車の駅えきのほうへ走った。駅の前に広場がある。その広場には砂利の山があり、シヤベルを持った工夫こうふがはたらいていた。

「透明人間とうめい にんげんだ、にがすな」

手に手に棒をにぎりしめた町の人が、わつと飛びだしてきて、博士のゆくての道をふさいだ。

「裏切りやがったな！」
うらぎ

透明人間がま近にきたな、と感じた瞬間しゆんかん、ケンプ博士は、したたかに顎あごに一撃げきをくらった。倒れたところを脾腹ひばらをけられ、つづいて胸を重いものがおさえつけ、のどをしめつけられた。

工夫こうふの一人が、博士はくしの上になっっている透明人間のせなかを、シ

ヤベルでなぐりつけた。手ごたえがあつた。また、なぐつた。すると、こんどは博士が上になり、警官けいかんもくわわつて、透明人間の手や足をおさえつけた。姿すがたを見せない透明人間が、ぐつたりとなつた。博士のあいずで、みんな手をひいて立ちあがつた。

「あつ？」

群衆ぐんしゅうに囲まれた広場の、博士はくしの足もとの地上に、はじめはかすかに、それから少しずつ……半透明はんとうめいの人の形をした物が姿をあらわし、まもなく、若い男の裸はだかの傷だらけの体からだがよこたわつているのが、見えてきた。透明人間グリツフインの最期さいごである。

(おわり)

青空文庫情報

底本：「透明人間」ポプラ社文庫、ポプラ社

1982（昭和57）年7月第1刷

1984（昭和59）年9月第5刷

入力：京都大学電子テキスト研究会入力班（大石尺）

校正：京都大学電子テキスト研究会校正班（大久保ゆう）

2010年7月31日作成

2013年1月21日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www>

W.AOZORA.GR.JP/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

透明人間

ハーバート・ジョージ・ウェルズ

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 海野十三訳

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>